

明治元年(1868)

〔表紙〕

忠義公史料 明治元年七月二

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

五六六 東征出軍達書数通

五六六ノ一

辰七月廿四日

一雨掛 四荷

同日覆・雨覆相添

一弓張挑灯 四張

右式行進物蔵ヨリ出入借物、

一中小蠟 式百挺

右老行御春屋ヨリ以払切被相渡候、

右 御城下式小隊御兵具方、式小隊小荷駄方、

一中小蠟 百六拾丁

右御城下式小隊目印挑灯拾六張、

同卷張ニ付拾丁ツ、

一付足輕 四人

右同式小隊小荷駄方、

但御兵具方式小隊除、

一町夫 八拾人

拾六人小荷駄方主取夫

右四小隊小荷駄方并火薬箱持夫

右ハ此節越後口出軍ニ付、諸向へ御手当被仰渡候、左

候テ御賄料之儀モ、御法之通被成下度旨、掛御役々ヨ

リ申出、刑部承之、

橋口彦次

一會計奉行并御兵具奉行江相調候事、

〔卷一申出之通申付候事〕

五六六ノ二

加世田衆中

辰七月廿三日

戦兵

一 是枝次右衛門

外二九人

一監軍

最上齋二

右ハ外城式番隊欠跡代被仰付、立日限之儀ハ追テ可被

法亢雄藏

仰渡旨承知仕候処、本隊関東へ出軍被仰付候段、承申

清水・日當山

候間、此節彼表江被差廻候御軍艦江組船被仰付度旨、

合一小隊

陸軍所掛御役々、張紙ヲ以申出、刑部承之、

一監軍

染川源之介

〔卷〕「同日申出之通申付候事」

椎原助左衛門

五六六ノ三

御城下

三番

番兵隊

拾五番隊

一監軍

太田八郎

一監軍

鮫島吉左衛門

四番

太田八郎

國分一郎右衛門

右同

大山甚兵衛

右同

一監軍

林正之進

拾六番隊

二番

林正之進

一監軍

小倉齋之丞

御兵具方隊

大山彦助

木藤彌太郎

御兵具方隊

大山彦助

右同

一監軍

鎌田宗五郎

拾七番隊

三番

鎌田宗五郎

一監軍

太田休左衛門

右同

有馬新右衛門

古川直次郎

一監軍

有馬新右衛門

警衛隊

一監軍

有馬新右衛門

明治元年(1868)

谷山・櫻島

大砲隊

一監軍

加治木

右同

一監軍

右同

一小隊

一監軍

國府・蒲生

合一小隊

一監軍

大山角四郎

鷺頭喜兵衛

池田次郎兵衛

長崎良右衛門

上原善藏  
國分藤之丞

鎌田十太郎  
白尾彦助

右此節出軍付、右之通被仰付候条可申渡候、

七月

右衛門

〔朱〕  
「辰七月廿二日

御本文之通、銘々又八名代へ申渡、大隊長へモ申渡

候、

取次

西 筑右衛門」

五六ノ四

宮之城一小隊

一監軍

重富・都城一小隊

一監軍

苗代川一小隊

一監軍

相良左平太

田代直齋

右八関東表へ出兵付、右之通被仰付候条可申渡候、

七月

右衛門

〔朱〕  
「辰七月廿三日

御本文之通、銘々へ申渡、大隊長へモ申渡候、

取次

島津織部」

五六六ノ五  
辰七月廿四日

一此節苗代川并御兵具方足輕出軍被仰付候付テハ、軍用金之儀ハ、私領兵隊江被準可被相渡哉之旨、物奉行申出、刑部承之、

相良市兵衛

一會計奉行并陸軍掛御役々江相調候事、

〔采〕同日

申出之通申付候事」

五六六ノ六  
人馬奉行

福山清藏〔健德〕

右ハ此節越後表江出軍付、右之通被仰付候条可申渡候、

七月 刑部

〔采〕辰七月廿三日

御本文之通清藏名代江申渡、大隊長・物奉行へモ申

渡候、

取次

西 筑右衛門」

五六六ノ七  
辰七月廿四日

一一小隊ニ付、足輕者人ツ、

右ハ此節出軍付、隊長ニ足輕者人ツ、被召付候様被仰

渡度、左候テ以後出兵之節ハ、御兵具奉行へ掛合之上、時々相渡候様被仰渡置度、大隊長申談候旨、陸軍所掛

御役々申出、刑部承之、

〔采〕申出之通申付候事」

御小姓与

小山嘉太郎

右ハ此節越後口江出軍付、斥候被仰付候条、西郷吉之助江引合可相勤候、此旨可申渡候、

七月 右衛門

〔采〕七月廿三日

御本文之通、嘉太郎名代へ申渡、向々へ取次、証文

ヲ以申渡候、

取次

西 筑右衛門」

五六六ノ八

当正月以來諸所於戰場、手負不具之容体相成候人数、

勤方当分通ニテ、造士館三局之間好ニ任セ、随意ニ致

修行候様被仰付候、左候テ何分申渡迄之間、御扶持米

是迄之通被下置候条、此旨大隊長江申渡、可承向へモ

可申渡候、

但不具之人数取シラベ可被申出候、尤以来右体之向

有之候者、罷下候時ニ被申出候様、是又大隊長江

可申渡候、

七月 刑部

〔采〕  
一辰七月廿三日

御本文之通、大隊長・物奉行・御馬奉行・助教へ申

渡候、

原ノマ、  
取次

「島津織部」

五六六ノ九

今般北越・白川至急之故ヲ以、双方江小銃二大隊・大

砲一座御繰立相成、猶追々可被差出、就テハ諸郷・私

領兵隊之儀不相振趣ニ相聞得候間、此度ハ精撰ヲ以、

二大隊速ニ繰立之手当イタシ置候様、被 仰出候事、

〔采〕  
「今般北越・白川至急之故ヲ以、双方江小銃二大隊・

大砲一座御繰立相成、猶追々可被差出、就テハ諸郷・

私領兵隊之儀不相振趣ニ相聞得候間、此度ハ精撰ヲ

以、二大隊速ニ繰立之手当イタシ置候様、被 仰出

候条、此旨大隊長并地頭・領主江可申渡候、

七月 刑部

辰七月廿四日

御本文之通大隊長并地頭・領主江申渡候、

取次

西 筑右衛門

〔島津忠義家記にて補正〕

五六六ノ一〇

諸郷・私領等兵隊之儀、於出軍先兵氣振兼候故ヲ以、

分隊長以上ハ、御城下ヨリ被仰付候御治定ニ候処、当

分出兵之御兵具方隊之儀、於戰場モ余程兵氣相奮候段、

相聞得候付、以来御兵具方附士隊并御兵具方隊共、一

隊中ニテ隊長之場相勤候様申付候条、此旨御兵具奉行

江申渡、大隊長へモ可申渡候、

七月 刑部

〔采〕  
一辰七月廿六日

御本文之通、大隊長・御兵具奉行江申渡候、

取次

「島津織部」

五六六ノ一一

此節越後口へ出軍被仰付置候御兵具方附士并御兵具方

隊之儀、隊中ニテ隊長之場ヲモ相勤候様申付候付、右

隊江被召付置候小隊長・半隊長・分隊長之儀ハ、都テ

斥候役被仰付、同所江被差出候条申渡、可承向ヘモ可

申渡候、

七月

刑部

〔卷〕  
「辰七月廿六日

御本文之通、大隊長江申渡候、

取次

島津織部

渡、可承向江モ可申渡候、

但國府・蒲生一小隊・大砲狙撃隊并都之城半隊同断

被仰付置候得共、右ハ被成御免候、

七月

右衛門

〔卷〕  
「辰七月廿一日

御本文之通、大隊長并地頭・領主江申渡候、

取次

西 筑右衛門

五六六ノ二  
御城下

右同

一拾五番隊

一拾六番隊

一御兵具方附士一小隊

一御兵具方足輕二小隊

一加治木一小隊

一加治木大砲一座

右越後口江

一清水合一小隊

一財部末吉合一小隊

一園府合一小隊

一重富都城合一小隊

一宮之城一小隊

一苗代川一小隊

右江戸江

右ハ両表至急之段相達候付、為援兵出軍被仰付、不日

蒸気船ヨリ被差出候条、此旨大隊長并地頭・領主江申

五六六ノ三

慶應四年戊辰七月廿九日、京都御話中未タ東国鎮定ニ

至ラズ、鎮撫ノ為メ御東下被 仰出候処、京都警衛兵

隊總テ出払候ニ付キ、募集ノ上御東下被遊候ハ、御

願上御下国候処、因テ諸事御東下ノ御手当ニハ相成候

得共、遂ニ仰出迄ニテ、御東下ノ儀ハ夫形ニ相止ミ候

事、

桂 右衛門

右此節御東下ニ付、御供被

仰付候、

内膳町田

(元年七月中)  
参考書類

五六七 織田織之助へ御沙汰書

明治元年七月

御沙汰書

織田織之助

自今 朝臣被加、本領安堵被

仰付候事、

五六八 桑山圭助へ御沙汰書

明治元年七月

御沙汰書

桑山圭助

今般被 召出、当分知具事被

仰付候事、

五六九 内々新聞記事

慶應四年七月下旬於横濱筆記

横濱ノジヤパンホチトイフ絵入新聞紙ハ、英吉利ノ画工バクマン戯著アル、毎月一二冊ツ、出来、誠ニ面白キ事多シ、サレト悉ク謎ノ様ニ拵ヘタルモノナレバ、其説ヲマノアタリ聞ニアラサレハ、解難キ事少カラス、今月出来ノボンチノ画ニ會津ノ大将ト題セシ士ハ、スネルノ似顔ナルヘシ、口絵ハ官軍ノ兵ナルコト明白ナリ、女ノ大勢箸ヲ持チテ奔走スル体ハ、モグリラシヤメン活計ヲ失ヒテ、離散スル体也、タハマツニ火ノモエテ役所ニ焚エツカントスル所ヲ、大勢ノ異人消サントスル、就中一人龍吐水ノ管ヲ持テ働キ居ルハ、英ノミニストル(Parker)クスニテ、タイマチノ西洋名ハヤブランドト書キタルハ、即チプロイセンノミニストル、(Von Brandt)ン・ブランドノ名ヲ暗ニ仮タルナリ、是ハ此頃ブランド、途中ニテ東久世卿ニ行逢ヒシニ、供連ノ者間違ニヤ、ブランドノ別当馬車ヨリ引ヲロサレ、打擲ニ逢ヒシカハ、ブランド大ニ怒リ、六カシキ応接アリ、ヤ、モスレハ兵端ヲモ開クヘカリシヲ、漸クパークスノ取扱ニテ、事ノ治リタル意ヲ見セタルナルヘシ、尚右之ノ外ニ、大勢ノ海陸軍教師ヲ書タル図アリ、大ナル球ヲ一人ノ力ニテ背負タルモアリ、是ハ新政府ヲパーク

ス一人ニテ助ケントスル意ナルヘシ、末ニ瘦セタル男、船ノリテ往来シ帰り、船ニハヲビタバ、シク書翰ト新聞紙トヲ積タル凶アリ、此凶ハ、マキレモナク英人サ（John）トウニシテ、ノゾキナカラ待チ居ル人ハ、矢張パークスナルヘシ、

此方ノ戦争衆説不同ナリ、横濱ニテ出来ノ新聞紙三種ノウチフラルドハ最慥ナリ、タイムスハ近来追々衰ヘタリ、此節ガセツト、名クル者最流行ス、コレハ虚実ニカ、ハラズ、頻ニ戦争ノ評判ヲ書クユヘナリ、

越後長岡落城ノ事ハ、実ニ惨淡（慘）トシテ聞クニ忍ヒス、去月中官軍ヲ一孤城ニ引受、十日程モ持コタヘシニ、イカナル機会ニヤ、官軍ヨリ打掛タル破裂丸ヒトツ、長岡城ニ備ヘアリシ大砲ノ巢中ヘマトモニ飛入り、大砲ハ忽チ逆裂粉散シ、近辺ノ火薬ニ火移リ、即死数人・手負数ヲ知ラス、此時柱礎ト頼ミシ家老一人即死セシカハ、今ハ籠城叶ヒ難シトテ速ニ退城セシナリ、ソノ時城中ニ在リシ家臣ノ妻女、或ハヲノレカ子ヲ刺シ殺シテ、自刃セシモアリ、又ハ井ニ投シ、堀ノ内ヘ沈ミナトシテ、自殺セシ女子供合セテ百廿余人、実ニ其節烈惜ムヘク、目モアテラレヌ有様ナリシヲ、官軍モ土

民モ今其事ヲ語り出ルニ、落涙セサルモノナシトゾ、爰ニ最新ナル新聞ハ、外国人ノ話ニ、来ル八月中必ス天皇陛下江戸ニ行幸アラセラルヘシト云、日本役人ハ一向知ラス、

英人サトウ七月廿二日出帆、箱館ヨリカラフト・新潟等へ赴キタルヨシナレトモ、慥ニ行方ヲ告ケスシテ出行タリ、小松帯刀ト云フ人ハ、蘭人ガラタマ并洋学者数名（著作真一郎、神田孝平、何礼之助）等ヲ同伴シ、多分来ル廿八日頃出帆シ、上坂アルヘシ、尤後藤象二郎廿五・六日両日之内、来着ヲ待チテ入レ代リニ、成ルヘキモノ風聞ナリ、林洞海モ近々上坂ノ風聞アリ、三澤揆一郎箱館ノ判事加勢トナル、

江戸ノ筋違御門ニテ興行セシ女芝居ノ連中、此節横濱ニテ大当リナリ、就中座元岩井久米八ノ評判尤ヨロシ、弁天境内ニテ、足芸力持アリテ大入ナリ、所々ノ繁昌近年未曾有ナルヘシ、

横濱ノ画凶ハ、弁天通四丁目師岡や板今年改正ニテ、極メテヨロシ、写真師横濱ニ多シトイヘトモ、内田九一ノ右ニ出ルモノナシ、外国人ピワトノ（マ）兵ノ如キモ、一著ヲ譲ラサ



ルコトヲ得ス、九一ハ近日江戸ニ行キテ、江戸中ノ景色ヲ写サントス、同人逗留ハ入谷ノ辺ナリト云、

支那米価ノ日々騰貴ス、一ピコル即チ四斗ニ升入三斗ル半前後ナリ、跡舟急ニ来ラスンハ、尚上ル方ナルヘシ、此頃アル外国人奥州ヘユキテ、仙臺米六百俵積積来レリ、右ハ新政府ヘ対シ不都合ノ廉ニツキ、右之米取揚ケノ談判中ナリ、又プロイセン人ハ夥シク米ト生糸ヲ越後ヨリ持来リシガ、是ハ決シテ取揚ケノ捌ヲ受ケズト云フ、此談判ニツキテハ、双方ニ理ノアルコトニテ、外国人ノ話極メテ長ケレハ、次ノ巻ニ記シテ友人ノ覽ニ備ヘントス、

天行堂白

雲遊居士

五七〇 駅通司ヨリ諸道宿駅ヘ布告

明治元年七月

諸道宿駅ヘ布告写

御用出兵之向々、休泊之節、米錢共夫々御定ヲ以御払被下置候、付テハ代料相当之膳部差出候ヘハ、宿方ニ於テ、別段足シ賄相立候儀ハ無之筈之処、従来之旧弊

ニ泥ミ、不申付料理等差出、却テ宿方難渋之趣申触候者モ有之哉ニ相聞、不埒之事ニ候、方今軍用御多端之御中ニハ被為在候ヘ共、下民之難渋ハ深ク御厭被遊候御趣意之程難有拜戴仕、代料相当之膳部差出候テ、足シ賄等費之不相立様可致、勿論通行之向ヘ対シ不敬之儀ハ、堅ク致間敷事、

辰七月(七日)

駅通司

太政官日誌  
駅通司布告留

五七一 大坂銅会所鉾山局ト改称云々被仰出書

明治元年七月二十五日

今般大坂銅会所、鉾山局ト改称相成候間、山出金・銀・銅共、出高之多少ニヨラス、総テ右局ヘ御買上ケ相成候間、差出可申、且金・銀・銅入用之儀有之候ハ、同局ヘ可伺出候、尤銅之儀ハ、当四月御布令相成候通、国々所々ニ於テ屹度相守可申旨、被 仰出候事、

七月

五七二 丁銀・豆板銀新金錢ト交換ノ件布告書

明治元年七月

通用停止之丁銀・豆板銀共、御改製之新金銭ヲ以、御買上可相成旨、兼テ御布告之御趣意モ有之候処、未タ御改製之場合ニ不立至候間、所持之者ハ先可差出候、右代り金之儀ハ、銀粒相当之価ヲ以、新金銀ニテ追々御下ケ可相成、尤代金御下ケ有之候迄、難渋之者ハ金札御下ケ被置候テモ、又ハ金札ニテ御買上相成候テモ、銘々望ニ任セ可申候、右之趣相心得、来ル八月五日迄ニ員数并望之次第等會計官へ可申出候事、

七月

五七三 兵学校開齋ニツキ入校ヲ勸ム布告書

明治元年七月

大学校御取建被遊、天下之人才ヲ集メ、文武共盛ニ被為興度 思召ニ候処、方今御多事之折柄ニテ、未タ御取調モ行届兼候処、先兵学校仮ニ御取調出来候ニ付、来ル八月二日ヨリ開齋被 仰出候、就テハ兼テ御布令之通、先ツ官・堂上及非藏人・諸官人等、望ニ随ヒ入学可致候、就中三拾未滿小番被免之輩ハ、成丈勤学致

シ候様可心懸旨、被 仰出候事、

但入学之節、一応太政官代へ可届出候、且別紙之通規則被立候ニ付、夫々相心得可申事、

七月二十八日

(別紙)

兵学校規則

一 入学之儀、毎月十五日ニ相限候事、  
但入学当日正服之事、

一 入学願出之儀、雛形之通、美濃紙短冊ニ、位階・姓名・年令・邸宅等相認メ、陸軍局へ可申出事、

雛形

官位何某嫡或次男

邸宅何町何通り何之処 何某

当辰年何歳

一 稽古之生徒、毎朝七字三十分時揃之事、

一 八字ヨリ十字迄練兵、十字ヨリ二十分時ノ間休息、

十字二十分時ヨリ十二字迄兵学、

右之外洋学・数学等稽古、望ニ随ヒ可願出事、

七月

執掌録明治之序  
戊辰七月  
元年七月中  
藩内ニ係ル諸件

五七四 太守公榮之尾江湯治ニ被為入云々達書

明治元年七月

一不遠 御東行御発向被 遊筈候付、其内来ル八日より  
御側廻人数少々御召列ニて、踊之内榮之尾江為 御湯  
治被為 入筈候条、可承向江可申渡候、

但御前様ニも御一同被為 入筈候、左候て御手当之

儀、御手許計被仰付候、

辰七月

圖書

五七五 戦死者ノ靈社設置永世神祭ノ式達書

明治元年七月

一当春以来、東賊御追討ニ付、遂忠死候靈魂御招集之ため招魂冢被召建、同所江靈社相設、永世神祭之式被仰付候条、神社奉行其外可承向江可申渡候、

辰七月

圖書

五七六 人別改奉行會計奉行へ兼務達書

明治元年七月

一人別改奉行

右會計奉行へ兼務被仰付候条申渡、可承向々へ可申渡候、

辰七月

刑部

五七七 米藏・金藏改称達書

明治元年七月

一御高奉行・物奉行之儀、今般請持被相替、是迄米藏出張物奉行之儀ハ、出物藏へ転局、出物出張御高奉行ハ、米藏へ同様被仰付置候付、以来米藏・金藏一曲輪都テ米藏卜相唱、出物藏之儀ハ、金藏卜相唱候様被仰付候条、御高奉行・物奉行へ申渡、向々へ致通達、諸郷・私領へモ可申渡候、

慶應四辰七月

右衛門

五七八 金札一兩代錢九貫文通融藩達

明治元年七月

一金札一兩

代錢九貫文

右ハ今般

皇政御更始之折柄、富国之御基礎被為建、世上一同困窮ヲ御救助被遊度、金札御製造之上、列藩石高二応シ拜借被仰付、於京都此御方様へモ、既右之金札内御下渡相成、追々商人共へ大坂表ヨリ持下、取替可致儀二候間、以來諸藏々入払ハ勿論、諸人一統取扱ニ付テハ、右之通ニテ、致通融候様被仰付候条、此旨向々へ致通達、諸郷・私領へモ不洩様可被申渡旨、地頭・領主へモ可申渡候、

辰七月

右衛門

五七九 諸郷事変ニ際シ届出ノ件ニツキ、地頭・

郡奉行并糺明奉行へ達書

明治元年七月

一諸郷事等之節ハ、地頭ヨリ致取扱、書付無遲滞糺明

奉行へ被差出候様被仰付候得共、人殺等其外重大之事变到来之折、地頭他郷へ廻勤等ニテ、其郷へ不罷居候節、時々地頭へ申出、地頭ヨリ届申出候様有之候テハ、現事詮議等之手当間後相成候間、平常之儀且急速之手当ニ不相拘儀ハ、是迄通ニテ、以來詮議ヲ遂候程之儀ハ勿論、急速手当無之候テ不相済程之事柄ハ、請掛郡奉行ヨリ糺明奉行方へ直宛、早々届可申出候、左候テ往還辺路ニテ船留等之手数ハ、是迄之通相心得、第一間後不相成様取計、地頭・郡奉行へハ別段届可申出候、殊ニ当時ハ追々旅人等モ入来居候付、如何様成姦悪巧智之者罷居候モ難計候間、地頭請持郡奉行所役々共ニ至迄、猶又心ヲ用、緩急軽重能々見計、聊迂闊之儀無之様可相心得候、此旨地頭・郡奉行へ申渡、糺明奉行へモ可申渡候、

慶應四辰七月

〔川上久諭〕  
龍衛

五八〇 芸道ヲ以テ士分トナリシモノへ達書

明治元年七月

一芸道ヲ以士分ニ被召出候家筋之三代目迄ハ、其芸ヲ以

御用立候様、只管致出精、若家業等閑ニテ不御用立者

ハ、本之俗生通可被仰付旨被究置候得共、当時相応之

年輩罷成候者ハ、普ク海陸軍方ヘ相勤、且依才能ハ和

漢西洋之学局ヘモ被召付候付、以来右体家筋之者、芸

道受継度者ハ別段ニテ、三代不相過ル共、海陸軍又ハ

学局等之御奉公方相勤度者ハ、其通被仰付候条、屹ト

致精勤候様可被申渡旨御番頭ヘ申渡、可承向ヘモ可申

渡候、

辰七月

前田久憲  
内膳

五八一 諸郷事交届出ノ件ニツキ、再ヒ地頭并受

持掛郡奉行ヘ達書

明治元年七月

諸郷之交事等ハ勿論、諸届向受持郡奉行ヨリ、地頭申

談之上、間後ト不相成候様、札明奉行ヘ可申出トノ趣

ハ、先達テ申渡置候得共、以来右体御届向等之儀モ、

地頭ヨリ致取扱、書付等無遅滞被差出候様被仰付候条、

此旨地頭并受持掛郡奉行ヘ可申渡候、

慶應四辰七月 龍衛

五八二 水野日向ヘ御尋問書

明治元年七月十日

一東海・東山両道之官軍、已ニ江府接近之地ヘ着陣致居

候間、国元鎮撫之事件、逐一相届可申之処、無其儀朝

敵之家来共ヲ召連、私ニ干戈ヲ動シ候段、奉輕侮朝廷

候罪難遁、此一事尤大罪ニ候、猶申分有之候哉、屹度

返答可致事、

一其方家来高橋剛蔵申立書中ニ、日向儀素々勤王之志ニ

候ヘトモ、当家之儀ハ一旦断絶致シ候家之処、徳川家

ヨリ被立置候家柄ニ付、徳川家譜代諸侯中ニモ、水野

家之儀ハ別段之事故、未タ譜代諸侯一人モ上京無之内、

衆ニ先立上京候儀不宜、其方申聞候趣、右ハ一応尤ニ

相聞候ヘトモ、又不当ノ論ニ候、夫井伊家之如キハ、

譜代中尤主タル家ニ候処、夙ヨリ普天率土之大義ヲ弁

明致シ、衆ニ先チテ上京、勤王致居候、又徳川親戚之

藩ニハ、尾州家・越前家ヲ始メトシテ、慶喜ト骨肉之

縁有ル備州・因州等ニ至ル迄、衆ニ挺ンテ、勤王

実効相表シ居候次第ニテ、其方ノミ 朝敵慶喜ニ離レ

候儀、不宜ト申儀ハ有之間敷筈、左候ヘハ勤 王之素

志ト申儀ハ、都テ偽言ニシテ、皇国君臣之大義ヲ取失、

朝敵之臣下彰義隊ヲ引卒シ、不待 王命私ニ干戈ヲ動

シ候段、勤 王之素志有之候者之所為ニ無之事、

一二月下旬、上野警衛彰義隊附属之儀、 朝敵慶喜ヨリ

申付候共、素々勤 王之素志ニ候者、 朝敵附属之勤

向ハ断然相断可申所、其儀無之而已ナラス、却テ 朝

敵之用向相勤度旨、内願致候ニ付、被申付候趣、正ニ

承リ及候、一体在国之家来共之旨趣ハ、一刻モ早ク

朝敵ノ側ヲ不離候テハ、奉対 天朝不相濟次第ト存詰、

頻ニ帰国相促シ候処、其方申事ニハ、役義ヲ蒙リ居候

テハ、帰邑モ相成兼候ニ付、役免許相願許容ニ相成候

者、早々帰国可致旨申聞候由、前許之如キ事実引違ヒ

申出候義、如何相心得候哉、奉欺 朝廷候罪難遁候事、

一在国家共、尾州家へ相謀リ候節、主人日向上京不承服候

者、楔之助上京為致度旨示談致シ候訳ニテ、実ニ勤

王之誠意ニ相違無之処、右等ヲ逆徒ト相唱、自分ヲ勤

王之素志ト称シ、 朝敵附属之者共ヲ、正義ト相心得

候、前後曖昧之申立、全奉欺罔（同カ） 天聴次第、此条如何

相心得候哉、

一其方ニハ戦争之用意無之、且鎮撫之為相頼候彰義隊故、

器械等モ持參不致、右故三月廿三日、右隊之内相馬翁

輔モ容易ニ被生捕候由、右相馬翁輔儀織田主膳ヨリ坂

本平馬方へ書翰使之事故、器械所持無之筈ニテ、何モ

江戸表ヨリ持參不持參ニ關係致シ候訳ニ無之、右ヲ以

テ一統器械持參不致証ニハ不立候、且結城表へ押寄

戦争之節ハ、器械一切無之候ヲ、戦争致シ候哉、戦争

之節ハ双方発砲之趣キ承及ヒ候処、其方申立始終曖昧

之次第候事、

一官軍城下近隣へ差向キ候節、幸ニ自訴可致之処、無其

儀如何之次第ニ候哉、

一官軍ヨリ一応之御沙汰モ無之、城中へ向ケ発砲相成候

ニ付、驚入候トノ申立、夫レ 朝敵之与党ヲ召連入城

致シ居、三道之官軍へ何ノ子細モ不申立候事故、前に

沙汰致シ討入候筈無之事、

一官軍へ御敵対ヲ恐レ候趣之処、已ニ官軍附属之館林人

数へ発砲ニ及候段、如何相心得候哉、前後之申口奉欺

侮 上候罪難遁事、

一重役小場兵馬ナル者ヲ差置、退城致候趣キ、右ハ全一

時ノ作言ニテ、右兵馬ナル者ハ、先ニ小山宿へ罷越シ、彰義隊人数ノ儀ハ速ニ差戻シ、日向ノミ帰城致サレ候様、種々申立候ニ付、面縛被致候趣、其後日向入城之節、又入牢申付置候由ノ処、官軍攻撃甚タ急ナルニ及テ、不得止残置キ候事ニテ、敢テ求テ差置候間、相尋候処、小場兵馬ト相答候ニ付、入牢免許申付候ヘトモ、人ノ臣トシテ、一家ノ難ヲ靖ムル不能罪、是ヨリ大ナルハナシト、即割腹致シ候趣、前件之通り事実正明ナルヲ引違ヒ、終始詐言ヲ以、奉欺 上儀如何ノ心得ニ候哉、

一 小場兵馬儀、面縛入牢ニモ相成候者、老職ノ名ハ相除ケ候答ノ処、尚重役ト相唱候儀ハ、如何之事ニ候哉、結城表ニ於テハ、右様之政事向有之候哉相尋候事、  
一 小場兵馬・稲葉三鶴・光岡多治見等、小山本陣へ罷越、彰義隊小泉高之進等へ面会、種々議論致シ候内、彰義隊中之者共、多人数次之間へ来て曰、王臣勤 王杯ト申唱候者共ハ、此方共ノ所討也杯ト高声ニ罵リ、其上此度当表へ出張之儀ハ、其筋ヨリ内命ヲ蒙リ、且日向ヨリモ頼ニ付、罷越候事故、若此方杯ノ申所ヲ拒ム時ハ、大砲ヲ以テ、一潰ニ致シ可申杯暴言相発シ候次

第、此罵言ヲ以テモ、逆賊タル事顯然ニ候、実ニ此言葉ノ如ク、後果シテ上野ニ於テ官兵ニ抗シ候始末、如是者共ヲ正義ト相心得、召連候杯申候儀不屈至極ニ候事、

一 国元之逆臣ト申唱候ヘトモ、未タ官軍へ敵対候者ハ無之、尤官軍ニ随從致シ、所々奔走之勞有之、右ヲ逆臣ト相唱候儀ハ、如何之事ニ候哉、

一 使者之内一人召捕候儀ハ、彰義隊之者共、処々ヨリ兵器借入、人数催促等ノ風聞有之候ニ付、忍廻リノ者差出候処、脱走西山半三郎外一人、市中ニ於テ見受、早速手配致シ候内、西山半三郎ハ何方ヘカ遁去候由、一人ハ取押遂糺問候処、彰義相馬（駿馬カ）翁輔ト申者ニテ、同隊織田主膳ヨリ、坂本平馬ト申者ヘ之使之申ニテ、書翰懷中致居候ニ付、披見ノ処封中ニ曰ク、此度我々共御内命ヲ蒙リ、且水野日向守ヨリ頼モ有之、旁以出張候間、人数等ノ儀、宜敷英断ノ程頼入候トノ文言、右ノ事件故召捕ヘザルヲ得ス、且不容易心組ニテ出張候儀ニ相違無之事、

一 朝敵ノ臣下タル賊徒、彰義隊ノ者共ヲ正義ト相心得、相頼入城致候故、日向儀モ賊名免ル、不能事、

一官軍へ御疎意申上候儀モ、毛頭無之ハ顯然ト奉存旨、申立候へトモ、其方江戸出立ヨリシテ、以後子細柄一ツトシテ官軍へ申出候儀無之、却テ官軍へ疎意顯然ニ候事、

一最初其方二本松屋敷へ参り、数日滞留致シ候趣、遂探索候処、右ハ全ク家来共ヲ欺キ罷越候由、前日ヨリ日向申居候ニハ、役免許相願居候間、願相濟候ハ早速帰国致候事故、暇乞ノ為養祖父并二本松屋敷へ参り度旨申居候処、養父方へハ罷越不申、直ニ二本松屋敷へ立越、止宿致居候由ニ付、翌日家来共ノ内罷越、他宿無之、早々帰邸致シ候様諫入候処、家橋高橋剛蔵申聞ニハ、一泊ニ泊被致候趣、水野家ニ疵ノ付候様ノ儀ハ、決シテ無之候間、捨置候様申聞候ニ付、不得止帰因致シ候越諸侯他泊之儀ハ、於徳川モ制禁ノ答ニ候処、何方ヨリ被差免、他方へ滞留致シ候哉相尋候事、  
一上野ヲ去リ紀州屋敷ニ暫時罷在候趣、右ハ何人ニ相頼、右邸ニ罷在候哉、  
一二本松藩ノ儀ハ、五月初旬ヨリ 朝敵顯然タルノ所、尚右邸ニ罷在候儀ハ、如何之心得ニ候哉、  
前件之条々具ニ言上可致事、

但箇条書之下へ付紙ニ致シ、迅速差出可申事、

五八三 芝山文平監察被免達書

七月十三日

芝山文平

監察被 免候事、

五八四 大音龍太郎軍監被免達書

七月十三日

大音龍太郎

軍監被 免候事、

五八五 高橋熊太郎參謀試補被仰付御沙汰書

七月十三日

高橋熊太郎

參謀試補被 仰付、奥州出張可致旨、御沙汰候事、



五八六 肥前少将御沙汰書

七月十七日

(編島直大)  
肥前少将

今般両野州鎮撫之儀、被免候得共、彼地出張兵隊之義  
は其俟差置、賊徒鎮圧尽力可有之 御沙汰候事、

七月

五八七 保科弾正忠へ御沙汰書

七月廿日

(正益、飯野藩主)  
保科弾正忠

先般御預相成候林昌之助元領知、(忠崇、旧譜西藩主)  
(信敏、笹井藩主、旧小島藩主)此度瀧脇丹後守へ為  
替地被下候間、近々当職ノ者被差立候、右引渡方無差  
支様可取計事、

五八八 武家屋敷ヲ商人ニ借スヲ禁ス取締御沙汰

書

七月廿三日御布告書

武家屋敷ヲ商人へ借候儀ハ、前々ヨリ嚴禁ニ有之候処、

当春以來相弛ミ、猥ニ町人ニ借置候趣ニ相聞へ候、右

ハ人別調并支配所自他之差別ヲ失ヒ、不取締之筋ニ付、

以來ハ武家地へ商人共差置候儀、一切難相成、是迄貸

置候分モ、早々町地へ引移候様可致候、若家来分杯申

唱、等閑ニ致置候者并人別紛敷者差置候ハ、調之上急

度可及 沙汰候事、

五八九 蘆野雄之助へ御沙汰書

明治元年七月

先般以來白川へ進撃之節、人馬多分ニ差出シ不一方尽  
力之趣、達 御聴神妙ニ被 思召候、猶此上敵愾之士  
氣不相弛、弥勉勵可有之旨、 御沙汰候事、

七月

五九〇 肥後藩へ御沙汰書

肥後

萬里丸

右御用有之、急速奥州辺迄乘廻被 仰付候事、

五九四 全上

五九一 鷲尾隆聚へ御沙汰書

明治元年七月

筑前兵隊

鷲尾侍從(隆聚)

奥州表へ出張可致旨、御沙汰候事、

奥羽追討白川口総督被 仰付候事、

長岡左京亮京師ヨリ着府之事、

五九五 中・下大夫及上士へ御達書寫

五九二 御沙汰書

萬里小路左小弁(博房)

河鱒大夫御用ニ付、上京中錦旗奉行加勢被 仰付候事、

五九三 全上

明治元年七月

岩倉侍從

河鱒大夫

御用ニ付、上京被 仰出候事、

今般御暇被下置候ニ付テハ、銘々帰邑、在所取締兵備充分勿論ニ候、然ル処、子弟以下若年之面々、遠在僻邑ニ有之候テハ、文武研究如何可有之哉、方今之形勢別テ銳意奮発、御用ニ相立候様才能切磋可致ニ付テハ、嫡子以下部屋住ノ分ハ不及申、当主トモ年齡三十未滿之面々ハ、滞京修行願出候へハ、当分陸軍局へ入塾稽古可被 仰付候間、其段相心得可申、左候へハ追々人才御登用之便利ニモ可相成候間、右様被 仰出候 御旨趣難有奉体認、有志之面々ハ早々可申出候事、但身柄ニヨリ、多人數召連在京致居候テハ、修業難相成ニ付、主人ニ候トモ、在留修学之向ハ入塾之上、諸藩塾生同様相心得、格外之省略ニテ入塾可

致、賄等之儀ハ陸軍局ニテ承合可申候事、

七月(六日)

内藤兵部附属

木村新太郎

五九六 大關泰次郎へ御感状

其方悔悟反正致し、潜伏賊徒之居所訴出候段、奇特之至二候、依之為褒美金五兩被下候事、

明治元年七月十日

五九九 七月十二日御沙汰書

先般以來、白川口進撃之節屢憤戦之趣、神妙之至候、此旨速ニ可遂 奏聞候、尚敵愾之士氣不相弛、弥勉励 勤勞可有之候、仍て感状如件、

大友式部

自今 朝臣被召加、本禄如旧下賜候事、

七月

大総督花押

同日、阿波中納言着城之事、

(維新日誌にて補正)

五九七 七月十一日御沙汰書

安藤對馬守

六〇〇 唐津藩へ御沙汰書

五十人

七月十三日

其藩兵隊警城表へ急速出張可有之、 御沙汰候事、

唐津藩

大田原表へ出張、伊州藩(伊)と交代可有之旨、 御沙汰候事、

五九八 全上

會津

六〇一 七月廿日御沙汰書

大村藩

其藩兵隊奥州表江出張可有之旨、御沙汰候事、

六〇二 全上

伊州藩

其藩兵隊奥州表江出張可有之旨、御沙汰候事、

六〇三 全上

肥後藩

其藩兵隊奥州表江出張可有之旨、御沙汰候事、

六〇四 七月二十一日御沙汰書

久留米藩

奥州出張ニ付、翔鶴丸江乗組被 仰付候事、

六〇五 七月二十一日紀藩届書

此度出張被 仰付候ニ付、奥州白川口江弊藩精兵二百

人引纏、明日・明後日両日ニ此表出立可仕候、此段御

届申上候、以上、

七月廿日

紀州中納言内

三輪三右衛門

六〇六 七月二十五日御沙汰書

甲府出張

彦根藩

其藩兵隊、自其表白川口へ急速出張可有之旨、御沙

汰候事、

六〇七 大久保利通日記

明治元年七月

十六日

一今日、岩倉大夫殿出府ニ付、北岡へ書状相托、三字比  
ヨリ、米田虎之助入来、今日ハ金談ニ付、於酔月亭長  
谷川出会ニ付差越、小松モ入来、米田モ参ル、

十七日

一 小松家、今日横濱帰港出勤、上原藤十郎・濱田源兵衛  
横濱ヨリ帰来、金子千五百兩ヲ濱田ヘ渡、

六〇八 全上

七月

朔日

一 休日不参、小大夫入来、  
一 横須賀外国方払凡三万ドル、  
一 各国御借財凡百五十万ドル

元市中取締頭取

村上俊太郎

秋月長門守内

坂田諸潔

岩村虎雄

六〇九 大村藩届書

明治元年八月五日

本月朔日未明、薩兵三小隊一同小名濱ヨリ平ヘ攻撃中、

賊兵城外水田中撤兵ニテ待受候ニ付、小名道ヨリ薩兵

一小隊、一同進撃駆逐之処、直ニ退散、城下杉木中町

家ヨリハ小銃、城中ヨリハ大砲頻ニ打立候得共、此方

ニハ水田散兵ニテ、正面ニ掛リ候処、大砲五六挺城中

砲台上ニ轟発、其機ニ乗シ進撃惣入、川土手ヲ楯トシ

攻撃候処、薩兵二小隊長橋辺之賊徒追撃候折柄、賊勢

挫折候ニ付、今一隊奮戦候得ハ、拔城覆巢不難ト存、

乱発致シ、大砲モ遠地ニ付城下ヘ取寄度存候得共、賊

杉木中ヨリ打立候故、薩兵杉木中ヘ横撃応戦之内、銃

弾雨注之間、大砲取寄、銃砲打立候処、賊兵益畏縮、

然処此方銃砲共弾葉乏鋪相成候故、薩兵ヘ為相知候処、

是又十分無之趣ニテ、不得止退軍決議ニテ、徐歩繰引

等ニテ、一同小名濱ヘ引取申候、此段御届奉申上候、

以上、

七月

浅手 大砲司令士 淵山規矩蔵

深手 兵士 宮原謙造

六一〇 淵邊直右衛門・川南東右衛門ノ書

明治元年七月廿五日

当地去ル二十五日、山手ハ長州受持、平易ノ方ハ薩州受持ニテ、朝四時ヲ期限ニ進撃ノ処、賊兵長岡城下ヘ不意突入、後ヲ絶レ腹背ニ敵ヲ受、皆隊必死ニ防戦、成丈踏コタヘ候得共、乍残念關原ト申所迄退軍、就テハ彈藥モ過半被相奪、最早九万発計手当ニテ甚乏敷、切迫此事ニ御座候、右ニ付御差送給候様、態々谷川八百介・伊東新八・肝付直左衛門早々御差遣シ可給候、此旨御問合申上候、以上、

七月廿五日

淵邊直右衛門

川南東左衛門

## 六一 京都本宮ヨリ来状

長岡戦陣ノ各隊、去月廿五日、海陸大挙シテ攻撃ノ大策ヲ設、同廿三日ヨリ銘々受持ノ台場ヘ進撃致候処、賊徒其虚ヲ察シ、同廿四日夜半過、間道ヨリ三四百人意外ニ出兵、長岡城下并市中ニ押入、大小砲ヲ打立、火ヲ掛候処、屯置候彈藥等悉ク及焼失、勢ヒニ乗シ、賊兵迅速ニ進撃スルニ就テ、官軍前後ニ敵ヲ受、各隊

必死ニ防戦ストイヘトモ、諸所ニ火ヲ掛、彈藥庫ハ勿

論、兵糧運送ノ道ヲ絶シ、終ニ長岡ヘ返サレ、長岡城ニ籠ル官軍朔日出払、此時空城ナリ、進發イカントモスヘカラス、不得止關原トイフ所迄、四五里モ引退キ、至極苦戦ノ為、急報谷川八百介外ニ二人、迅速帰京イタシ候テ、彈藥砲玉急々御差送可給候、尤戦争ノ事実ハ、本人共ヨリ委細可申遣候間、令筆略候、此段早々及御問合候、以上、

上申候、

但淵邊直右衛門・川南東左衛門ヨリノ一封相添、差

八月三日

京都

本宮役所

## 六二 大村藩届書

明治元年八月五日

本月十三日晝七ツ時、薩兵引続小名濱ヨリ繰出、空地山之險地ニ至候得ハ、賊兵土俵ヲ築居、発砲ニ付、薩兵先鋒本道・間道二手ヨリ追撃之処、一敗不支遁逃致シ、平城出丸ヘ相進候得ハ、賊徒猶又発砲ニ付、薩兵

諸家追立候処、直ニ退散致シ候、然処城中砲台小名濱道正面ヨリ大砲打出候故、此方ヨリモ大砲一門ヲ以暫應戦候得共、中之作・湯本両道之兵進入無之故、山上ヨリ賊之形勢相伺居、道ヨリ突進之覚悟ニ候処、薩大砲隊モ到着発砲候得ハ、田畝秧緑中埋伏之賊兵、俄ニ大砲隊へ狙撃、突込候ニ付、直ニ追撃取懸、水田横行進戦之処、賊兵城下杉木中へ逃入、其内小名・中ノ作・両道之薩兵既ニ城下へ押詰、湯本ノ諸藩ハ長橋ヲ隔、南北ヨリ賊勢ヲ殺キ及激戦、大砲モ無難相進候付、北方城下へ相廻候処、薩兵城地ヲ隔壁樓櫓へ打込候付、一同相加リ打出候得共、賊徒要地ヲ擁シ何分難進、殊ニ湯本勢ハ、最早城背ニ相廻リ、賊之遁路ヲ断、四方ヨリ攻撃候得共、賊徒却テ窮鼠ニ相成、折々吶喊鐘鼓ヲ鳴シ、寛容不迫之氣ヲ示シ、益可憎候得共、不得止遁路ヲ開候決議ニテ、追手へ廻リ候処、弊藩大砲隊而已城門ヨリ一町余深入、別ニ小銃之応援無之候ニ付、暫時休戦候得共、賊勢益猖獗、処々ヨリ狙撃候故、銃卒進撃中大砲引上候覚悟致シ候得共、多士有之候而已ニ付、險路難進、不得止銃卒引上、因州・佐土原等一同八幡社中へ出、城門へ打込候内諸藩並弊藩大砲モ引

上、同処へ繰込、銃砲無間断激戦候得共、城門・城壁崩潰不致、諸藩烈士暴進候得共、二十歩間ニテ手負多ク有之、各心配候得共、日既ニ黄昏ニ及ヒ、参謀衆ヨリ引上候様沙汰有之、依之市街ニ輾陣、此夜薩兵一同北門城壁之下へ繰出、折々発砲候処、四ツ時過ヨリ賊徒放火遁逃仕候、此段御届奉申上候、以上、

七月

### 六一三 種子島宗之丞奥州磐城平城下ヨリ来状

明治元年七月二十一日

前文略、先月十一日江戸品川出帆、同十六日常州平潟へ着船イタシ候処、同所ハ仙臺出張ニテ則相戦、併右仙賊ハ弱兵ニテ直ニ逃候、左候テ同所滞陣中ニモ、度々戦争有之候得共、時々官軍勝利、先月廿八日平潟進撃、奥州泉并湯長谷同日責落、翌廿九日泉ヨリ一里位モ有之富岡ト申所ニテ、仙臺兵ト相戦、終ニ二時計之内ニ仙賊ノ首ヲ取ルコト百四級、仙臺兵ハ散乱イタシ、官軍大勝利、是迄ノ戦ハ右ノ戦程見事成戦ハ無之ト申事ニ御座候、同日ハ味方一人モ戦死無之、手負三四人

位之事ニ御座候、泉落城ノ節ハ、同城ヨリ一里位モ有之新田坂ト申所へ、徳川脱走林昌之助頭取遊撃隊ト相唱へ、賊凡百余人屯集、右ヲ進撃之節、竹内伊左衛門戦死、私共同組ニテ、実ニ残心之至ニ御座候、併賊隊長体ノ者、両三人ハ打留置申候、左候テ去ル十四日暁ヨリ岩城平へ責寄候処、右ハ仙臺・米澤・相馬ノ兵相守、城下迄ハ朝ノ間ニ攻掛候得共、右城要害ニテ終日ノ戦、同夜半比城内へ火ヲ掛、夜中相馬ノ様逃去、則城ハ乘取申候、此兩三日ハ戦モ無之、追々此手ハ相馬・仙臺へ進撃相成筈御座候、<sup>十三日ナルベシ</sup>十四日城責ニハ、同組種子島吉兵衛殿手、其外各隊へ手負段々有之、同組手負・戦死是迄ノ内三人程有之、心中御察可被下候、幸ニハ奥州辺ハ寒国故ニ御座候哉、当分ノ肌持、八月末方九月初比ノ様ニ有之、暑中ニモ帷子抔相用向トモ相見へ不申、追々ノ寒氣如何ト案居申候、白川辺モ追々進撃ノ向ニ御座候、賊ノ勢モ十ノ物カ半分位ノ哉ニテ、平潟辺滯陣之時分トハ打替リ、彼ヨリ責寄不申、是ニテ御推可被下候、併會津・米澤ハ城之内ニテモ強兵ノ向相見へ、右両掘責方ノ節ハ、手コタへ可有之、当分ノ向ニテハ、仙臺ハ誠ニ弱兵、砲声ヲ聞哉否直ニ逃去、併味方ニハ

至テ仕合御座候、右平潟ヨリ平城迄ノ間凡十度程モ戦、此比ハ軍モ少々取習為申心持ニ御座候云々略、

七月廿一日

種子島宗之丞

奥州岩城平城下ヨリ

#### 六一四 佐土原藩届書

明治元年

(頭註)〔脱紙カ転削カ〕

転陣果シテ、一群松戸へ留リ居候ニ付、田安鎮撫使須

本・備前・弊藩応接方一同談判之処、賊無異儀献兵器降伏シ、事落着仕候、此徒備前藩ニテ楹護仕候、然処亦一群榎戸口間道ヨリ千住へ掛リ、入府之由相聞へ候、依之弊藩兵隊千住ノ方へ繰廻候処、賊既ニ千住宿ニ入、糧食ヲ遣ヒ居候へトモ、戦地不便ナル故、千住川ヲ渡リ、小塚原ノ方へ引揚、要地ニ手配致シ置、応接方三浦十郎・町田吉之進兩人田安鎮撫使同伴千住へ差越、賊之隊長ヲ呼出シ、札問仕候処、只管恭順之旨趣申立候ニ付、先兵器ヲ献シ、恭順之実ヲ可証ト申論候得共、群徒不服時刻遷延ニ付、弊藩応接方緊敷談判致シ、遂ニ兵器ヲ相請取り、賊徒姓名人別相改事相定候、其中



薩兵一小隊為応援馳付、兩藩ニテ賊徒濫取締仕置、

兵器ハ大總督府へ差出候、同廿五日薩兵隊引揚申候、

同廿六日大總督府ヨリノ御下知ニテ、賊徒田安ノ手へ

引渡事済相成申候、然ル処下総国木更津屯集之賊徒追

々押出候由、依之須本藩へ為応援、八幡へ出張被仰渡

候間、備前・伊賀・弊藩兵隊同所へ可相会旨、大總督

府ヨリ御下知ニ付、後四月朔日松戸へ転陣、八幡ニテ

須本藩応援之処、謝罪入府之儀歎訴致候ト雖モ、兵器

之儀ハ徳川ヨリ相渡品ニモ無之、銘々自物ニ候間、差

出候事不相成由申募リ、穩便ニ事可済之勢ニ無御座候、

依之三藩申談、決戦之致用意、且今一応三藩ニテ、応

接可仕哉之旨、大總督府へ相窺候処、田安・須本兩藩

へ猶亦説得之儀被 命、翌二日及応接候得共、賊徒承

伏之体無之候間、此上ハ三藩ニテ取結可致談、乍然最

早破裂、(以下空白)

六一五 伊地知正治日記

廿二日

土州ヨリ相談ニ仍テ、分捕ノ小銃ハトロン四千発位差

送候事、

一朝五ツ時、四番隊并長州・大垣・忍之人数塩ヶ崎ヲ繰(栃木縣)

出シ、板室へ押寄候処、十町許計手前之油井ト申所へ、

賊致見張居候ニ付、夫ヲ打払ヒ、直三板室ニ押付攻撃

候得共、大川ヲ中ニ隔候險難ノ地、進入兼候故、遙ノ

川上ヲ廻ル、四番隊ノ狙撃手長州等人数ト賊之背後ニ

出、散々ニ打破ル、九ツ半時分ヨリ七ツ時分迄之間、

賊徒悉打払ヒ首級三十余ヲ得タリ、官軍戦死ナシ、手

負五人、内大垣二人・長州二人・薩州一人、即四番

隊森岡長左衛門、

分捕大砲老挺・小銃四五挺、

六二六 七月十七日有栖川宮へ達書

十七日詔シテ、江戸ヲ以テ東京ト為シ、鎮台及ヒ関八州

鎮將ヲ廢シテ、更ニ鎮將府ヲ置キ、駿河以東十三国ヲ管

理ス、輔相三條實美ヲ以テ鎮將ヲ兼ネシメ、大總督ハ專

ラ軍務ヲ掌ル、又江戸府ヲ改メテ東京府ト称シ、烏丸光

徳ヲ知事ト為ス、尋テ十三国ノ社寺ヲ府藩県ニ属シ、社

寺裁判所ヲ廢ス、

達書

有栖川帥宮

鎮台被免、關東軍事一途御委任被  
仰出候事、

長崎丸脱走林昌之助、奥羽所々へ乘廻ニ付、速ニ引戻、  
船ハ督府可差出旨、西城ヨリ御沙汰有之ト云、  
大久保一藏江戸ニ到ル、或ハ云、三條殿之参政也、

六一七 七月十四日布告書

徳川慶喜ヲ駿河寶臺院へ転移セシム御布告書

七月十四日

徳川慶喜、是迄水戸表ニ謹慎被 仰付置候処、徳川亀  
之助等歎願之趣モ有之、今般改テ駿府寶臺院へ転移被  
仰付候ニ付、此旨下々迄モ不洩様可相達事、

七月

六一八 海舟日記

明治元年七月

朔日

〔前文省略カ〕

〔頼科、大目付〕

妻木中務来リ、水戸之上意出勤尽力之事申聞ル、且聞、

明治元年(1868)

〔表紙〕

忠義公史料 明治元年八月一

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

六一九 自由ニ他国ニ行ク事ヲ嚴重ニ取締ル可キ  
藩達書

明治元年八月二日

一他国へ差越候儀ハ、夫々身分之等級ヲ以、御法モ有之儀ニテ、人々案内通之事候処、近比ニ至リ自他領へ差越、狼藉強盜等致儀モ有之、夫々厳密御手被召附置候付、右体之者ハ屹ト御取扱被仰付事ニ候、就テハ其身之不埒ハ勿論、第一御外聞ニ相拘、別テ不輕訶合、

甚以不届至極ニ候、當時尚更謹慎イタシ、御法令相守候様無之候テハ、不相濟時節候間、右様之儀ハ無之様人々相心得、兼テ支配頭・主人等ヨリ屹ト致取締、教諭行届候様可被取計候、尤諸郷・私領之儀ハ、所役々ヨリ致取締事ニハ候得共、専地頭・領主請持掛郡奉行等指揮不行届候テハ、右体之儀モ可致到来事候間、分テ心ヲ尽シ、聊不埒之儀共無之様、嚴重取締向行届候様、屹ト可被取計候、此旨致通達、地頭・領主へモ可申渡候、

慶應四辰八月二日

〔鞋久武〕  
右衛門

六二〇 越後表ノ情況島津主殿国老ニ通牒書

越後表之儀、近比墓々敷合戦モ無之由候処、追々官軍モ相増、都合八千騎程ニモ相成候付、先月廿三日ヨリ諸方江手配進撃之賦ニテ、繰出候処江、同夜賊軍後江廻リ、官軍之彈薬ニ火ヲ懸候処、守兵少人数ニテ防戦出来兼、過半及焼亡、然処同廿五日官軍繰出候跡江、亦々賊兵相廻、脇道ヨリ長岡之城江攻掛候処、是以守兵一小隊位ニテ防禦不相叶、終ニ当城賊之タメニ墜ラ

レ、殊ニ官軍先鋒及敗走、手負・戦死等及多人數、就右右応援ハ勿論、彈藥等尚亦至急統方被成候様、為急報肝付直左衛門・伊東新八・谷川八百介、同日中軍戦争史彼是出立、今曉致着京、戦之次第巨細承候処、イマタ官軍充分之兵隊モ無之処ヨリ、口々手薄ニテ、別段守之兵モ無之、右通敗ヲ取候段申出、是迄失勝利候儀モ無之候処、実ニ残念之至候、就右大砲又ハ彈藥等之儀ハ、在合候丈ハ都テ今日差送、尚又大坂等ニテ買入方之儀ハ、手当致置候得共、兵隊之儀先達テ岩川一小隊致着候迄ニテ、何分爰元無人、尤岩川隊之儀ハ、先達テ越後表江出兵被仰出、越前敦賀迄差越居候処、今明日中ニハ同所ヨリ出帆之賦候、就右此節其許ヨリ一大隊半位モ、諸郷又ハ私領兵等之内ヨリ急速出兵之儀被取計度、委細ハ右直左衛門外兩人江申含差下、越後表ヨリ致承知来候越モ、着之上巨細ニ可申出旨、相達置候付被承届、手当向之儀無遲滞被取計候テ可有之、尤先達テ村田新八等便ヨリ一大隊モ被差出候様、申含越候付、疾ニ出兵相成候半ト存候得共、越後表之賊兵ハ、地之利ハ相馴、嶮岨ニ拠、諸所ニ台場等ヲ築キ致防戦候処、無勢ニテハ急速片付兼候間、イツレ一挙ニ

不致攻撃候テハ、弥以戦死・手負ハ多く、入費ハ相重、寒氣之時節ニハ相成、甚以込入候付、急速出兵之儀肝要之事候、右付蒸艦老艘御借入之上、差下候賦ニ候間、今日上村休介兵庫表江差下、左候テ右船ヨリ田代宗次郎江委細申含差下候賦ニ付、尚又可被承届候、此段申越候条、

御而殿様可被達

貴聞候、以上、

但御軍賦役ヨリ委細申越候様相達置候、尤爰元江ハ

大砲等全無之付、急速差送方之儀モ、本宮江申越

候賦候、

辰八月三日

島津主殿(久壽)

島津備後殿(忠篤)

島津圖書殿(久治)

桂右衛門殿(久武)

川上龍衛殿(久勝)

新納刑部殿(久憲)

町田内膳殿(久憲)

島津隼人殿(久芳)

〔朱〕  
「本文

御前殿様達

貴聞、不及返事候事」

島津忠義家記

六二三 薩・長両藩へ達書

薩州

長州

六二二 出軍兵総差引西郷吉之助春日丸ヨリ出発

達書

西郷吉之助

右ハ越後表出兵総差引被仰付、御兵具方附士二小隊并御兵具方二小隊被召付、出軍被仰付置候付、来六日出艦春日丸ヨリ被差出候条、此旨申渡、大隊長・御兵具奉行・船將其外可承向へモ可申渡候、

八月

(島津入義) 良馬

〔卷〕辰八月三日

御本文之通、吉之助江申渡、大隊長・御兵具奉行・

船将名代へ申渡候、

取次

新納主税」

島津忠義家記

今般新瀉刃出張被

仰付候処、途中越後柏崎刃松平越中領地之儀、既ニ桑名開城所領一統被召揚候事ニ付、右柏崎刃可為同様候条、彼地滞在越中家来共へ其旨申聞、一同桑名表引取謹慎罷在候様可相達候、右土地取締向之儀ハ、新瀉裁判所之処指ニ可相任候、旁両藩申合不都合無之様、可取計旨被仰出候事、

四月

島津忠義家記

六二三 島津主殿主上御出鞆ニツキ太守公ノ東上

ヲ国者ニ促カス書

先般海内一家、東西同視之

思召ヲ以、東京之儀被

仰出候処、当春卒然兵馬之事起り、無辜之蒼生賊類之  
為ニ塗炭ニ陥リ、其生ヲ聊セス、依之

御親臨御綏撫被遊度、不遠

御出輦可被為

在旨、昨七日別紙之通被仰渡、右ニ付御頃合等之儀、  
承合候処、此節ハ前文通之

御趣意ニ付、弥以

御出輦之儀相違無之、イツレ当月廿日過ニモ可相成段

致承知候、就テハ

太守様御儀ニ付、為何儀モ被

仰出ハ無之候得共、御下国之節、一国致大挙御東下可

被為 在段、被

仰上置候末之儀ニテ、イツレ御前後之間、

御東下不被為遊候テハ相濟間敷哉ニモ、乍恐奉存候、

然処モハヤ格別御日合モ無之事情付、直ニ

御上京被為 在候テモ、迺モ

御出輦之御間ニハ御逢兼候御事ト奉存候間、直様蒸艦

等ヨリ東地へ

御先越ニモ可相成哉、然ナカラ何分

御賢慮ハ勿論、御一統御評議モ可被為 在儀故、先右

之形行迄申上越度、町飛脚差立、此段為御合申越候条、  
御兩殿様可被遊

貴聞候、以上、

但

公卿方並諸侯方御供等モ、イマタ不被 仰出候、

辰八月八日

島津主殿

島津備後殿

島津圖書殿

桂 右衛門殿

川上龍衛殿

新納刑部殿

町田内膳殿

島津隼人殿

島津忠義家記

## 六二四 主上御出輦被仰出書

先般海内一家、東西同視之

思食ヲ以、東京之儀被 仰出候処、当春卒然兵馬之事

起候ヨリ以來、東国無辜之蒼生、賊類之為ニ塗炭ニ陥

リ、流離艱難其生ヲ聊セス、依之

御親臨御綏撫被遊度、非常御手輕

御行装ヲ以テ、不遠

御出輦可被為

在之旨被

仰出候事、

八月

島津忠義家記

六二五 敦賀軍務官官軍長岡城回復ノコトヲ京都

軍務官ニ報スル書

一 去月晦日、新潟出帆之商船、今日当港江致入津候付、

直様船主呼出事情承候処、去二十五日夕七ツ時比、軍

艦七艘来航、同夜ヨリ砲戦ニ及候処、(新潟県)新發田人数凡三

百人計(虫)江線出シ、一時ニ官軍江相応シ、海陸ヨリ

挾打候ニ付、賊軍敗走、晦日ニハ官軍上陸致シ、(同上)彌彦・

寺泊杯モ焼失ニ及ヒ、(同上)長岡城モ二十七日再ヒ官軍ヨリ

盛返シ、乘取候旨申聞候事、

八月五日

(福井県)敦賀

軍務官

京都

軍務官

六二六 海江田武次ヨリ島津主殿へ通知書

(前文報知書)右略写差上申候、大取込文筆不通、御ユルシ可被下候、

七日

海江田武次

島津主殿様

本文晦日官軍上陸致スト有之候へ共、上陸ニ相成候賦  
ト申事之由、卅日・二十九日ナリ、

六二七 島津主殿国老ニ通牒書

一 去月二十九日、新潟出帆之商船、去二十五日敦賀江入

津、同所軍務官ヨリ船主呼出シ承候形行、別紙之通海

江田武次承候、然処敦賀江差出置候新納清之丞、今朝

罷歸候付、猶又越後表等之形勢承候処、同人儀モ、其

節於軍務官一同ニ承届、問合通り何モ相替儀無之由、

尤新潟ハ米澤賊兵相固メ居リ候ヲ、冲手ヨリ軍艦七艘ヨリ砲戰、新發田人数等横合ヨリ海陸之挾打ニテ、賊兵敗走ニ及ヒ、且長岡城盛返シ乗取候儀ハ、敦賀軍務官筆者河野泰平ト申者、越後表江差越候途中ニ於テ、長藩ト出會、長人ヨリ長岡城乗取候ニ付、京師表江為報知差越候段、清之丞申出候ニ付、重テ長州方江モ為承繕候処、当地屋敷ヘハ未委細不相分段承、別紙相虫触

添此段申越候条、

御兩殿様可被達

辰八月八日

島津主殿

島津備後殿  
島津圖書殿  
桂 右衛門殿  
川上龍衛殿  
新納刑部殿  
町田内膳殿  
島津隼人殿

六二八 各寺院ノ供給高ヲ召揚ク知政所達書

〔頭註志〕「知政所ヲ置クハ明治二年二月ナレバ、本書ハ以後、達書ナルヘシ」  
一高三百石 大乘寺

一高三拾石 大興寺

一高千三百六十壹石四斗七升九合壹勺三才 福昌寺

一高三百九拾九石四斗三升貳合壹才 南林寺

一高三百八拾五石五斗貳升五合三勺 妙園寺〔谷九〕

一高七百石 興國寺

一高九石貳斗壹升四合五勺九才 慧燈院〔意九〕

一高九石貳斗壹升四合五勺九才 隆盛院

一高三拾石 月香院

一高四百四石六斗六升貳合四勺九才 浄光明寺

一高百石 不斷光院

一高三拾石 花舜軒

一高三拾石 源舜庵

一高貳拾貳石 笑岳寺



一高七石

深固院

一高貳百石

壽國寺

右之通、従前ヨリ各寺へ被付置候得共、御吟味之訊有之、右高此節被召揚、当秋ヨリ帖佐与御藏入被仰付候、

戊辰八月八日

知政所

此高合計三千五百七拾九石三斗七升壹合七勺貳才、

六二九 寺僧ニ手当支給ノ知政所達書

各寺院供給高召揚ニツキ、寺僧ニ相当ノ手当ヲ給

ス

知政所達書

一銀貳百四拾三匁

右一ヶ月分諸品代、

一銀壹貫三百六拾目

右夏・冬衣裳代、年中両度ニ半方ツ、渡ス、

一納米壹日壹人ニ付五合宛

右大乘院・福昌寺・南林寺・妙國寺(卷)・興國寺・惠燈

院・浄光明寺・壽國寺住職一人分、

一銀七拾五匁

右一ヶ月諸品代、

一銀九百目

右夏・冬衣裳代、年々両度ニ半方渡、

一納米一日壹人分五合宛

右各寺僧侶一人分

右ハ別紙通、各寺附高被召揚候ニ付テハ、以来衣食之

營無之賦ニ候間、以来一往応僧員、右通当十月朔日ヨ

リ被成下候、

右之通被仰付候条、取扱向之儀委細致商議、無滞様

可取計旨、寺社奉行総裁へ可申渡候、

戊辰八月八日

知政所

取次

汾陽次郎右衛門

六三〇 島津忠義至急上京御沙汰書并藩吏届書

薩摩少将(忠義)

其方儀、海路東行被

仰付置候处、今般御用有之ニ付、早々上

京候様被

仰出候事、

八月十日

非蔵入口へ罷出候様御切紙到来ニ付、罷出候処、千種〔有文〕前少将様ヲ以被成御渡候間、差上候事、

辰八月十日

新納嘉藤二〔立卷〕

島津忠義家記

八月

良馬

〔卷〕  
一辰八月十日

御本文之通、大隊長江申渡候、

取次

北郷浪江

一絵図面留略ス

島津忠義家記

六三一 伏見・鳥羽戦死者石塔建設ニツキ華香料

ヲ下附セラル達書

金一枚

右ハ当正月三日以来、伏見・鳥羽辺戦争ニ付、戦死之人数相國寺内林光院江埋葬、石塔御物計ヲ以建立被仰付、別紙絵図面之通成就相成候付、供養料トシテ壹人ニ付、金百疋ツ、林光院江被相渡、先月十日合祭執行被仰付、

太守様

中将様ヨリ別段華香料トシテ、右之通御手向被成下候段申来候、此旨難有奉承知候様、銘々親族等江可被申渡旨、大隊長江可申渡候、

六三二 越後表死傷者陸軍所達

二番遊撃隊

戦死・手負左之通

戦死

竹原佐一郎  
國分六郎  
有川彦太郎  
和田宗左衛門  
本村彦二  
榊善之介  
田中道賢

明治元年(1868)

十番隊

戰死

堀切 休庵	肥後四郎兵衛	市來榮之丞	松山善之進	本ノマ、 田良助	樋口八太郎	伊地知四郎	谷山次兵衛	大迫直助	長崎金兵衛	田中榮右衛門	宮内藤右衛門	町田幸次郎	柏原甚左衛門	久保武二	高橋 勲助	水夫 傳太郎
-------	--------	-------	-------	-------------	-------	-------	-------	------	-------	--------	--------	-------	--------	------	-------	--------

小隊長

夫卒 半助	村橋宗之丞	松元新左衛門	山下彌四郎	石原金次郎	神戸休兵衛	平田友次郎	矢田休之丞	精松喜平太	龜澤宗八郎	兒玉休五郎	吉田二次郎	皆吉九平太	伊東彦兵衛	山田助左衛門	村田長左衛門	山口鐵之助
-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	--------	-------

政次郎  
八太郎

十番隊

手負

川村 仲藏

伊東 善之介

稲留 八次

白石 小太郎

蓑田 吉左衛門

平田 喜次郎

永田 新兵衛

監軍

若松 平八郎

伊地知 休右衛門

面高 真之丞

大久保 平四郎

大重 彌三太

木村 次郎兵衛

夫卒 新助

正助

外城三番

手負

有馬 嘉兵衛

石神 為兵衛

池田 半之助

有馬 十九郎

中村 源右衛門

宮之原 次兵衛

大内 田玄中

永井 宗七郎

川路 庄太郎

岩重 作兵衛

夫卒 與吉

八太郎

熊太郎

東 次郎太

高 島 豊助

松崎 祐助

有馬 仲之助

別府 郷之丞

永井 武彦

馬渡 十藏

明治元年(1868)

外四番

戦死

石神宅右衛門  
 本田吉左衛門  
 有馬誠之丞  
 町田武輔  
 中原七郎大夫  
 山口傳左衛門  
 宮之原本ノマ助  
 岩元八太郎  
 大山藤之丞  
 四元七之丞  
 和田軍吉  
 中尾休右衛門  
 永井隆右衛門  
 夫卒 直右衛門  
 中村源助  
 麥生田有誠  
 川南武右衛門  
 濱田藤助

外四番

手負

監軍

堀切善助  
 夫 吉十郎  
 田代勘之丞  
 川半之丞本ノマ  
 土屋龍太郎  
 岩元藤之進  
 境田勇次郎  
 後藤傳太郎  
 佐藤傳之丞  
 山口孫七  
 竹内藤之丞  
 堀切龍兵衛  
 湯田彌六  
 春田主右衛門  
 齊藤助二  
 小木原矢一郎

七番隊

戦死

西郷宗次郎

税所正吉

不知平八

久木田清次郎

隈元八太郎

白石吉左衛門

外二

手負 拾貳人

二番大砲

戦死

久保甚之丞

外二

手負 六人

外一番

戦死

川越正太郎

戦死

野元助一

川村宗之丞

榎本新十郎

吉利正兵衛

高柳幸左衛門

老人名不知

西郷新蔵

樺山伊十郎

外二

九人

有川彦右衛門

左近允彌兵衛

佐土原新助

肝付十郎

右手負ニテ後死

戦死

高柳仲之丞

長束十郎

三原周助

池田次郎右衛門

濱川彦兵衛

都城

戦死

瀬戸口源兵衛

外二

手負 三人

戦死・手負

人数百七拾式人

御城下戦死

四拾七人

夫卒四人

外城戦死拾人

夫卒一人

右辰八月十一日飛脚着、翌十二日戦死人数陸軍所ヨリ御達相成候事、

六三三 島津主殿桂右衛門ニ贈ル書

去月十九日之尊書、昨十日相達難有拜読、愈御清寧被為涉奉恐賀候、

御両殿様其外様益御機嫌能、

太守様御事ハ、当分御湯治御光越之段、重畳目出度御

同慶奉存候、偕当館サシテ相変事モ無之候得共、既ニ越後・新潟モ責拔相成、別紙二通之通ニ御座候、然共此地ハ敵地第一之要所ニテ、敵情切迫無限訳ニ御座候ヘハ、多分不日ニ大挙シテ寄来候半ト存申候間、猶此上手厚手当相成候様、諸都合出兵先ヘモ申越置候、然ニ今晚越前敦賀ヨリ飛脚到来候処、御雇英船ヨリ五小队同処ヘ着岸相成、実弟登<sup>(島津)</sup>ニモ出軍被仰付候由ニテ着イタシ、外ニモ久留米船ハ、前之濱一日ハ早く出帆之由候得共、未彼之湊ヘモ何分不相分候得共、決テ越地早く乗付候トノ事ニ御座候由、登杯乗込之英艦ハ、天草沖・平戸沖辺ニテ大風雨ニ逢ヒ、大島ト申所ヘ漸取付、船中無残塩湿ニ相成、一同上陸、火薬其外改方迄モイタシ候様之事ニテ、相應之難氣<sup>(島津)</sup>ニ相及タル筋ニ相聞得申候、夫故敦賀ヘモ無抛一統上陸、両日程勞ヲ休メ、直ニ越後ヘ差向候トノ事ニ御座候、既ニ新潟モ責拔相成候折カラ、別テ之機会ニ御座候、嚙々繰出ニテ、彼是御配慮之程、想像仕候、春日丸モ成就相成候ハ、人数被召乗、越後之様被遣度段ハ、先度申上越置候処、其後追候ニハ、中々今程北地之様ニ被乘行候模様ニモ不相聞候処、此節敦賀ヨリ申越候ニハ、不遠北海廻船之

模様ト相聞へ、別テ皆々勢ヲ得、無此上仕合ニ御座候、誠ニ追々多人數出兵、実ニ御入費莫大之事ハ無申迄候得共、既ニ先度少々官軍敗走之処、直ニ段々藩々ヨリ復幕之建言等モ為有之様子、慥成事ニ御座候、二條家先々諸大夫モ、先日御用掛相成、気味能事ニ御座候、矢張二條家・尹宮之所、復幕之策モ密ニ被策候様ニ相聞申候得共、最ハ容易ニ參リ不申候、君公モ早々御上京之儀被仰出、今日極々急差立差越申候、猶御配慮之程奉恐入候、左候テ去ル七日町飛脚ヲ以申上越節迄ハ、段々諸所承合申候処、何レ早ク兼テ仰立之通、御東行被遊候義可然トノ事ニテ、岩下家へモ申談、申上越置候処、亦々不図モ早々御上京之儀御発シ相成、当分之事ハ毎々相變、中々於此元モ甚心配仕候、ケ様ニ相變候テハ、於其元ハ猶更御配慮之程恐入申候得トモ、イタシ方無之、万々一御出帆共ニ相成居候ハ、甚御不都合之事歎ト恐入申候へ共、何レ行形ニイタシ不申候テハ、外ニイタシ様モ無之、旁宜敷御都合奉祈候、一樺山舎人近日白川口ヨリ帰京、別紙ニ通持參イタシ申候間、書写差上申候、

一新瀉一条問合写ニ通差上申候、

一長岡城再ヒ官軍へ取返候次第ハ、未慥ニ相知レ不申候、然トモ多分長州隊ヨリ取返候半歎ト被察申候、其訳ハ長岡ヨリ山手之方ニ長州受持ニテ、当分本陣關ヶ原へ退軍スルニハ、何レ長岡近ク通行スル所々ヨリ、近々相分申へク、

一別紙檄文差上申候、意外千万、

右外段々申上度儀モ御座候得共、何分差急要用迄申上候、甚乱筆等ハ御海容可被下候、恐々謹言、

八月十一日

嶋津主殿

桂 右衛門様

閣下

島津忠義家記

六三四 奥羽出軍兵武運祈念ノタメ、五社祭祀施行ニツキ日限ヲ申出ツ可キ達書

奥羽江被差向候兵隊、奮戰勲勞之次第追々被聞召上、深キ

思食ヲ以、武運御祈念之タメ、五社祭祀被仰出候条、日限等取シテ可申出事、



〔米〕  
一奥羽江被差向候兵隊、奮戰勲勞之次第、追々被

聞召上、深キ

思食ヲ以、武運御祈念之タメ、五社祭祀被

仰出候条、日限等取シラへ可被申出旨、神社奉行江

可申渡候、

八月

〔町田久憲  
内膳

辰八月十日

御本文之通、神社奉行江申渡候、

取次

新納主税

一本田出羽守ヨリ日限等取シラへ申出候趣ハ、神社方

一卷帳ニ有之

六三五 苗代川小隊出軍ニツキ佩刀ヲ許ス達書

苗代川一小隊、即今出軍ニ付テハ別段之事候付、出軍

中佩刀令免許候条、先達テ申渡置候通、実地之強臆次

第、猶又可及沙汰候間、一涯奮立戦功相遂候様可申渡

旨、地頭江申渡大隊長江モ可申渡候、

八月

良馬

〔米〕  
一辰八月十三日

御本文之通、伊集院地頭并大隊長江申渡候、

取次

北郷浪江

本文苗代川人ヨリ、先達テ帯刀御免被仰付度願申出

候趣ハ、陸軍方一卷帳ニ有之

六三六 東京行幸ニツキ東海道筋藩々へ布告書

明治元年八月十三日

御布告

不遠東京 行幸被 仰出候ニ付、東海道筋藩々へハ、

御道筋ノ儀ニ付、別段ノ訳ヲ以テ、兼テ被 仰出候石

高拝借ノ金札、高三分ノ一ヲ以御貸渡相成候間、

朝廷御仁恤ノ御趣意ヲ体シ、領民撫育方行届候儀、可

為肝要候条、金札取扱方、専ラ領民末々迄、御趣意

貫徹、融通相成候様取計可有之候事、

但廿八日ヨリ晦日マテニ、会計官ニ於テ御下渡ノ事、

八月

行政官

六三七 朝彦親王ニ異凶ノ聞アリ、之ヲ藝州藩ニ

幽ス御沙汰書

明治元年八月十六日

賀陽宮へ御沙汰書

賀陽宮

兼テ御不審ノ筋有之、被止參 朝、謹慎被 仰付置候  
処、頃日不軌ヲ謀候趣、全一己ノ存慮ニテ、徳川慶喜  
等へ密使差遣シ、可内忒隱謀及露頭、 勅使ヲ以御糺  
問相成、無相違旨言上、然ルニ慶喜ニ於テハ、悔悟恭  
順、愈以謹慎罷在候処、皇族トシテ不容易所為、甚以  
不届至極ニ付、嚴重ノ 御沙汰ニ可被及筈ニ候へ共、  
格別ノ 叡旨ヲ以、寛大ノ典ニ被 行、親王彈正尹  
宣旨、二品位記并御養子被 召上、安藝少將へ御預被  
仰出候事、

八月

右ノ通賀陽宮へ 御沙汰ニ相成候ニ付テハ、向後朝彦  
ト称シ候事、右為心得相違候事、

八月十六日

行政官

六三八 朝彦親王ノ家族等伏見宮へ預ケル御沙汰

書

明治元年八月十六日

伏見宮へ御沙汰書

伏見宮

今般賀陽宮不容易所為有之、安藝少將へ御預被 仰付  
候、就テハ格別ノ 思召ヲ以、右家族并家来トモ、其  
宮へ御預被 仰付候条、幼稚ノ輩ハ殊更意ヲ用ヒ、精  
々手篤取扱可致様 御沙汰候事、  
但御預中用度ノ儀ハ、夫々御手当モ可有之、委細取  
調ノ上可申出候事、

八月

行政官

六三九 朝彦親王幽閉ニ関スル藝州藩へノ御沙汰

書

明治元年八月十六日

藝州藩へ御沙汰書

安藝少將

今般賀陽宮御不審ノ筋有之、其藩へ御預被 仰付候、

野元助八

就テハ万端意ヲ用ヒ、精々手篤取扱可致様、 御沙汰候事、

去二日島崎・北野両村ニ於テ勇戦被創、其後不平愈終ニ死去之旨、不被為堪感激候、因茲黄金二枚聊被寄奠儀者也、

但格別ノ 思召ヲ以、御預被 仰付候儀ニ付、当分

御手当トシテ金二千両下シ賜リ候事、

六月 陸軍將

八月 行政官

執事

六四〇 徴兵一番隊長故野元助八感状並家族へ達

書

六四〇ノ二

陸軍將

西園寺中納言公望卿

一御感状一通

陸軍將執事

一御書附一通

一黄金二枚

六四〇ノ一

去二日、島崎・北野両村之賊徒攻撃之砌、銃丸ヲ負候

迄走廻リ、隊中ヲ指揮シ、拔群之働神妙之至候、仍テ

感状如件、

慶應四年戊辰六月

公望花押

亡

徴兵一番隊

野元助八

小隊長

野元助八殿

右ハ徴兵一番隊小隊長ニテ、越後島崎・北野両村之賊徒攻撃之砌、銃丸ヲ負候迄走廻リ、隊中ヲ指揮シ、拔群之働神妙之至ニ付、右之通

六四〇ノ二

徴兵一番隊

御感状等被成下候段申来候条、難有頂戴仕候様、助八

故

一族江可被申渡候、

八月 良馬

〔卷〕「本文小奉書切紙ニ相認、御感狀・御書附・黄金相

添、辰八月十六日大隊長江直ニ相渡候事、

一御文書奉行江達置候事」

小松帶刀様

侍史 肴添上

奥平操一

六四一 奥平操一贈小松帶刀書二通

〔六四一ノ一〕  
明治元年戊辰八月

朝夕ハ凌能相成候処、益御機嫌能被遊御座奉拝悦候、

〔鳥津久光〕大隅様益御機嫌能御着坂被遊奉恐賀候、

閣下モ御慮從御下坂之由、御苦勞ニ奉存候、甚乍輕微

海鱗三尾厨下江差出候、御叱留被仰付候ハ、難有奉

存候、右申上度如此御座候、拜啓、

八月望後二日

尚々拜趨可仕之処、乍憚痔疾ニテ着座難義延引仕候、

兩三日中罷出御清閑之次第、暫時ナリトモ御目通り

奉願度ハ、老母不快モ冷氣ニ相成候ハ、少々可快、

九月十月之交ニハ蒸氣船御便モ候ハ、西下仕度奉

存候、蒙命候於兵練法授正モ、其頃ハ落成ニ可相成

奉存候、宜鋪御指揮奉願候、以上、

〔六四一ノ二〕  
明治元年戊辰八月

不相替残暑難凌御座候、益御安請奉恐賀候、然ハ過日

石川確太郎江適追仕、此節御願濟ニ相成候堺商社之事

ニ付、同人ヨリ段々談合モ有之、不及ナカラ愚意モ罷

在、同人江談及候得トモ、確太郎トテモ羈旅之臣、直

ニ申上候路モ無之、自然同人ヨリモ可申上候、尚又僕

ヨリモ可相願申候ノミニテ因循仕、幸ヒ此節御下坂ニ

相成候事故、不願恐別紙大略愚意相認備尊鑒候、乍恐

機會御座候事故、御勇断御揮令被下間敷哉、商社之義

ハ本邦之先務、富国強兵之本ニ御座候間、中途ニテハ

蹶キニ相成候テハ、遺憾無限事ニ奉存候、僕雖不才右

社曹末班ニモ御使用ニ相成候ハ、畢生之本望ニ御座

候、必涓埃之御服息可仕奉存候、決テ功名之念ニテ、

世間所謂山氣流之徒ニモ無御座候、明府御鑒裁之上、

是ニモ奉願上度候、不日御清閑之次可奉伺、先可為受

教之地奉一書候、頓首拜可、

八月十七日

操一

小松明府

侍史

六四二 泉州堺薩州商社演舌之覺

明治元年戊辰八月

此度願濟ニ相成候泉州堺薩州商社之主意ハ、第一ニ  
 皇国之利ヲ外国ニ制セラレス、上下融通便利ヲ得ルヲ  
 肝要トス、毛頭薩州一己之利ヲ計ルニアラス、外国其  
 商買仲間ヲ結ヒ、組合ニテ出銀致候仕方故、商買之元  
 金常ニ多ク、利ヲ他方江占ラレス、我邦此仕方ナキ故、  
 元金常ニ乏敷、近来ハ外国ニ商買之大権ヲ奪ハレ、是  
 ヲリ諸品之直段平均ヲ失ヒ、法外之高直トナリ、上下  
 困窮之本トナル、然ルニ

皇国之人是ヲ見テ、手ヲ束フル時ニ非ス、依テ此度商社  
 願立候上ハ、諸侯并ニ諸人同志之者ト社ヲ結ヒ、種金  
 ヲ以諸品之高下ヲ計ル時ヲ見テ買売シ、蒸氣船ニテ隔  
 地江運漕、彼我相利スル事ヲ企ツ、其金之出納ハ社中  
 立合、貴賤高下之差別ナク、一錢タリトモ一己ニテ私ス

ヘカラス、毎年其月勘定シ、互ニ其利ヲ分ツ事法之如ク  
 スヘシ、此仕法相立候上ハ、社金弥増終ニ外国之商權ヲ  
 我ニ取り、諸品直段モ平均ヲ得ヘシ、其入社之人ハ永  
 代不易之商人之株ヲ立、公私之便実ニ不可言之良法也、  
 右之商社万事ニ付、公私之掛合、殊ニ非常之警衛并ニ  
 運漕之事迄、先ツ薩州ヨリ弁スヘシ、此入社一株之金高  
 五千兩ト定ム、一人ニテ幾株入ルモ勝手次第也、委細仕  
 法書ハ別ニ大帳アリ、先ツ大略ヲ書取同志入社ヲ俟ツ、  
 追々大帳熟覽之上諸箇条中得失等ハ、存分ニ評論アリ  
 タシ、何事モ一己之私意ヲ張ラス、公平ニ決シ、我主  
 意トスルモノ也、

六四三 外国人医師ヲ遣シテ戦傷者ヲ治療セシム

明治元年八月二十日

諸道官軍総督へ御沙汰書

諸道 官軍暴露ヲ不厭、矢石ヲ冒シ奮戦勇闘、追々奏  
 捷効候段 叡感不斜候、就テハ往々瘡氣ニ感シ、創傷  
 ヲ被リ、相悩候者モ可有之ト、深ク不便ニ被 思召、  
 今般洋医御雇可被差遣候間、右病氣等篤ト治療相加へ、

精々調護行届候様、可取計 御沙汰候事、

八月

六四四 長崎府ノ砲台規則立ツヘキ達書

明治元年八月十七日

長崎府へ御達書

長崎府

其府諸砲台ノ儀、更ニ規則相立要衝ノ場所へ府兵ヲ置キ、嚴重ニ守衛致シ、無用ニ屬シ候分ハ相廢シ候様被仰付候事、

但砲台ノ規則、府兵ノ紀律等ハ、追テ於軍務官決議ノ上、天下一般ノ御定則可被 仰出候間、其砌速ニ改正致候様心得置候旨、 御沙汰候事、

八月

六四五 公務人ヲ公議人ト改称スル布告書

明治元年八月二十日

御布告

過日被 仰出候公務人之儀、今般御改ニ相成、公議人ト相唱へ、其職ハ即議員ニシテ 朝命ヲ奉承シ、藩情ヲ達スルコトヲ旨トス、更ニ公用人ヲ相設、従前留守居役之職務ヲ掌リ候様可致旨、被 仰出候事、

八月

六四六 長崎風俗革易ノ御沙汰書

明治元年八月二十日

御沙汰書

澤 右衛門佐

長崎府之儀ハ、御一新後御取立相成候へ共、従来旧幕府之節ヨリ開港地ト相成、人民相聚リ、一都会ヲモ為シ来候所柄ニ付、積習弊風モ不鮮、人民困窮之次第モ有之趣、自今府藩県一定之 御政治相立候上ハ、風俗革易窮民救助之筋相運ヒ、殊ニ外国交際之場所ニ付、愈以 御趣意貫徹致候様、勉励可有之旨 御沙汰候事、

八月

六四七 元関白ニ條齊敬ノ参内ヲ許ス

明治元年八月二十日

御沙汰書

二條前左大臣

在職中曖昧之処置、失政不少、吃度 御沙汰可被及之  
処、大政御一新、且先達テ御元服大札被為行、旁格別  
之 叡旨ヲ以、自今參内被 免候事、

八月

六四八 越後口出軍諸隊并前之濱ヨリ乗船ニツキ

陸軍所へ参集スヘキ達書

一 臼砲打手人数三十拾人

右越後口江出軍被仰付候、

一 川邊一小隊

一 五番番兵一小隊

一 六番番兵一小隊

一 諸組遊撃壱番隊一小隊

一 宮之城一小隊

一 苗代川一小隊

合一大隊

右越後口江出軍被仰付置候、

一加世田・伊作欠跡人数

右此節前之濱廻船、洋船ヨリ被差越候条、明廿三日  
七ツ時陸軍所江無遲滞相揃、津畑江御船奉行致出役、  
右ヨリ問合次第乗付候様被仰付候、此旨大隊長并御  
船奉行江申渡、可承向ヘモ可申渡候、

八月廿二日 良馬

〔卷〕  
「辰八月廿二日

御本文之通、大隊長・御船奉行江申渡候、

取次

新納主税

六四九 諸隊守備上京達書

一 川邊一小隊

一 五番番兵一小隊

一 六番番兵一小隊

一 諸組遊撃壱番隊一小隊

一 宮之城一小隊

一 苗代川一小隊

合一大隊

北郷浪江

右越後口江出軍被仰付候、

一隈之城半隊

一串木野半隊

合一小隊

一加世田半隊

一指宿半隊

合一小隊

川邊郡

一山田半隊

一阿多一分隊

一田布施一分隊

合一小隊

右為守衛上京被仰付候、

右之通被仰付、船都合次第被差越候条、大隊長并地頭

御用人江申渡、可承向江可申渡候、

八月

良馬

〔米〕御本文之通、大隊長・御用人・地頭・領主江申渡、

物奉行へモ申渡候、

取次

六五〇 出軍諸隊平運丸ヨリ上京達書

一隈之城半隊

一串木野半隊

合一小隊

一加世田半隊

一指宿半隊

合一小隊

川邊郡

一山田半隊

一阿多一分隊

一田布施一分隊

合一小隊

右ハ上京被仰付置候付、

御出軍御供之内ニテ、来ル廿三日平運丸ヨリ被差越候

条、当朝四時陸軍所江、無遲滞相揃、御船奉行問合次

第乗付候様申付候、此旨大隊長并御船奉行江申渡、可

承向へモ可申渡候、



八月 良馬  
〔辰八月廿日〕

御本文之通、大隊長并御船奉行へ申渡、地頭へモ申渡候、

取次

北郷浪江

六五一 遊芸出願取下達書

明治元年八月廿一日

一 当時戰爭中、時機ニ応シ大砲押夫等之御用ニモ可相成  
タメ、角力興行差免置候処、於下々ハ右之趣意不相心得、只繁華ヲ事トシテ、右通為申付儀ト心得違、或ハ  
神社御一洗ニ加候付、芝居又ハ富杯ト、色々余計之儀  
取企候者モ不少哉ニ相聞得、別テ不都合之次第ニ付、  
以來右様之儀願出候ハ、取次之御役場ヨリ氣ヲ付、  
取下ケ候様可致旨、町奉行兼帶、其外可承向へ可申渡  
事、

辰八月廿一日

六五二 外国人ニ對シ輕拳ノ振舞無之様取締

明治元年八月二十二日

御布告書

諸藩へ

外国交際之儀、改テ御取結ニ相成、就テハ彼国人ニ對シ、粗忽之儀有之候テハ、不容易御差支ニ相成候事故、向後往來行違之節、別テ氣ヲ付、輕拳之振舞無之様、兵隊末々迄、屹度取締置候様、被 仰出候事、

但近々築地開市ニ付、外国人繁々往來可有之、自然不都合之儀相生候テハ、可為曲事候間、末々迄之者迄モ不洩様、屹度可申付候事、

六五三 桂右衛門彈丸鑄造方猶予ノコトヲ兵庫軍務所ニ上申書

アームストロン

十二斤 彈

シナイトル 彈

右ハ急速御用ニ付、於弊藩精々差急鑄造之上可差上旨、被仰越趣承知仕候、アームストロン彈之儀ハ、随分製

造相調候付、急速鑄造差上候様可仕事候へ共、於弊藩  
モ諸所へ出兵被仰付、数多之彈製造央ニテ、此節出兵  
之用途サへ弁兼候位之事ニテ、甚以困入候次第御座候  
間、暫御猶予被成下度奉存候、左候テ追々出来次第差  
上候様可仕候、シナイトル彈之儀ハ、製造不相調候間、  
左様御聞置可被下候、此段申上越候、以上、

御官名内

辰八月廿三日

桂 右衛門

兵庫

軍務

御役所

(本) 「右之通、辰八月廿三日平運丸上坂便、大坂御留守居

へ向ケ、相届候様申越候事、

本文申来候趣、

アームストロン

十二斤 彈

シナイトル 彈

右之品々、今般急速御用之儀ニ候間、鹿兒島表於テ  
精々差急鑄造之上、兵庫軍務官へ可被差出候、尤右  
代価ハ、追テ相当ヲ以テ御下ケニ相成候事、

兵庫

七月廿二日

軍務官

薩州

役人中

六五四 町田内膳恩賜品分配ノコトニツキ、島津

主殿ニ照会状

晒 壹匹

右ハ先月廿日、弁事官ヨリ重役御用ニテ、春以来所々

へ出兵奮勇銳進之段、重役共

朝命奉戴、鬪藩士氣振作鼓舞行届候儀ト、深

歎感被為在候趣、御書附拜聞之上、右御品下賜候旨

被 仰渡、不容易事柄、御互ニ難有奉恐入候、就右御

品之儀ハ、其許へ被致格護置候付、何様可致哉被申越

趣承知イタシ、及吟味候処、積年

王事ニ勤勞ト云々之訳ニ付テハ、在京又ハ軍務掛不限

一統之事候半、左候時ハ御品之儀ハ、銘々配分ト申訳

ニモ至リ兼候へ共、格別之

御褒詞ヲ蒙リ、難有被仰付候付テハ、銘々割配頂戴仕

候方、相当可有之哉、左候ハ、御自分ハ勿論、帯刀殿・伊勢殿・佐次右衛門殿モ同様ニテ、爰許之人数ハ張紙通ニ候間、猶又於其許御吟味之上、何様トモ可然御取計給度、此段申越候、以上、

辰八月廿三日

町田内膳

島津主殿殿

〔采〕  
「本文ニ付、張紙 右衛門殿・龍衛殿・刑部殿・内膳殿・良馬・隼人」

島津忠義家記

六五五 崇徳天皇神靈御還遷布告書

明治元年八月二十四日

御布告書

今般讚岐国ヨリ 崇徳天皇神靈御還遷被 仰出、来月上旬当地今出川通飛鳥井町へ 着御ニ候事、

但尔来ハ可奉称 白峯宮事、

右ニ付、神社へ献備之儀、願出度所存之者ハ、品書ヲ以テ神祇官へ伺出事、

六五六 大久保利通日記

八月

廿四日

一出勤、今日金策評決ニ及、明日御呼出相成候、今夕中

井来ル、今晚ハ暴徒相騒キ、鶏鳴登城候、

六五七 寺島宗則ヨリ小松帶刀へ書翰

京師太政官

神奈川府

小松帶刀殿

寺島陶藏

公務要書

裏

辰八月廿五日午後二時発

昨廿四日、<sup>宇和島藩士</sup>都築莊藏着濱いたし、被仰聞候趣一々承知仕候、

一 各国新潟密売取押品之義は、我政府之兵権沿海取締不行届候ニ付、議論十分立不申、尋常之税取立申候外

ニ、武器密売之ケ条は、唯今議論最中ニ御座候、

一去十九日夜中、江戸海ニ滞泊之榎本引卒軍艦九艘脱発<sup>〔武備〕</sup>

いたし、右ニ付廿日大久保（利通）一藏殿出港相成、同日三條（実秀）公も御出之積りニ候処、右形勢俄ニ御出相成候ては、不都合之義ニ付取止相成、右脱走一条ニ付、厚鉄船入手之義切迫相談候得共、矢張前同様之返答にて、外ニも手を尽し候得共、即今相渡不申、九船脱走之事、攝海相廻り候哉否、急ニ報告之術工風致し候得共、若シ攝海へ参り候とも、あと越ニなり候上、急ニ御防禦被行届候義無覚束、其為別段蒸船相雇書一通相托、三四千トルを費ス程之義ニも無之、且一書を遺し置候趣ニも、先ニ蝦夷行願出、許容無之を怒ル様子相見へ、箱館ニも差越可申哉と評し申候、其以前書面差上、始末分明ならざる報告いたし候ては、却て御地を攪動スルノ恐モアリ杯、大久保氏之推察にて、追て一人江戸より被差立候約束ニいたし置、右一人今日之便より参ル積ニ申置候処、彼方にて一日解違ひニも候や、右之便ヲ明日被差立候趣、唯今江戸より申参り、九船脱走之報告余り遅延イタスナラント愚按仕、略私より申上候、此度之報告は、貴所様迄為御心得申上候義ニ付、満朝江御伝被下候てハ、大久保氏之考ニ背キ候義ニ付、御含置可被下候、

一 楮幣之義、此元にて製作可仕、諸方會計府江も御達置可被下候、

一 佛・英教師江四万トル余相渡、近々帰国之積ニ御座候、一川浚器械ハ英人江為相見候処、右取合作り立方、是非横濱にて相試不申候てハ、大坂江御送り相成候ても、用立不申候由、佛ウエルニールも同様申事ニ付、取立方為賦候処、三ヶ月掛り、三千トルも掛り可申由、別紙之通ニ御座候、外ニ送り入用も掛り可申候ニ付、右取立方致し可申哉、御尋申上候、

一 燈明台造作所ハ、式万式千トル許にて約束いたし申候、右インセニール三人にてハ手足り兼、外ニ三人職人ヲ英より雇ひ度ト申事にて、断り候得共、横須賀仏人ハ四十余人も御雇相成、唯六七人を拒み玉ふ之理なしと申故、一言も無之、能考へ候へハ、実ニ三人にては手足申間敷、且格別之入費ニも相成不申、雇入約し候積ニ御座候、

一 条約中ニ久世公之外、判事加印相望候処、此節何之御沙汰も無之候ニ付、若 御沙汰相待兼候ハ、無抛久世公一名之外加名許容無之旨、主張致し試可申候、  
一 西洋医御雇ニ付、尚東京江可相伺候得共、北越江は先

日ウイルリス出立致し申候、

一五十万トル追々返弁之義承知仕候、近月之中入付候義相叶不申、軍防頻ニ御入費多、会計ニも金相廻し、且先日大久保氏江も式万金相廻申候、

右申上度早々如此御座候、已上、

寺島陶蔵

八月廿五日二字

英ソソライス便

小 帶刀様

左右

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

### 六五八 天皇即位式概略

明治元年八月廿七日辛未

天皇御即位御大礼被為行候事、

御即位式概略

前二日、習礼

前一日 紫宸殿ヲ修飾ス、

当日早旦、庭上中階以南、正面十有一丈四尺ニシテ、

中央ニ大幣旗一旒、其左右日月兩幣旗各一旒、其東西

ニ御前幣旗各二旒ヲ列植ス、中階以南、左右二方七丈八尺ニ、左右幣旗各五旒ヲ对立シ、東西相距ル七丈三尺、其次ニ各東西ニ退ク五尺五寸ノ地ヨリ、左右小幡各五旒ヲ对樹ス、地球象ヲ階南中央二丈二尺ニ設ケ此日儀ヲ用ラル故ニ、地球象承明門内中央ニテリ、其南二丈二尺ニ奉幣案此日階上、又其南、又其南二丈二尺ニ宣命版、其南三丈ニシテ、東ニ折ル九尺外弁諸員ノ標ヲ設ク、当朝宣命文

天覽已ニ畢リ、コレヲ宣命使ニ下ス、諸衛各所部ヲ勒シ、前庭ニ立ツ、弁事御幣ヲ南殿ニ設ク、辰刻近衛府列陣鼓・進陣鼓・行陣鼓ヲ順次撃ツコト法ノ如シ、諸門鼓皆応ス、左右大將、近衛次將、中務省輔及内舍人、左右衛門及門部大舍人、内蔵、大蔵、掃部、主殿等官人、皆其位次ニ就キ、諸儀已ニ備ル、此時外弁以下幄座ニ就キ、典儀版位ニ就キ、九等官承明門外左右ニ列ス、外記諸儀備ルヲ内弁ニ告ク、内弁廣幡内大臣源忠禮公東階ノ南幄中ニ就キ、神祇知官事鷹司前右大臣藤原輔熙公、西階ノ西幄中ニ居ル、兵庫頭内弁ノ幄南ニ居ル、既ニシテ兵部丞、兵庫寮鼓師ニ命シテ、外弁ノ装筆鼓ヲ撃タシム、諸門鼓コレニ応ス、東西殿門ヲ開ク、少頃アツテ、褰帳命婦二人一ハ有栖川親宮、一ハ上野權典侍、威儀命婦二

人一一六下下下阿波阿波○於阿波高御座左右ノ座ニ就キ、左ハ中務卿職仁親王有稱、右ハ常陸太守晃親王山東東西階ヨリ昇テ、高御座ノ兩側ニ立ツ、次ニ侍從富小路前中務大輔藤原敬直朝臣左ヨリ、長谷美濃権介平信成朝臣右ヨリ進テ殿上ニ立ツ、高辻少納言菅原修長朝臣ハ左リ、五條少納言菅原為榮朝臣ハ右ニ、各簀子ニ対立ス、伴・佐伯二氏、承明門下ニ立ツ、門開ク、兵庫頭鼓師ヲ召シ、鼓ヲ擊シム以下鼓鉦兵衛頭、皆コレヲ命ス、諸門鼓皆応ス、七等官以上承明門ヨリ左右並進シテ位ニ就ク、輔相岩倉右兵衛督源具視卿、中階東南隅ノ東二丈五尺ノ地ニアツテ西面ス、議定中山儀同藤原忠能卿、正親町三條前大納言藤原實愛卿・徳大寺大納言藤原實則卿・中御門大納言藤原經之卿・越前権中納言源慶永卿・宇和島宰相藤原宗城朝臣、西南隅ノ西二丈五尺ニアツテ東面ス、参与・知府事・弁事・判府事今略其名其南ニ列シ、知官事・副知官事・議長・判官事・一等知県事今略其名輔相ノ南ニ列シテ相對ス、三等海陸軍將左第一幣旗ノ北一丈五尺、東ニ退ク一丈八尺ニシテ西面ス、又東方ハ一等知県事ノ南三丈、東ニ退ク一丈ニシテ、権弁事・権判府事・史官・一等判県事、西方ハ判府事ノ南三丈六尺、西ニ退ク一

丈ニシテ、権判官事・三等知県事・知司事等対立ス、夫ヨリ二等判県事・書記判司事等、一等判県事ノ南一丈ヨリ、西ニ折ル、三尺ノ処ニ列シテ北面シ、二等判官ハ三等知県事ノ南一丈、東ニ折ル、一丈五尺ニアツテ北面ス、八等・九等官ハ、承明門外ニアツテ、官掌・筆生、左ニ列シテ西面シ、守辰ハ東面ス此日兩儀ヲ以テ、七等官左右廻廊ニ列ス、次ニ外弁承明門ヨリ入テ標ニ就ク、又親王・公卿ハ兩廂北廂東三箇間、有位ノ諸侯ハ東廂ニ候シ、無位ノ諸侯、狩衣・直垂ノ徴士・雇士ハ日華門南側、中下大夫ハ月華門南側ニ候ス、是ニ於テ天皇清涼殿ヨリ御歩高御座ニ着御、内侍二人劍璽ヲ奉シテ前行玉座ノ左ニ置テ退ク、弁事御笏ヲ上ル、褰帳鉦ヲ拆ツ、褰帳命婦二名高御座後階ヨリ昇リ、御帳ヲ褰ク、諸仗警ヲ称ス、群臣齊ク宸儀ヲ拝ス、弁事御幣ヲ御前ニ上ツテ退ク、神祇知官事西階ヨリ昇リ、御幣ヲ受テ、コレヲ案ニ奉シ、再ヒ昇殿復奏ス、群臣再拜ス、宣命使版ニ就テ制ヲ宣フ制後ニ、群臣再拜ス、外弁上首三條西大納言藤原季知卿、進テ壽詞ヲ上ル詞後ニ、畢テ伶官樂ヲ奏ス、大歌樂畢テ群臣再拜ス、左親王礼畢ルヲ奏ス、垂帳鉦ヲ拆ツ、

褰帳命婦昇テ 御帳ヲ垂ル、諸仗蹕ヲ称ス、 天皇御本殿へ 還御、退鼓ヲ撃ツ、諸門鼓皆応ス、九等官先退ク、次ニ外弁、侍従、褰帳、威儀、内弁及ヒ參役諸員、順次退出、伴・佐伯、承明門ヲ鎖ス、諸衛解陣鉦ヲ鳴シテ皆退ク、諸儀乃畢ル、是ヨリ先連日霪雨、此晨俄霽、人皆 聖瑞ノ致ス所トス、此日群臣ニ盛饌ヲ賜フ、二次又四等官以下無位諸員、各黄袍一領ヲ賜フ、

六五九 宣命文

明治元年八月二十七日

宣命文写

現神止大八洲国所知須

天皇我詔旨良万宣布勅命乎親王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣布

掛畏伎平安官尔御字須倭根子天皇我宣布此天日嗣高座乃業乎掛畏伎近江乃大津乃宫尔御字志 天皇乃初賜比定賜倍法随尔仕奉止仰賜比授賜比恐美受賜留御代御代乃御定有可上尔方今天下乃大政古尔復志賜比權原乃宫尔御字志 天皇御創業乃古尔基伎大御世彌益々尔吉伎御代止固成賜被其大御

位尔即世賜比進毛不知尔退毛不知尔恐美座佐久宣布大命乎衆聞食止宣布然尔天下治賜留君波良弼乎得且平久安久治賜布物尔在止奈所聞爰朕雖淺劣親王諸臣等乃相穴奈扶奉事尔依且仰賜比授賜留食国乃天下乃政波平久安久仕奉止志所念行須是以弥抱正直乃心且 天皇我朝廷乎衆助仕奉止宣布 天皇我勅命乎衆聞食止宣

六六〇 壽詞

明治元年八月二十七日

壽詞写

八十日日波雖有今日乃生日乃足日尔掛卷毛畏伎明神止大八洲所知食須 天皇乃天津御位尔登里賜倍此乃御賀乃庭上尔親王諸臣百官人等恐美恐毛言祝奉且朝日乃豐逆登尔称辞竟申賜久

言卷波雖畏未因稚土稚志時高天原尔天神諸伊邪那岐命伊邪那美命二柱乃大神尔此多陀用幣流国乎修理固成止詔且言依志賜比伊邪那岐命天照大御神尔詔久汝命波高天原乎所知止事依而賜伎次天照大御神高木神之命以且 皇御孫之命乎天津高御座尔座且天津靈止為且 八尺勾瓏八咫鏡草

那芸劔三種<sup>乃</sup>神宝<sup>乎</sup>捧持<sup>賜比</sup>天言<sup>壽岐</sup>宣<sup>波</sup>皇<sup>我</sup>宇都御子<sup>皇</sup>

御孫命此<sup>乃</sup>天津高御座<sup>尔</sup>座<sup>三</sup>天津日嗣<sup>乎</sup>天地<sup>乃</sup>共万千秋<sup>乃</sup>

長五百秋<sup>尔</sup>大八洲豊葦原<sup>乃</sup>瑞穂之國<sup>乎</sup>安國<sup>止</sup>乎氣所知食<sup>止</sup>

言寄奉賜<sup>比</sup>國中<sup>尔</sup>荒振神等<sup>乎</sup>神問<sup>志</sup>賜<sup>比</sup>神掃々賜<sup>比</sup>語

問<sup>志</sup>磐根樹立草<sup>乃</sup>垣葉<sup>乎</sup>語止<sup>三</sup>天之磐座放天之八重雲<sup>乎</sup>

伊頭<sup>乃</sup>千別<sup>尔</sup>千別<sup>三</sup>天降依<sup>志</sup>賜<sup>比</sup>四方之國中<sup>尔</sup>山城<sup>乃</sup>日高

見國<sup>乎</sup>安國<sup>止</sup>定奉<sup>三</sup>下津磐根<sup>尔</sup>宮柱太敷立高天原<sup>尔</sup>千木

高知<sup>三</sup>天津日嗣所知行<sup>須</sup>皇御孫之命<sup>乃</sup>美頭<sup>乃</sup>御舍<sup>乎</sup>天

之御蔭日之御蔭<sup>止</sup>称辞竟奉<sup>留</sup>四方國者天之壁立極國之

退立限青雲<sup>乃</sup>靄極白雲<sup>乃</sup>墜居向伏限青海原<sup>波</sup>棹柁不干舟

鱸<sup>乃</sup>至留極滿都々氣<sup>三</sup>自陸往道者荷緒縛堅<sup>三</sup>馬爪至留極

立都々氣<sup>三</sup>明神<sup>止</sup>天下國<sup>乃</sup>八十國嶋<sup>乃</sup>八十嶋漏<sup>留</sup>事無久墜

留事無久弥高<sup>尔</sup>弥広<sup>尔</sup>所知食<sup>須</sup>皇御孫命之大御世<sup>乎</sup>手長<sup>乃</sup>

御代<sup>止</sup>堅磐<sup>尔</sup>常磐<sup>尔</sup>天地<sup>止</sup>共乎平久安<sup>久</sup>所知食<sup>事</sup>乃御賀<sup>乃</sup>

吉詞<sup>乎</sup>恐美<sup>恐美</sup>称辞竟<sup>申</sup>賜<sup>波</sup>久<sup>申</sup>須

慶應四年八月二十七日

アリカズニセム  
安理可須耳世武

句

ソノカズニセム  
楚乃可須耳世武

六六二 外国官准知事東久世中将英国公使へ贈ル

書

明治元年八月廿七日

以手紙致啓上候、然ハ当年二月三十日、閣下參 内之  
途中ニオイテ、貴國護送兵之内二人疵ヲ蒙リ、終ニ生  
業難宮ニ至リ候得ハ、今般帰國相成候趣、我政府ニテ  
モ致承知候、就テハ三月朔日附之書簡ヲ以テ申入置候  
通り、我政府ニテ右二名之タメ養育金差送申度存候得  
ハ、右養育之為メ並右二名之外疵受候六名へ、償補ト  
シテ此度洋銀壹万四千枚差進候、依之右金子之儀、銘  
々へ可然御分配被下度御頼申入候、右為可得意如此  
御座候、以上、

外国官准知事

辰八月廿七日

東久世中将

英国公使

六六一 大歌写

ワダツミノハマノマサコヲカンヘツツキミガチトセノ  
和太都美乃波末乃末左古遠可楚遍都々伎美賀千登世乃



明治元年(1868)

サー・ハルリー・パークス

閣下 外務省記

六六三 御東幸ニツキ薩・長へ御沙汰

明治元年八月二十八日

御沙汰書

長門宰相

薩摩少将

御東幸御留主中、機務商議之節、時トシテ大政ニ参シ  
候様、被 仰出候事、

八月

六六四 御東幸ニツキ供奉ノ面々へ御沙汰

明治元年八月廿九日

御沙汰書

今般蒼生 御綏撫被為遊度 思食ヲ以、 御東幸ノ儀  
被 仰出候処、当春以来数多ノ兵隊陸統御発遣等ニ付  
テハ、沿道宿駅ノ難渋不一方趣相聞へ、旁非常 御輕

装ヲ以、 御發輦被為在候程ノ儀ニ付、供奉ノ面々

御趣意ヲ奉戴シ、沿道休泊人夫使方ニ至迄、総テ心ヲ  
用ヒ、宿駅迷惑無之様可取扱候、万一權威ケ間敷不条  
理ノ取計振於有之テハ、当人ハ勿論、其主人長官ノ越  
度ニモ可被 仰付候条、小者末々ニ至迄、聊心得違無  
之様、其主人長官ヨリ嚴重可申聞旨被 仰出候事、

八月

行政官

六六五 垂水・平佐・喜入各小隊へ出軍御供上京

達書

一垂水 一小隊

一平佐 一小隊

一喜入 一小隊

右ハ

御出軍御供之内ニテ上京被仰付、明晦日御借入洋船ヨ  
リ被差越候条、当日八時陸軍所江無遲滞相揃、御船奉  
行問合次第乗付候様申付候、此旨大隊長并領主・御船  
奉行江申渡、可承向へモ可申渡候、

八月廿九日

良馬

〔卷〕  
辰八月廿九日

御本文之通、垂水留守居江申渡、平佐・喜入用頼へ

申渡、大隊長并御船奉行・物奉行へモ申渡候、

取次

北郷浪江

六六六 苗代川小隊出軍上京達書

苗代川一小隊

右ハ越後口江出軍被仰付置候得共、上京被仰付、明晦

日御借入洋船ヨリ被差越候条、当日八時陸軍所江無遅

滞相揃、御船奉行間合次第乗付候様申付候、此旨大隊

長并地頭・御船奉行江申渡、可承向江モ可申渡候、

八月廿九日

良馬

〔朱〕  
辰八月廿九日

御本文之通、伊集院地頭・大隊長・御船奉行・物奉

行へモ申渡候、

取次

北郷浪江

六六七 木戸準一郎贈大久保一藏書

巻封

市藏先生

準一郎

御直拆

八月廿八日癸九月三日落手

大乱筆御推覧奉願候、

数度御書翰一々相達、奉拝誦候、先以 御清栄ニ御尽

誠、大賀此事ニ奉存候、

一、金川府之一条不図及遷延、何とも奉恐入候、小松〔審刃〕

先生頓ニ御帰京ニ可相成之処、今以御帰京無之、彼是

ニて果敢取不申、早々御連無御座候てハ、実ニ御不都

合と奉存候、一ツに 條公〔三條孝亮〕より 東久世卿〔通也〕之御事、蝦

夷地御委任之儀被仰越候、必竟御地之御評議、いかゞ

ニ御決定可然哉、至急之御便りを以、金川府之御都合

御人撰事等、一ツ書を以早急被仰越し遣候様奉願候、

左候ハ、則日御連ニ相成候様尽力可仕候、実ニ金川府

御人撰事、東京御人撰事等ハ、誠ニ以御大事之事ニ奉

存候、可改処ハ迅速御改正ニ相成、真ニ

御一新之

御主意貫徹ニ至り候事、尤急務と奉存候、

一、長岡右京之事、何分ニも三岡主として彼之冤罪を

(八郎、由利公正)

申唱へ、只弟一人彼之相手と相成、昨日も已ニ一端を開きかけ候ほど之行がりにて、甚痛心仕候、たとへ彼冤罪ニもいたせ、於東京は屋敷等も被搜索候ほどの事ニ御座候へハ、於当官しらぬ顔にて所勤可相成筋ニ無御座、大姦軟大忠軟ニ無之てハ、難承訳ニ御座候

処、於弟もたとへ冤罪ニもせよ、強て無罪とも被思不申、決て大忠とハ不思寄事ニ御座候、右之行かゝりニ御座候処、諸彦へも得と相論じ置、相公へも申上置申

(岩倉具視)

候間、不如意彼是隙取、奉恐入候得とも、其中ニハ何と欵御一決ニ不至てハ不相成事と奉存候、

一、御出輦一条も兎角之事にて、不凶々々御隙取と相成、誠ニ以氣をもみ候までにて、苦心之至ニ御座候、漸供奉等之事も、今日御発令ニ相連、来月十三日より五日までニハ、無相連

御発輦被為遊候事と奉存候、然処此度軍艦之脱走にて変態生シ、終に

御出輦ニ關係仕候事出来不仕様ニと、祈念此事ニ御座候、已ニく其議相起り候ニ付、抗論漸御防き申上置

候、元より御疎ハ不被為在御事ニ可有之候得共、何卒製鉄船軟、別ニ堅固なる一軍艦ハ、急々御買求被被為在度奉存候、且又徳川亀之助恭順を尽し、尚最初軍艦中よりも真情吐露歎願仕候ニ付、格別寛大之思食にて、軍艦四隻徳川へ被下、引継徳川家名等も被立下候処、至今日如此之挙動仕候てハ、元より徳川亀之介之罪難免次第にて、奉対

朝廷候て、重々不屈之至ニ御座候、此段ハ徳川へも叱度御達し被為在候て、可然御事と奉存候、譎詐を以奉欺

朝廷候ハ、徳川之家風とハ乍申、至今日候てハ、皇国御興廢之際、御了簡難相成候事と奉存候、

一、御発輦御東着之上ハ、御親恤之 思食を以、態と御発輦被為遊候

御主意、則日偏く人民之心ニも貫徹仕候様有之度、付てハ其期御施行被為成候件々等、得と現場之処御取調らへ被為在置、直ちに御順序を以御施行相成候様、只々奉祈念候、此大好機を以百廢相挙り不申てハ、恐多くも

御主意、則日偏く人民之心ニも貫徹仕候様有之度、付てハ其期御施行被為成候件々等、得と現場之処御取調らへ被為在置、直ちに御順序を以御施行相成候様、只々奉祈念候、此大好機を以百廢相挙り不申てハ、恐多くも

御発轡之 御苦勞水泡ニ属し候而已ならず、前途之処  
甚御六ツケ敷可有之、只此度其御端相立居候ハ、  
将来之御隆盛実ニ奉想像候、先ハ不取敢一書捧呈仕度、  
如此ニ御座候、其中時下別て御自愛邦家之御為第一と  
奉存候、勿々頓首九拜、

八月廿八日

尚々別紙今日御布令相成候ニ付、差出し申候、已上、

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

明治元年(1868)

〔表紙〕

忠義公史料 明治元年八月二

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

六六八 各所死傷者人名

片山宗之進

同廿二日南樞岡同断

浅手

吉村寛次郎隊

田中

同廿三日南樞岡同断

深手

大砲隊

吉川重次郎

神宮寺駅へ引取死

同

分隊令官

服部己之助

同

打橋愛次郎隊

小原大輔

同

大砲隊夫卒

秋田産

與之助

同

同

竹藏

廿三日蛭川口同所

浅手

振遠隊附属

秋田藩

同廿四日南樞岡同所

滑川善八郎

上原元輔隊

中山長藏

深手

吉井麟三郎隊

小西多市

同

西源藏隊

小西良之助

同

書記

彭城貫一

深手

薬師寺益三郎隊

村井俊助

即死

松江勝次隊

嚮導

矢島廣助

上原東馬隊

同

緒方安市

即死

薬師寺益三郎隊

宮下鐵彌

同

半隊令官

西賢次郎

同

薬師寺益三郎隊

田川三郎

同

上原東馬隊

堀川立造

即死

薬師寺益三郎隊

松田重助

深手

同

神宮寺駅へ引取死

同

伴 為助

右ノ者共同様逃去、手向ニ付討取候、

(144)

六六九 京都本営役所ヨリ長岡戦状報告

一長岡戦陣之各隊、去月二十五日、海陸大挙シテ攻撃之

大策ヲ設、同二十三日ヨリ銘々受持之台場江致進撃候  
処、賊徒ハ虚ヲ察シ、同二十四日夜半過、間道ヨリ三  
四百人意外ニ出兵、長岡城下并市中ニ押入・大小砲ヲ  
打立、火ヲ掛候処、屯置候彈藥等悉ク及焼失候、勢ヒ  
ニ乘シ、賊兵早速進撃スルニ就テ、官軍前後ニ敵ヲ受  
ケ、各隊必死ニ防戦スト雖モ、諸所火ヲ掛、彈藥庫ハ  
勿論、兵糧運送ノ道ヲ絶候、終ニ長岡取返ラレ、長岡  
城ニ籠候官軍都テ出払此時空城ナリ、進□イカントモ  
スヘカラス、不得止關原ト云フ所迄四五里引退キ、至  
極苦戦之為急報谷川八百助外ニ式人早速致帰京候付、  
彈藥葉玉急キ御差送可

度、尤戦争之事件ハ、本人

共ヨリ委細可申出候、此段早々及御掛合候、已上、

淵邊直右衛門・川南東右衛門ヨリノ一封相添、差

上申候、

八月十三日

京都本営役所

一当地去ル二十五日、山手ハ長州受持、平易之方ハ薩州

受持ニテ、朝四字ヲ期限ニ進撃之処、賊兵長岡城下江  
不意突入後口ヲ絶レ、腹背ニ敵ヲ受、皆隊必死ニ防戦、  
成丈ケ踏コタヘ候へ共、乍残念關原ト申所迄退軍、就  
テハ彈藥等モ過半被相奪、最早九万発計手当ニテ甚之  
敷、切迫此事ニ御座候、右ニ付御差送給候様、態々谷  
川八百助・肝付直右衛門・伊東新八早々御差遣シ可給  
候、此旨御問合申上候云々、

同日

淵邊直右衛門

川南東右衛門

六七〇 某氏通信書節録

昨四日早天、又々双方ヨリ打合、味方モ三人計即死、七  
八人輕我、敵方ハ死人百人計モ可有之、大小砲ヲ打捨、

散々ニ逃行、生捕モ段々有之、其内桑名士某伏見口合戦、是モ大勝利、伏見奉行所へ千式百人計籠居候ニ付、三方ヨリ取巻火ヲ掛、大砲打込、百人計打取、道中へ死亡ハ百人計モ可有之、諸所へ死ス味方死方死<sup>ツク</sup>四人、手負拾五人計、其内貴島勇右衛門モ少々薄手、八田幸輔・飯牟禮喜之助モ同断ノ由、未直ニ逢不申、人伝承申候、伏見町六部通焼亡、味方ノ死亡十三人、四日夜迄ノ形行一戦ノ大勝利、薩兵天下ニ無敵、長州モ五百人計是亦大ニ戦争、大小砲軍ニハ能習居候、土佐ナトハ物ノ数トモセス、立見同然、藝州モ同断、

### 六七一 八月十九日上田藩届書写

越後表ノ儀、先日御届申上候後、去月二十五日惣軍御進撃ノ旨、諸藩へ御達有之、廿四日ヨリ夫々分配相成候処、賊長岡城空虚ニ乗シ、同夜半頃俄ニ襲来、亀貝・福島・稻葉等ノ村一時ニ出火、引続長岡入口新保村并城下数ヶ処及放火、御本宮ヲ始弊藩宿陣近辺銃丸如雨、一体弊藩人数ハ、山ノ手・川ノ手両所ニ分在、長岡表ハ小荷駄耳ニテ、殊ニ急襲故、諸藩モ引揚候勢ニ

付、右小荷駄引纏一ト先下條村へ引揚、翌二十五日ニ至リ、猶又小千谷へ引揚申候、尤弊藩人数山・川両手同夜ヨリノ戦争、左ノ通御座候、

一川邊村へ出張ノ人数前書ノ通、廿五日ニハ愈進撃ノ手配附置候処、廿四日夜八ツ時過頃、台場ノ筋違凡二十間内外ノ萱原・溝沼等ノ地へ賊徒潛入、俄ニ発砲候ニ付、直ニ応発及攻撃候へ共、猶進撃ノ勢ニ付、烈敷散弾打掛、聊畏縮ノ様子ニ候処、右ノ地形故成功無之内ニ、大口村ノ地方ハ砲声夥敷、又長岡ノ地方ハ放火甚敷候間、夫々斥候差出、兵隊ハ尽力防戦候へ共、賊亦必死甚苦戦故、其段薩藩へ及報知、同藩ヨリ分隊程応援候処、長岡ノ方火勢愈熾ニ付、下條村ノ方へ転移相成候、然ル処殆黎明ニ至リ、賊ノ進退俯仰漸々相弁、一際奮戦術ヲ尽候ニ付、賊支兼遂及敗走候、依テ賊散却ノ跡ヲ檢候処、流血数ヶ所、左候へハ余程死傷モ可有之候、然ル後、官軍長藩進撃ノ勢盛ニ候へ共、長岡焼亡ニテ彈藥無覚束候間、一旦關原へ引揚候様通達ニ付、薩藩へ打合夜中出足、翌廿六日同所へ着、無程御本宮ヨリ早々大嶋村へ繰出候様御達ニ付、直ニ出張候処、高田・松代藩ト草生津ノ渡船場相守候様、重テ



御達ニ付、持場ヲ定メ昼夜対戦固守罷在、同廿九日晝  
ニ至リ諸手進撃、弊藩モ及烈戦、賊遂ニ敗走、其砌長  
藩ヨリ演説ニテ、長岡迄進軍御達ニテ、同夜五ツ時過  
浦瀬村迄相進ミ申候、

一 山手ノ方廿四日夜半後、砲声盛ニ相響、比禮村ノ方ニ  
當リ放火、右ニ付長藩ヨリ通達有之、人数繰出候、程  
川村弊藩台場へ、薬師堂御固御親兵ヨリ、頗難戦ニ付  
右村へ応援候様申来、依テ直ニ両道ヨリ進撃候処、賊  
村中ニ散布、頻ニ発砲候間、畑畔・木立等ヲ楯ニ取、  
及烈戦候内、高田藩ヨリ応援モ有之、又一手ハ別テ及  
接戦候、然ル処へ御親兵御繰出、諸手一同激戦、賊悉  
ク及敗走候、其後所々転陣、廿七日半蔵金へ宿陣仕、  
山上へ台場等築立固守罷在候、尤夫々戦争ノ節、死傷  
並分捕之品々、別紙ノ通ニ御座候、右之次第出張先家  
来共ヨリ不取敢注進仕候ニ付、可申上旨伊賀守申付越  
候、此段御届申上候、以上、

〔最後のケ条は維新日誌にて補正〕

八月十九日

松平伊賀守家来

赤座壽兵衛

### 六七二 新發田表戦状報告

一 御所益御安全被為揃恐悦候、兼テ申上候通、海陸モ追  
々進撃、已ニ海軍松ヶ崎江上陸、素ヨリ内応之次第、

右ニ付新發田表江一隊進撃致シ、一隊差出候処、則重  
臣以下出張帰順明曉迄、尚又一昨二十九日当主誠之進  
井重臣溝口半兵衛・入江八郎左衛門付添、柏崎御本陣  
江罷出、勤王無二之事情言上仕、当主儀ハ御本營滞在  
仕度旨願出、国情モ有之候ニ付、御聞濟ニ相成候、此  
上拳国尽力可仕旨ニ御座候、右ニ付、御届旁其外要用  
モ有之候趣ニテ、同藩人吉川正吾・岡田覺吉上京仕候  
付、尚又彼之地之模様、海軍進撃之順序等委細御聞取  
可給候、

一 陸軍二十八日・二十九日・八月朔日連日激戦、既ニ長  
岡以後追々進撃、最早加茂・三條近所迄撃入候テ、一  
拳二三條之巢窟モ攻抜可申形勢ニ御座候、賊兵モ追々  
逃去致候由、出雲崎口モ間泊ヲ攻抜、余程進軍致候旨  
申越候、新發田速ニ帰順ニ付、近許藩々モ追々帰降之  
色相顕候、尚追々吉報可申上候、頓首、

八月十二日四字認

六七三 柏崎本營ヨリ京都軍務官へ届書

岩國兵四小隊三砲一昨日到着仕候、外々隊ハ、先觸参り候分モ未到着無之、追々途中迄人ヲ差出申候、壬生殿モ今夕揚碇松ヶ崎江出張相成候、敦賀へハ、明日・明後日之内蒸氣船式艘相廻候賦ニ御座候、

柏崎

御本營

京都

軍務官

六七四 薩摩藩届書

江戸表ヨリ奥州平瀧へ海路相廻候兵隊、先月七日致着岸候処、同国七本松へ賊徒台場ヲ築キ致屯集候ニ付、同十日小名濱ヨリ兵隊繰出、正面又ハ後山手へ分隊、或ハ間道ヲ経、三方ヨリ致攻撃候処、賊徒同所左右ノ山半腹三ヶ所ノ台場ヨリ、手繁ク致砲発候得共、前後ノ攻撃ニ難守得引色ニ相成候処ヲ、益進撃イタシ候処、散々ニ致敗走候ニ付、四ヶ所ノ台場都テ取壊、兵隊引

揚申候、其時弊藩宮地源太郎手負仕、戦死無御座候、打取候賊七人、其余打捨有之候得共、山中ノ事故死体取調出来兼申候、左候テ同十三日岩城平攻撃ノ儀、各藩一同相決、弊藩大砲隊半隊・小銃三小隊、十二日十二字比ヨリ小名濱繰出シ、致進軍候処、薄磯・沼之内境へ賊徒台場ヲ築居候ニ付、砲発致攻撃候処、賊徒散々ニ敗走、下高久村迄追討、打取一人、暮時分兵隊引揚、沼之内へ宿陣致シ申候、  
同十三日、下高久村宿陣ノ弊藩三小隊半、曉五字頃同所繰出致進軍候処、下高久村又ハ中山村へ賊徒台場ヲ築キ、致砲発候ニ付、手配ヲ以致攻撃、暫時ノ間ニ兩所ノ台場乗取、賊徒悉追払、打取二人有之、直ニ進軍、八字比平城へ押寄、且小名濱滞陣ノ弊藩五小隊ハ、同日曉三字過ヨリ同所繰出、空地山口進軍、クジ山へ屯集ノ賊徒悉追払、打取二人、八字比平城へ押寄、各藩モ同様諸口大小砲ヲ以致攻撃、外郭ハ無難攻取り候得共、城中ヨリモ嚴敷防戦イタシ候ニ付、容易ニ難攻拔、夕五字比ヨリ 官軍一同猛烈烈砲発致攻撃候得共、更ニ相弱リ候体モ無之、且味方曉ヨリ終日ノ戦ニテ相勞候間、諸隊先引揚候様命令有之候得共、今引揚候テ

敵又備ヲ立替候テハ、是迄攻詰候功勞皆水泡ト可相成候間、此氣ヲ不失可攻抜ト致決策、各藩同意ニテ益烈敷攻詰候処、七字比ヨリ城中砲声モ漸々絶々ニ相成、当夜十二字比自焼、終ニ及落城申候、

翌十四日平城涯ニテ相斃候賊徒死骸取調候処、四十二人有之、各藩同様攻撃ノ事ニテ、誰ノ手ニ打留候儀不相分、其他諸藩ノ掛口固場先キニテ打留候モ有之候得共、右ハ其藩々ヨリ御届可申上儀ト奉存候、

一生捕六人、

一城内へ乗入候処、諸所へ死骸ヲ埋候跡有之候得共、首級細詳取調出来兼申候、

戦死手負并分捕

戦死半隊長

末弘 武輔

深手小隊長

樺山十兵衛

戦兵

税所雄之助

永田彦兵衛

種子島吉兵衛

竹内 筭七

松清喜之助

末野 角二

末野正之助

末野 勇藏

末野 仲吾

浅手監軍

池田次左衛門

半隊長

志々目彌平次

小頭

土持直五郎

東郷太左衛門（東郷太左衛門九）

戦兵

本田 休助

床次勇四郎

江川覺兵衛

東郷 勇助

有馬 春齋

中村九之丞

一大 砲 一挺  
 一火藥箆筒 拾五荷  
 一銃 丸 六箱  
 一土 藏 但米藏 五軒  
 一四斤半砲 一挺  
 一百目位車砲 一挺  
 一携 臼砲 二挺  
 一小 銃 拾五挺  
 一水 藏 二軒  
 但一軒六拾五俵入、

志々目藤兵衛  
 瀨尾助五郎  
 財部與八  
 北郷伴兵衛  
 肥田藤吉  
 岩崎靜一  
 長井守介  
 今井四郎兵衛  
 肝付英助  
 從卒 小助

一軒四俵、其外糖俵數不相分、  
 右之通、奥州岩城平出陣島津伊勢・島津左衛門ヨリ申  
 越候ニ付、此段不取敢御届申上候、以上、  
〔立憲〕  
〔久憲〕

八月廿日

薩摩少將内

新納嘉藤二  
〔立志〕

六七五 八月廿六日立二本松ヨリ報知之抄略

九月

八月廿日薩・長・土・大垣・大村之五藩會津へ進擊相  
 成、廿日・廿一日・廿二日ト毎々勝利ニテ、廿二日ニ  
 ハ猪苗代ヲ越テ式里計先迄進ミ、最早若松城ヲ去ル事  
 一里半計ト申所迄、進擊ニ相成候ヲ見留、探索小堀勝  
 之進・藤山秀次到着致シ、其後之処探索人未タ帰リ不  
 申候得共、廿三日朝ヨリ城下ニテ烈戦、八ツ時比終ニ  
 落城之趣、出張土州本宮へ報知有之候由、奥羽之根本  
 如斯、尚又上杉ヨリ昨夜二本松へ重役軍監出降申立候  
 ニハ、是迄九條卿鎮撫使トシテ御下リ候得共、彼是  
 王師之御取扱方トモ不被存件々モ有之候ニ付、奥羽諸  
 藩約定防禦致候得共、追々

王師御征討ニ付、初テ真之御征討タルコトヲ知り、素ヨリ

王師ニ抗スル意ハ更ニ無之候ニ付、帰降仕候趣申出候由、右御許容ニ相成候ハ、庄内・仙臺等モ説降シ、若婦順不致候ハ、其節ハ先鋒ト相成、進撃可仕ト申出候由、

中山道へ進候官軍ハ、中山ヨリ前荒町ト申辺ニ、台場要所へ構エ置、一戦有之候処、迎モ進撃難相成地ト見込候歟、右ヲ外ヅシ母成ボナリ道へ出、惣一同ニ進候趣ニ御座候、

九月

彦根藩

〔采〕一右之通、出先ノ者ヨリ申越候ニ付、此段御届申上候、以上、

九月

彦根中將内

田部金蔵〔

六七六 土州藩渡邊清左衛門ヨリ大村益次郎・吉

村長兵衛へ書翰

八月蒸艦ヨリ到来

以飛札申上候、府下兎角不穩振合、嘸々御配慮奉察候、此方模様時々相替リ近来大ニ都合宜、則後条ノ通、土藩澤本盛彌米藩説得、并清左衛門米人応接、澤本去ル十四日ニ本松発足、途中山野ニ伏泊シ、同十八日庭坂ニ至リ、米軍監杉山守之進へ面会、条理名義論説ノ上、土藩重役之書翰差出候処、杉山落涙感服云、是迄全ク上国ノ道路梗塞、

天朝ノ御趣意更ニ不相分、不得止ノ次第ヨリ今日ノ形勢ニ立至リ候云々、続テ重役相談議論一決、右杉山早打ヲ以米城ニ馳セ、主従決論ノ上、米総督大國筑後庭坂ニ来ル、会兵ヲ境内ニ入サル手配ヲ為サンタメ、又城下ニ馳ス、廿三日市川宮内重役ナリ謝罪ノ為、庭坂ニ来ル、依テ澤本儀、市川・杉山兩人ヲ召連レ、廿五日ニ本松陣屋へ来ル、米人申出左之通、

勤王ノ儀ハ、従前ニ宿志ニ付、官軍ニ抗スル意毛頭無之候得共、九條殿ノ御沙汰朝夕相替リ、奥羽列藩疑惑百端イタシ、王政御一新ノ時ニ当リ、斯ク御廟謨定ナキハ、真之

叡慮ニ無之歟ト、奥民頑愚ノ性質ニテ、一凶ニ相考へ、遂ニ今日ノ形勢ニ立至、深く奉恐入候、然処此節澤本

殿御説得ヲ受始テ氷解、主從敬服仕候、乍去列藩盟約ノ儀モ有之候得ハ、我耳生路ニ就テハ、義ニ於テ不相濟候付、仙臺重役へ相談ノ為メ白石へ馳セ論説ノ処、其重役モ同意仕候、就テハ猶仙城・庄内・南部其他へ馳セ説得可仕、若我論不用時ハ何卒先鋒被仰付候ハ、官軍ノ御手ヲ汚サス討伐可仕云々、今日ヨリ十五日ノ間御猶予被成下候ハ、奥羽列藩降伏謝罪説得可仕、夫迄ノ間弊境御討入ノ儀、御見合被下度奉願候訳ノ儀ハ、今日ノ決論未兵士へハ漏洩不仕候付、如何様失敬仕候儀難計ト云々、境外へ差出置米兵悉ク境内警衛可仕候、殘賊ヲ不入為ニト云々、

一米人問、会兵ノ境内ニ罷在候者ノ所置如何可仕哉、  
清左衛門答ニ、戦鬪決心ノ者ハ捕縛シテ此方へ可申出、謝罪歎願ノ者ハ揚屋へ入置、番兵相附ケ、是又可申出、婦女子ハ一切御構無之、  
一米人問、謝罪手続ノ道如何可仕哉、  
清左衛門返答、越後口・相馬口ハ其方ノ官軍へ可申出、此方八丁目迄可被申出云々、  
一米人問、棚倉・福島・二本松主境内ニ參り居候者ノ所置、如何可仕哉、

清左衛門答、致説得同意ニ候へハ、自ラ八丁目迄罷出、降伏謝罪可致云々、

一米人問、輪王寺宮白石へ被為入、其所置如何可仕哉、  
清左衛門答、早々東京へ御越ノ手続ヲ以、官軍ニ御送り可申上云々、

一米人、是迄奥羽ノ情実喋々申述候付、此儀ハ唯今申出候儀ニテ無之、只即今ノ実効相立候得ハ、朝廷ノ御思召有之候事故、何事不承云々、

一玉ノ井戦争ノ節、會ヨリ米ニ使ヲ馳セ云、石筵口甚タ急地、依テ急速二本松ヲ襲遂候様云々、米云、我亦急也、出兵不相叶ト云、

一澤本儀ハ杉山同伴、即夜又米ニ向フ、此後米藩ノ所置監察相願候付テナリ、市川儀ハ仙臺説得ノ為即夜発足、

一高鍋藩坂田諸潔、岩村虎雄、澤本・杉山同道米ニ入ル、  
高鍋藩兩人米説得ノ為、先達テ江城ヨリ二本松迄參居候得共、道路梗塞且機会見合居候処、此度ノ一件付テハ、即時入米申付候事、

一太政官第四十九ノ日誌、米人へ相渡仙臺へモ相渡候様、是又米人へ託ス、

一海軍合併ノ都合不相叶候得共、時候相迫り、不得止薩・長・土・大垣・佐土原并備前分隊去ル廿日ゴナイ峠ヨリ打入、廿三日若松攻撃、廿七日迄烈戦仕候

得共、賊決志未落城不致、乍去既ニ本賊而已相残居候故、不日落去ト存、右ノ模様ニ付、明日ハ彦根、柳川兵隊ニテ三小隊計援兵トシテ差出可申候、越後

口ノ官軍未打入不申、如何ノ模様ト苦心仕居候、

一奥羽諸藩ノ儀ハ、成丈ケ御寛典無之候テハ相叶間敷、何レ不遠同勤ノ内急速帰府可仕候、

一奥羽弥降伏相成候テモ、当分兵隊ヲ引揚候儀ハ、決シテ不相叶候、越後ノ兵ハ米澤・此方、陸軍ハ福島、海軍ハ中村ニ屯在、大会議可仕ト奉存、乍去是ハ私而已ノ愚案ニ御座候、

一木梨・城・高橋三子未着陣不致、疑惑罷在候、右ノ件々不取敢申上候、猶期後便候、不具謹言、

八月

渡邊清左衛門

大村益次郎様

吉村長兵衛様

猶々、福島藩ハ同盟ノ儀、元ヨリ素志ニアラス、既ニ先月廿七日脱走官軍ヘ降り、即今彦根藩ヘ加ハリ、

賊ト戦ヒ申候、外定府ノ者六人内家老老人、因州藩  
ヘ依頼ノ周旋尽力ノ筋モ、即今二本松ニ罷在候、草々頓首、

六七七 三條實美ヨリ岩倉具視ヘ書翰

一秋冷之節御座候処、

主上益御機嫌能奉恐悦候、当地無事御安慮申入候、拟品海旧幕軍艦・帆前共七艘、今朝見得不申、脱走之趣無相違候、尤行先慥ニ不相分候得共、推察仕候処、万一ハ薩・長二国之中ニ相廻候哉ト、甚懸念ニ不堪申候、尤二藩共海防警備は兼て可有之間、油断有之間敷候得共、自然虚を衝候ては東征之兵士後顧之念を不免誤故、実ニ痛心此事ニ御座候、依之以飛檄、不取敢脱走之次第御通達ニ及申候、猶行先相分候ハ、急々可申達候、先急絶て迅速報知申上候、恐々敬白、

八月廿日夜

實美

輔相明公

二伸、薩・長二州江相廻候処、尤臆察之事にて、決て確説ニテ無之候間、不虛之警戒可申入候、併榎本

之遺書文意、甚懸念之至ニ不堪、意味相頭候間、臆察なから痛心之余リ至急ニ密報仕候、自然相違之程ハ難計候間、確証ナキ説ニ動揺ヲ引起シ候てハ、実ニ不容易大苦ニハ可相成候間、能々御深慮機事漏泄不致様、吳々奉頼入候、

三白、軍艦之義ハ兼て懸念不少事候故、百方総督府も運籌有之、猶米之鋼鉄艦ニハ種々手を尽し候処ニなから力ニ不及、遂ニ今日之次第ニ至候事、切齒之至不堪候、頗遺憾不少御座候、奉対

朝廷候てハ、我輩之不行届、実ニ恐縮之次第御座候、

六七八 八月廿四日奥州二本松ヨリ報知抄略

六七八ノ一

去十五日、白川湯本口警衛之兵隊、福島口へ転陣之令アリ、同十七日白川出発、同十九日二本松へ着陣、以前分隊之兵二本松之守兵ト合併ノ令アリ、備前・忍・柳川藩等ト同陣也、不遠福島へ進撃相成べく、賊ハ仙臺六百、棚倉五小隊・米澤一小隊計リ籠リ居候由、尤先鋒會津へ進撃之時ハ、賊必後ロヲ襲フヘキ地ニ付、上杉・仙臺之押へ也、

一去ル廿日薩・長・土・大垣・大村五藩、二本松宮等ヨ

リ會津へ進撃、ボナリ・中山両路ヨリ進ム、ボナリ道之官軍其日未刻ヨリ申刻迄戦闘勝利、其夜玉井ニ屯シ、翌廿一日ボナリ前一・二・三ト台場有テ、極テ嶮岨要害之地ニテ、賊頗ル防戦スレトモ、終ニ奮進三所並清水ト云台場迄モ抜キ、其夜ボナリニ屯シ、廿二日モ追々進撃、猪苗代迄ハ容易ニ進入之由、猪苗代ヨリ一里前迄差出シ置シ探索人報知ス、其歸ル頃ニ、猪苗代方ニ、火焰飛揚ス、定テ賊塞之焼ルナルベシ、二本松ヨリ猪苗代迄十里半、猪苗代ヨリ若松迄五里也、要地ハ悉ク拔レタレハ、忽チ落城ニ及ブヘシ、官軍実ニ勇戦也云々、

報知中

別紙

唯今探索之者、猪苗代ヨリ昨朝立帰リ着、一昨廿二日猪苗代乗取、夫ヨリ先二里計進軍相成、猪苗代ハ防戦之要所、大河等モ有之処、何之備モ無之、最早ボナリ之戦引取候ヨリ悉ク逃去、城下へ引取候欵、無人地ヲ行如ク、昨朝出立途中ニテ後ロニ火之手上ル、若松落城ニ可有之卜、其地之者申居候由云々、



八月廿四日

六七八ノ二

八月廿四日付ニテ奥州二本松ヨリ報知抄略

八月十七日辰刻二本松へ賊進来之報アリ、忽斥候ヲ出ス、賊ハ二本松駅内東之方仏寺ノ前ニ群集ス、斥候何之藩ヤト問へハ、仙臺ト答フ、斥候直ニ引還ス、賊之ヲ悟テ頻發砲ス、兼テ八軒<sup>原マ、</sup>ヨリ先五町計リニ胸壁ヲ築キ、一番隊實名徳次郎出張、本道ヨリ右之方五町計リ谷地山へ田中與左衛門隊出張、左之方観音山へ堀部彌次郎隊出張埋伏ス、斥候隊ヲ以テ本道油井村辺ヨリ發砲ス、暫シテ欺テ敗走之如クス、賊モ亦進来ス、巳ノ刻頃ニ至リ互ニ戦ハス、時ニ土州兵隊二三小隊来テ、賊来ラスハ吾ヨリ当ラント云、是ニ於テ、本道ヨリ右之山手ハ吾藩ニテ進撃セン、土州ハ左ノ山ヨリ進撃セント決議シ、三方ヨリ攻メントス、油井村ノ兵第一ニ戦、賊之ヲ專ニ防ク、此隙ニ乘シ左右之山ヨリ急ニ突入ス、賊狼狽防禦能ハス、忽チ敗走ス、猶之ヲ逐テ一里半計、八町目宿ニ至テ止ム、此戦賊ヲ斃ス數十、吾藩ニテ明ナルハ、三宅米太郎賊首一級ヲ得テ、其余大砲三門・弾薬三包ヲ分取ス、賊人数凡千五六百ト云、

未刻繪軍凱還ス云々、

右之通御座候、

九月

彦根藩

島津忠義家記

六七九 外城士城下同様士族ト改称云々知政所

達書

外城士之儀、此節御城下同様士族ト名目被相改候、就テハ諸御蔵々手伝相勤候面々、士分不相当之職務ニ候間、被免候条会計局総裁ニ可申渡候、

戊辰八月

知政所

六八〇 諸隊進撃準備

明治元年八月

朔日越後信濃川

外城四番隊

同日同国保田

四番大砲隊一番砲車一門

同日越後三嶋郡五十嵐川

二番大砲隊右半座

七番小銃隊

十三番小銃隊

番兵二番隊

外城二番隊

同日越後村松城下

外城三番隊

四番大砲隊三番砲車一門

同日越後蒲原郡福嶋村月津山

外城二番隊

番兵二番隊

同日蒲原郡柳澤村・福嶋村兩所進擊

七番小銃隊

十三番小銃隊

二番大砲隊半座

同八日羽州雄勝郡岩崎河原

四番遊擊隊

同日・十一日越後之内會津領小松村進擊

七番小銃隊

外城二番隊

四番大砲左半座

同日越後之内會津領馬下村陣ヶ峯・佐取村兩所

七番小銃隊

十四番小銃隊

外城四番隊

同日越後黒川

外城一番隊

同日越後坪穴

四番大砲隊三番砲車一門

同十一日越後岩船進擊・村上落城

徵兵隊

同十二日越後蒲原郡高石口田川内村

十三番小銃隊

同日越後佐取村

外城四番隊

四番大砲左半座

同日越後高石村進擊

番兵二番隊

同十四日越後山之内村ヨリ赤谷進擊

明治元年(1868)

四番大砲隊一砲門

十番小銃隊

同日越後岩屋峠

外城四番隊

同日同国五十嶋

外城四番隊

同十五日・十六日越後小松村并諏訪峠進撃

四番大砲隊

同日越後山之内村ヨリ會津領新屋村迄追討

十番小銃隊

同十七日奥州二本松領塩澤村

十二番小銃隊

同日奥州二本松へ賊襲来

私領二番隊

同日越後蒲原郡石間口

外城二番隊

同十八日越後五十嶋村

十四番小銃隊

外城四番隊

同日越・羽両州境榎木峠

外城一番隊

廿日奥州中山口

私領二番隊

同日奥州二本松領之内玉之井

三番大砲隊

五番小銃隊

九番小銃隊

兵具一番隊

私領一番隊

同日會津領横川

私領二番隊

同日若松城攻撃ニ付途中賊兵ト一戦

番兵一番隊

同日會津領山ノ井

九番小銃隊

十二番小銃隊

同二十一日會津領母成峠関門正面ヨリ

九番小銃隊

十一番小銃隊

十二番小銃隊

一番大砲隊

二番大砲隊

三番大砲隊

臼砲隊

兵具一番隊

一番遊擊隊

同日同所山越ニテ賊ノ背後ニ出ル

一番小銃隊

二番小銃隊

三番小銃隊

四番小銃隊

五番小銃隊

六番小銃隊

同廿二日越後松峠

外城四番隊

同日會津之内十六橋迄

四番小銃隊

九番小銃隊

兵具一番隊

同日會津領猪苗代

一番遊擊隊

一番大砲隊

二番大砲隊

臼砲隊

一番小銃隊

二番小銃隊

三番小銃隊

五番小銃隊

六番小銃隊

十一番小銃隊

十二番小銃隊

同廿三日會津攻撃

一番大砲隊

二番大砲隊

三番大砲隊

臼砲隊

一番小銃隊

二番小銃隊

三番小銃隊

四番小銃隊

明治元年(1868)

同廿三日、會津討入ヨリ九月廿二日賊主松平容保降伏後

ニ至迄、若松城下滯陣之諸隊持口昼夜連戰、

- 五番小銃隊
- 六番小銃隊
- 九番小銃隊
- 十一番小銃隊
- 十二番小銃隊
- 一番遊撃隊
- 兵具一番隊
- 私領一番隊
- 一番大砲隊
- 二番大砲隊
- 三番大砲隊
- 四番大砲隊
- 一番小銃隊
- 二番小銃隊
- 三番小銃隊
- 四番小銃隊
- 五番小銃隊
- 六番小銃隊

- 七番小銃隊
- 九番小銃隊
- 十一番小銃隊
- 十二番小銃隊
- 十四番小銃隊
- 一番遊撃隊
- 番兵一番隊
- 外城二番隊
- 外城四番隊
- 兵具一番隊
- 私領一番隊
- 私領二番隊
- 私領三番隊
- 私領四番隊
- 合計
- 合計人員
- 合計大砲
- 同日羽州秋田領仙北郡花館駅并大曲辺並及四屋村
- 十五番小銃隊
- 十六番小銃隊

番兵三番隊

四番遊擊隊

番兵四番隊

外城國分郷隊

外城蒲生郷隊

同廿四日同所

外城國分并蒲生隊

九月

六八一 上村休助ヨリ田畑平之丞へ書翰

一 肝付直左衛門(マ)外両名、北越ヨリ御地之様被差立候ニ付、

一 輪奉拜呈候、秋暑去兼候へ共、諸君被為揃、弥御多  
祥被成御忠勤奉拜賀候、於京師両大夫御安康、小松家

ハ去ル二日夕御帰帆、横濱ヨリ去月二十八日英船江御  
乗込之由、東郷子モ至極之安全、爰許ニテ緩々取会、

江戸表之諸件モ委細奉承知候付、猶又追々万事細承り、  
罷下候上申上候様可仕候、

一 越後表戦争之次第、先月三日迄ノ形勢ハ、村田新八外  
兩人ヨリ御聞取被下候半、其後互ニ守戦迄ニテ、進撃

見合候処、追々官軍八千計出兵、渠ヨリハ勢同候半、  
同二十三日夜下輩之間牒ヲ入候テ、御国并長州之火薬  
格護所近辺江諸所火ヲ掛、終ニ為及焼失由候へ共、幸  
右之所へハ我藩之人數ハ勿論、火薬モ纔計格護、夫計  
ニテ相濟、然処同二十五日朝八字ヲ期限ニ、官軍進撃  
之処、御国勢ハ長岡ヨリ追々進発、賊之砲台二ツ三ツ  
相破居候処、長岡之城下江火之手相見得、砲声相聞候  
付、直様引返候処、長岡賊兵其虚ヲ伺ヒ、間道ヨリ三  
百計不意ニ突入、尤長岡江ハ纔ニ長州之干城隊一小隊  
守防マテニテ、折角防戦候へ共、何分敵会稽之恥雪ニ  
必死之究兵追々引揚候折柄、御国兵モ返シ合皆隊必死  
之防戦、繰引信濃川迄引揚候処、追々日暮ニ相成、折  
能渡船四五艘手当出来、同夜川向江転陣、乍残念右意  
外之寄手ニ長岡之城被取返、此一挙ハ相応之苦戦ニテ、  
死傷モ少々ハ為有之由候へ共、未委細相分不申候、其  
以来同二十八日彼表ヨリ被差立候飛脚、去ル四日京師  
江着、二十六日以来ハ、川越ノ守衛迄ニテ戦争ハ無之、  
其後ハ敵兵モ格別過分ニハ不相見得由、就テハ右戦争  
後岩川一小隊・佐土原二小队着陣、其外越州・加州・  
富山ヨリモ四・五小队出勢之由候ニ付、又不日長岡ハ

勿論、彼表諸方之守口モ可致瓦解、追テ吉報可奉申上候、

一 奥羽表之形勢ハ、大山格之助書状并探索書ニ細詳相見

得候通、是迄賊ニ与シ申候六郷兵庫(政監)石羽州本庄(六万二拾老)・岩城左

京大夫(二万石)同龜田(編歌、矢島藩主)・生駒大内蔵等ハ軍門ニ来テ、先鋒ヲ乞謝

罪明シ、兩南部モ降伏、津輕モ同断、追々実意ト申事

ニ候処、最早岩城平ヨリ三春・二本松等ノ藩々右降伏

ノ六候ヨリ先鋒ニテ討平ケ、又ハ降伏之段京師ヨリ申

来、最早莊内辺モ同様御座候ハン、

一 北越新潟表柴田侯(新発田カ)、此内ヨリ帰順之噂御座候処、先達

テ彼方重役之者、越後柏崎へ差越歎願之趣、領内へ官

軍御差留被下候ハ、則先鋒相勤度因論之次第、御総

督府へ申出、依テ御城下三小隊、外城四番隊、三番・

二番遊撃、長州四小隊并加州・越前五小隊位、七月十

七日右柏崎ヨリ砲艦四艘ニ乗込、新潟表柴田領津口へ

廻船、此港ハ船着モ宜敷、賊討ニハ新潟ヨリ別テ極

要之地ト申事、右之通諸方之口々官軍包卷候付、不日

御全勝之吉報早々可奉飛告候、

一 追々大兵御繰出相成候へ共、何レ御国兵ナラテハ、十分之働出来不申、又出軍之催促トシテ、右三名被差立

候、尤久我卿肥前等へノ兵二百計御引卒今日御出船、当港ヨリ越後之様御廻船相成候付、又三士モ其船江馬關迄便船、夫ヨリ陸行之賦候、

一 右出軍人数乗船手当且銃器類求方トシテ、去ル四日小

僕下坂被仰付、兵庫へモ引合、夫々關係之方周旋相成

候得共、当分兩港共入着船相少、其上朝廷之御用モ不

少、甚心配之処、乍漸今日兵庫入津之英船手当出来ソ

ウナ向成立、折角右決定之通伺相待居候事ニ御座候、

借入相調候ハ、田代宗次郎乘与御地之様早々廻船之

賦、若不相調節ハ、田代長崎へ相廻リ、手当之限り周

旋之賦ニ御座候、

一 右出兵ニ付テハ、其御地繰出ニ付、御手当銀不差支様、

船借入代共金二万兩爰元ニテ手当相成、田代護送之筈、

尤スナイドルモ又三百九十挺余手当、兵庫ヨリノ船談

判相濟候ハ、右江積込候賦ニ御座候、

一 爰許御蔵合現金ハ、格別過分ニハ無御座候得共、金札

共ニ当分拾五六万兩ハ有之由、夫故諸事颯々ト手当出

来、仕合ノ至御座候、

右万々一御見合相成候半モ御座候ハ、多幸ト相伺、  
旁急々奉呈乱毫候、敬白、

八月八日

上村休助

田畑平之丞様

外略ス

六八三 海舟日記抄

八月

四日

六八二 徳川亀之助へ御沙汰書

明治元年八月五日

御沙汰書

徳川亀之助

(家達)

今般駿河へ引移候ニ付、淺草御蔵ニ囲有之候銅・鉄御

下渡願出候得共、不得其理候ニ付、

御聞濟無之、依之格別御仁恕之 思召ヲ以テ、別紙之

通被下置候事、

八月

別紙

今般駿河へ引移候ニ付、格別之 思召ヲ以テ

米 三万俵

金 一万両

右下賜候事、

八月

四日

内田恒次郎聞ク、日本橋へ徳川家家来御扶助之儀、精々申立候ニ付、其御思召之所、何分因循埒明カズ、ユヘニ西城へ自身相願出候者ハ、御扶助被成下、徳川家申立ハ御採用無之旨、御書付出ルト云、

榎本へ、輕拳不可有之、已後進退如何哉、伺ノ上尽力スヘキ旨申遣ス、

五日

中條金之助、小普請並輕キ者等、暴動可有之勢ナリト云、鎮撫之事精々頼遣ス、

六日

白戸石介同道出殿、御船之事、不動ニテ駿府へ行ク者御印鑑等掛り取扱之事、閉門慎被仰出居候永井・室賀・大久保其他之御所置、当人或ハ親類へ御跡之所御告置之事、過激之者御所置之事、其他小事申立大抵相濟、

七日

榎本ヨリ四日之返書到来、文面穩ニテ、更ニ世上風聞



逃走等之意アラス、

八日

肥後ノ國友式右衛門、奥州へ再ヒ出勢ヲ送クルト云、聞ク、三春ハ降参、本領安堵、寛典ニ出ツ、肥後ハ專ラ鎮撫ノ趣意ナレトモ、三條殿辺ニテハ更ニ此意不通、当節ハ少寛ニ馳セリ、我軍艦ノ鎮撫方、何分尽力スヘキ旨云々ヲ申ス、且長谷川住江・甚兵衛等へ従是逢テ委細ヲ述、面会セシムト云、小拙申テ云、嗚呼奥羽、朝命ニ反シテ一戦、其利ナク、寛典ニ所セムトイフモノハ、誠ニ痛哭之至也、我カ寡 君早ク 皇國之瓦解、万民之塗炭ヲ憂ヘテ、城邑數百年之有ヲ献シ、循々トシテ其誤ヲ悔ユル者ハ、独リ我家ノ為ナラス、実ニ

皇威之赫々ヲ隱ニ遵奉スレハナリ、然ルヲ高察アラレス、今日頻ニ討幕ヲ云フ者ハ何ノ心ゾヤ、我輩微力愚昧トイヘトモ、今果シテ何之申所アラム云々、

九日

龜之介様五ツ時御発途、

福田繁蔵来ル、山岡鐵太郎、鎮將府ニテ吉村長兵衛、千代田形逃走之聞ヘアリ、精々尽力可然旨内話アリシ

ト云、依之再三榎本へ一封差出ス、

一頃ハ官軍兵中、予ヲ暗殺セントノ風聞紛々トシテ、耳ニ入ルモノ再三、是軍艦逃走其他皆予カ区画ニ出ルノ疑念ヨリ生スト、八月念八日又密告ヲ得タリ、其筋ヲ以テ是ヲ聞キ、其疑ヲ解センコト難シトセス、然レトモ熟考スルニ、人々心裡ニ一物ヲ抱キテ、直情真率ナルヲ疑ヒ、正大公明ヲ厭フカコトシ、予カ心裏一点恥ル所無キニ、暗殺残害ヲ恐レテ告ルニ瑣事ヲ以テシ、唯一死ヲ遁レンニ急ナルハ、丈夫ノ恥ル所シカス、運ヲ天ニ任せ、従容誤殺ヲ受ケンニハ、嗚呼古今ノ習風狡兎尽キテ獵狗煮ラル、亦何ソ恐レヲ懷カンヤ、

辰八月念八

海舟

六八四 大久保利通日記

八月

十日

一五時ヨリ金座へ 條公御見分ニ付出席、今日京師ヨリ飛脚着、木戸ヨリ一封達ス、

六八五 一橋大納言・田安中納言へ御沙汰書

明治元年八月十二日

御沙汰書

一橋大納言

田安中納言

先般藩屏之列ニ被 召加候上ハ、兵隊・戰士等祿高相応之備不可欠事ニ候、然処是迄之形ニテハ、兵士不足ニテ、万一御奉公之道ニ可差支被 思召候、依テ宗家龜之助家来之儀ハ、由緒モ別段之儀ニ付、扶助行届難ク、或ハ暇差遣候者勝手ニ召抱候様被 仰付候間、非常之節藩屏之任ニ不背様、篤ト可相心得旨被 仰出候事、但召抱候者ハ、出所・名前・年齢等夫々相記、時々 鎮将府へ可届出候事、

八月

六八六 松園ヨリ楠荘へ書翰

松園贈楠荘書

卷封

愈御清栄珍重不少奉南山候、然ハ当方依然御休神可被下候、楮二郎君事モ府城御発之後、途中洪水ニテ漸ニ十四日晝方、小家へ無事着ニ相成、早々黄葉園へモ申遣候、来会御状并二郎君御説話ニテ委細承リ、先以積年報国ノ心緒貫徹、格外ノ御推任欣拵之至、幸甚此事ニ奉存候、当方黄葉園ニテモ是迄尽力之功労相顯、先達ハ高・四御両卿ヨリ御感状ヲ賜、其後宮様御下向相成候テハ、御当着直様御呼出シ、御目見被 仰付、御直ニ御懇ノ御意ヲ蒙リ、其下侍座西園寺殿・壬生殿御両卿ヨリモ同断ノ仕合、同志之面目此事ニ奉存候、将亦当園之事ハ、二郎君着後廿四日一日ハ小家ニ滞留、夫々御尋問、廿五日吉井在陣長岡へ向被参候処、廿四日夜賊徒長岡へ不意襲撃、官軍敗走、一先妙見并關カ原ノ両所へ退軍ノ処へ被参候処、彼是紛擾不可言次第ニ付、空敷小家へ廿六日帰宅、夫ヨリ官軍モリ返シ、大勝利ト相成、此頃ニテハ当園中敵一人モ無之次第ニテ、上下一同悦此事ニ御座候、長々ノ对阵ニテ、長岡辺ヨリ出雲崎迄、東西十里余ノ間四方軍役ニ被驅使、加之賊徒ノ屯陣ニ相成居候村々ハ、掠奪不可言次第、夫以其辺正義ノモノハ、所々潜伏所在ヲ不弁、帯・折

ノ両生モ同断ノ次第二テ、案シ居候処、一時ハ小古瀬野ハ罷越承リ候処、潜伏所ヨリ沙汰モ有之、迎ヒノモノ遣候共、先無事之趣ニ付、御安心被下度候、二郎君ハ五日小家出立ニテ此度ハ直ニ御村方ヘサシ向被参申候、何レモ両三日中ニハ、小家迄一左右報知ナカラ被参候積、御老母ノ事モ、自然御在所辺紛乱中ナラハ、小家ヘナリヘ御厄介申上候積、取極ナリ、万事当園ノ事情モ篤ト取糺シ、黄葉園ニテハ、当時民政局御用掛当園取締ヲ被命之事ニ候処、出府モ六ヶ敷候半ニ付、小生出府近々中拜顔可申上ト奉存候、戦地ノ模様等ハ、青木彦九郎様ヨリ委細御聞取被下度、

宮様モ近々三條ヨリ新舟ヘ御進軍之積、吉井ニテハ此節加茂町出陣在營ノ由ナリ、新發田侯世子モ五七日前船ニテ当着参營イタサレ、当所ニ在陣ニ御座候、上下四十六人程、新發田ハ家中ノモノヨリ領分ノ人民奮励ノ趣ナリ、村松ハ奸大夫ナルモノ、會ヘ脱走之由、正義家七八十名計官軍ニ属シ候由也、

○当方桑藩謹慎家栗本・有馬始メ家内共、先月十八日船ニテ敦賀ヘ被送、夫ヨリ陸行ニテ桑行ニ相成申候、其節病氣ノ者、婦女子或ハ老人共五六十人計残り被居候

得共、何ツレモ追々桑行ノ事ニ決シ候事ニ御座候、  
○二又、小古瀬・片桐中ノ辺ハ、幸ニシテ無事之趣ニ承リ申候、何事モ万事近日小生出府之上、面上可申上、此節ノ形勢ハ委細青木君ヨリ御聞取被下度奉願候、栗州兄・之立君・濱村君ヘモ別書差上可申筈ニ候得共、種々大混雜中不能其儀、可然御致声奉希候、草々、

八月九日夜認

松園

拜白

楠莊先生

侍史

御老母様ノ事ハ、如何テモ周旋可仕候間、此段御安慮被下度候事、

六八七 参謀達

九月廿八日

先鋒 長州不残  
中鋒 薩州不残  
館林不残 筑前同  
因州同 筑後同

後軍 薩州大砲隊 館林同 因州同

大洲不殘

右明廿九日御進軍、七字大手前江整列、八字發軍、岩

沼楯泊陣、

右之通 御達有之候事、

九月廿八日

參謀

六八八 佐土原藩届書写

七月十三日、今晚第二字頃、備前兵隊・弊藩兵隊共ニ湯長谷ヨリ平城へ進、両藩ノ合兵ニテ左ノ山手ヨリ攻撃、賊砲台ニ扼守、今朝霧深ク、昼ヨリ雨甚敷、山坂峻岨ノ戦尤苦戦、十字頃城下迄押寄、諸藩ノ兵皆會四圍攻撃、賊能防不能破、薩・備并弊藩ノ兵期必死、堀ヲ越へ、高土居攀登リ、将ニ乱入セントス、此時日已没、不得止引揚、諸兵城下へ会ス、參謀衆ヨリ各藩元之陣へ一応兵ヲ引揚候様、達有之候得共、薩・備・大村・弊藩相越、是迄取詰候ヲ一旦弛メ候テハ、容易ニ落城致間敷、仮令夜ニ入トモ不可止トテ、尽死力攻撃、因藩・柳藩モ之ニ同シ、一斉ニ発砲攻撃、賊兵大ニ阻

ム、砲發間遠ニ相成、初更ノ頃ニ及ヒ城中忽チ火起リ、所々へ転火、賊敗走落城、此戦頗苦戦、手負・討死左ノ通、

戦死

兵隊

牧野田六左衛門

同

兒玉源次郎

同

壹破 榮 藏

夫卒 新 吉

同 嘉 平

深手

兵隊

圖師 恒右衛門

同

細山田 藤 藏

同

高橋軍 右衛門

浅手

明治元年(1868)

兵隊

種子田市郎

同

小手田武十郎

新坂ニテ分捕

乗馬 一疋

大砲 四挺

内施条砲 一挺

ホウト 一挺

臼砲 一挺

大砲平城ニテ分捕 二挺

右之通、奥州出兵之者ヨリ申越候ニ付、此段御届申上(戦死・手負は維新日誌にて補正)

候、以上、

島津淡路守内

八月廿五日

能勢(直隸)二郎左衛門

六八九 越後表戦況京都ヨリ通信

明治元年八月四日

先月廿三日、越後長岡在陣官軍モ、追々ト凡八千計集

陣ニ付、大擧ニテ進撃ノ手筈ニ候処、賊軍此虚ヲ察シ、窃ニ入テ御国并長州彈藥格護ノ本陣ヘ火ヲ掛候処、纒是ハ長州ニ一小隊干城隊相残居所、防戦致シ候内、進撃之御国外城二隊并御城下十三番隊力中原猪介等ノ隊曳返シ候処、最早後ヲ絶キ、マ、レカ実ニ死戦ニ及ヒタル由候得共、終ニ長岡城ヲ被取返、死傷モ相応ニ有之候由、官軍是迄一度モ敗ヲ取候事モ無之ニ、此一挙実ニ残念之至ニ御座候、七番隊モ、台場夫々受持テ攻撃之処、右通之時機故、追々取テ返シ為及接戦由ニ相聞得居候得共、死傷等更ニ不相分内、出立之報知ニテ、雄之介等之勸ニ今相分リ不申候、不日ニ其後ノ事实等可申上越存居申候、右ニ付猶又応援人数催促有之、既ニ御当地并各藩ヨリモ早々出軍有之筈被仰渡候付、不日ニシテ追々棚倉其外ノ守城モ、悉拔城ノ報知有之、又羽州庄内等ヘノ進軍、是ハ大山格之介等攻撃ノ注進モ有之、四方ニ敵ヲ受、賊モ実ニ窮鼠ノ場合ニテ、前条長岡藩モ城ヲ枕ニ致ス格護ニテ、唯城ヲ目差シテ突入イタシ候由、尚追々現事成行ハ近便ヨリ可申上候云々、

右京都ヨリ八月四日仕出之書状、同十三日到來略記、

六九〇 八月五日大村藩届書

本月廿九日未明、薩兵三小隊一同泉ヨリ出兵、富岡村ニ会シ、川ヲ挾ミ相候儀、賊兵橋上、浜手<sup>本マ</sup>へ薩兵、既ニ橋外海浜へ相廻リ、弊藩中央ヨリ暫時激戦之央、徒歩川ヲ渡リ賊ノ不意ニ出候得ハ、薩兵首尾相応シ各進撃ノ処、賊兵足下ヨリ逃出途巡狼狽ニ付、水田一面ヨリ追掛々々打立候得ハ、敗兵眼前相斃、潰裂不支候折、正面山腹埋伏ノ賊兵、山下ヨリノ賊砲ニテ、弊藩大砲へ狙撃候得共、此方ヨリモ不撓大砲ニテ応戦ノ内、薩一小隊・弊藩半隊直ニ押寄候処、於湯長谷モ備前・佐土原戦争相始、砲声如雷相聞、賊兵退散無迹、其折浜ニハ薩兵一同弊藩残賊驅逐ノ央、賊ノ蒸氣船往復砲発候得共、陸ノ賊兵遁逃ニ付、小名沖へ出船致シ候、依テ賊兵追撃中ノ作ニテ、賊ヨリ二三発打候得共、遁逃形迹無之候、折柄繫船へ発砲ノ処、賊徒相隠居、裸体海ニ投シ遁逃、船中ニテ一人打留候、其後土人申出ニ、大波ニテ打上候死体三人余、此日銃砲ニテ賊ノ死傷百人計有之候、此段奉申上候、

六月

浅手殿

橋口勤七郎

深手

福田豊次郎

本月朔日未明、薩兵三小隊一同、小名濱ヨリ平へ攻撃中、賊兵城外水田中撤兵ニテ待受候ニ付、小以下欠

六九一 會津在陣本藩戦況上申書

去ル十九日、賊地進取之軍議一決、二十日二本松出立、長州・土州・大垣・大村及ヒ弊藩ナリ、其内弊藩・大村等ノ人数三百位ハ、中山越之此方横川ト申所へ、態ト終夜偽勢ヲ張テ賊軍ヲ分タセ、其余ハ玉ノ井村ト申ス所へ、一宿仕候処、近郊ニ賊徒五六百屯集ノ由ニ付、土州等申談人数差向、夕方ニハ不残追払申候、賊ハ旧幕脱走人并二本松人等ノ由ニ御座候、二十一日晝五字ヨリ発軍、石莖ト申ス所ノ前路ヨリ惣勢ヲ三二分チ、右ハ土州・長州人、伊達道ト云ル間道ヨリ進ミ、左ハ薩州・大垣、別ノ間道ヲ經テ賊ノ背後ニ出テントシ、中筋ハ長州・土州等、相進候処、第一ノ砲台ハ長サ二

町余高原ノ下ニ沿テ築立、頻リニ発砲候故、進テ是ヲ乗取、討取少々御座候、第二ノ砲台ハ、夫ヨリ十町位先キ双方ニ構ヘ有之故、歩銃ヲ諸方ニ散布シテ、大砲ヲ要地数ヶ所ニ押出シ攻掛候処、賊徒暫時ハ烈敷防戦候ヘ共、右ヲ廻リシ長州・土州ノ人数モ進來攻掛、正面ヨリハ十余挺ノ大砲ヲ放チテ、散兵諸所ヨリ進撃候故、賊徒終ニ大敗ニテ、二ヶ所ノ砲台ヲ乗取、数十之陣屋江火ヲ放チ焼捨、尚進ンテ第三ノ台場ニ攻掛候処、夫ヨリ十余丁ニシテ、第三ノ台場ハボナリ峠ノ絶頂ナリ、横ニ町位関門ニツ、左右竹虎落結テ有之候得共、攻込ニ至テ賊徒一人モ無之逃亡ス、大砲五挺其外彈薬兵糧分捕ス、然ルニ日モ既ニ暮レニ及ヒ候故、其夜列藩ノ諸隊ハ峠ニ野営仕候、左ヲ廻リシ薩州・大垣ノ人数ハ、無人ノ地ヲ数里通行、深山ヨリ賊ノ背後ニ出候処、落行賊ニ行逢、散々ニ打取、二里計ハ追討、在家ヘ一宿、二十二日曉ヨリ大兵進テ猪苗代ニ打入候処、賊徒城ヲ自焼シテ悉ク落失候故、其夜一宿、兵糧少々分捕有之、楮二三小隊ハ尚進ンテ、其夕方迄ニ戸ノ口ノ險橋ヲ乗取ラント攻掛候処、賊徒数百人出迎ヘ防戦、右橋少々毀傷致シ居候ヘ共、無難打破リ押渡リ、打取

不少、二十三日惣勢曉四字ヨリ猪苗代発足、是レヨリ先キ先手ハ、既ニ戸ノ口ヨリ要地ノ山邱ヲ乗取居候故、惣勢共ニ進テ會津ヘ攻込候処、賊徒諸所ニテ防戦候ヘ共、悉ク追散シテ城下ニ乗入候、士小路市中共悉ク落失候、人影更ニ無之故、進ンテ城ニ迫リ候処、爰ニハ賊徒必死ヲ究テ防戦ノ様子故、其夜ハ城下ニ一宿、二十四日城下ヲ一円ニ焼払ヒ、迎陣ヲ取テ賊城ニ攻メ掛リ候手配ニ付、陣所ヲ本ノ市中ヨリ瀧澤町ト申ス辺ニ据ヘ、扱大砲ヲ放チテ攻近キ、其機ニ乗シ、城下士小路不残焼立申候、東南ノ微風モ有之、元来茅屋ノ事故一時ニ焼失仕候、二十五日肥前・尾州・紀州ノ人数勢至堂口ヨリ着陣、中途賊徒悉ク落失候故、無事ニ到着之由也、同日ボナリ峠ヨリ備前勢着陣、夕方賊之火薬庫三ツ焼払、二十六日天寧寺山乗取、賊之火薬庫数ヶ所分捕、爰ヨリ城ヲ十町余之眼下ニ見下シ候故、終日城ヲ致砲撃申候、越後口出張之賊徒散々ニ成テ、五十人欵百人位宛追々帰城ノ様子、乍併城中現兵五六百人モ有之候歎、外ニ鎗隊三四百人有之、衝突スル毎ニ必ス官軍ノ彈丸ニ掛テ被打立候、米澤ヨリ必ス賊徒ニ加勢ヲ出シ候半欵ト相待候ヘ共、今ニ相分リ不申候、

右ハ近日戦闘大概之形勢ニ御座候、尤弊藩戦死・手負等モ不少候へ共、尚細々取調可申上候、以上、

會津在陣

辰八月廿八日

薩州藩

別紙ノ通申来候ニ付、此段申上候、以上、

薩摩少将家来

九月十四日

内田仲之助

### 六九二 武運祈念ノタメ五社祭礼被仰出旨藩達

明治元年八月

一当春以来諸所へ出軍之兵隊奮戦勤勞之次第、追々被聞召上、深キ 思召ヲ以、武運御祈念之タメ、五社祭礼被 仰出、去ル十四日ヨリ十八日迄ニテ御結願相成候条、深キ 思召之程難有可被奉承知候、此旨向々へ可致通達候、

慶應四辰八月

(町田久徳  
内膳)

### 六九三 島津忠義へ早々上京ノ旨達書

明治元年八月十日

薩摩少将

其方儀、海路東行被仰付置候処、今般御用有之ニ付、早々上京候様被仰出候事、

### 六九四 戦死・手負等戦況報告

白川口ニ異国形ノ帆前船一艘アリ、津輕ヲ攻襲セントセシガ、官軍ヨリ奪取レリ、賊兵ハ惣テ庄内ノ方ニ引キ取リタリ、

仙臺ハ殊ノ外弱ク、米澤ハ官軍ニ抗スルノ意ナクト相見得候、右ノ趣共ハ、八月八日長崎ヨリ鹿兒島へ届来レル趣ナリ、確實ノ報知分リ兼、人々憂フル処ナリ、江戸表ノ事実左ノ如シ、徳川慶喜ハ水戸へ引取り致、弥謹慎罷在候由、依テ恭順ノ道相願レ至誠ニ哉、前非悔悟ノ実跡相立候ハ、非常ノ寛典ヲ以江戸へ被召返、追テハ上京モ可被命

叡慮ニ被為在旨共、総督宮ヨリ御沙汰相成候、諸道へ進軍ノ官兵ハ早々引揚、大総督府へ帰陣有之候様、大惣督宮へ御達有之候、



右之趣、東海道大総督府參謀、東山道・北陸道・奥羽官軍隊中へ達セラレタル趣ニ候、

当時江戸其他近国へ潜伏ノ兵數、歩兵凡二千余人、水戸脱走兵凡千五百余人、新撰組凡七百余人、桑名兵七百余人、合テ四千九百余人内外ニテ、此人數會津ト合併シテ、為ス事アラントスルノ形勢ナリ、官軍モ大ニ心痛ニ及居候、

米澤・秋田ノ二藩ハ帰順ノ尽力中ニテ、出兵ハ不致、中ニ秋田ハ両端ヲ持シテ、既ニ會津へ糧米類ヲ内々差送リタル趣旨、油断不相成候、

長州ニハ國中ニ佐幕論蜂起イタシ、長門守殿ニハ鎮撫方トシテ、至急ニ帰國被命候ヨシ、此節柄心底謀リ難ク、兼テ反覆奮ナラサル人氣ノ所故、心ヲ用ヒ候説取々ナリ、

熊本ニモ國中ノ党派分立、長岡一家へ先達テ兵制改革ノ委任アリシヨリ、旧守党不服ニテ混雜ノ由、是ハ薩州ノ挙動ヲ伺ヒ居候ヨシ、果シテ其通ナラン、

白川城攻ノ節、彦根勢ニ小隊ノ兵僅ニ三四人ニ被打破、頗ル難戦ニテ、此方ノ有馬藤太ナル人働アリテ、喰ヒ留タル趣ニ候、同時ニ大垣・土州ノ兵モ同様ニ打破ラ

レ、残兵僅ニテ漸ク引揚タルヨシ、長州兵ハ新手ニテ救心シ、遂ニ城ハ乘リ取タリ、然共即時ニ又守リ返サレタリ、此城ハ白川ト水戸ノ兵守リ居候ヨシ、今ノ形ニテハ賊ノ勢大ニ強ク、官軍モ困却ノ由ニ候、五月朔日白川城進撃ノ節、手負・死人多く、当朝三字比白川駅ヨリ此方ノ五番隊進軍上着、白河駅へ四字十分、四番隊・二番隊旗駅ヨリ進軍、二番隊并臼砲打手御兵具方隊、五字十分ヨリ江戸街道ヨリ進軍、開戦ハ六字ヨリ、二時三十分復城セリ、手負・死人左ノ通り、

- 刀 疵 即 死 田中清右衛門
- 手 負 深 シ 大迫喜右衛門
- 足ニ手負浅シ 伊地知正治
- 御兵具方足輕深シ 中島猶次郎
- 臼砲打手浅シ 土師 孫 一
- 四番隊 浅手 仁禮平兵衛
- 浅手 西之原吉彦
- 四番隊 浅シ 久留休左衛門
- 五番隊 即死 伊地知清八
- 桑畑覺左衛門
- 川上源七郎

有川彦右衛門

郷田正之丞

愛甲嘉右衛門

土師正之進

篠崎覺之丞

右手負深手

河野助五郎

坂元仲蔵

右二人即死

大河平源介

上村彦之進

武元庄五郎

八代次助

伊勢地庄左衛門

右ノ五人深手

二番隊戦死

古後七之丞

山口吉蔵

市來喜十郎

川畑平左衛門

飯牟禮才蔵

時任金左衛門

前川伊八郎

廣瀬尋兵衛

奈良原長左衛門

浅手

浅手

勝部鎌介

桂宗右衛門

右兩人共浅手

三番砲隊手負

小野藤吉

川上萬助

伊東權兵衛

四本十左衛門

有馬彦七

猿渡嘉左衛門

佐土原八郎

有川二平太

町夫ノ熊四郎

右通死七人、手負三十八人ナリ、

八月四日

山崎政治

長州ハ、一小隊ノ内四十三人戦死イタシ、残り僅四五人ニテ頗ル難戦ナリ、残勢大ニ強ク、官軍モ容易ニ進撃致兼候、此後ノ所誠ニ大事ト申事ニ候云々、

右御雇ニテ、北越江相越候蒸気船フキロンク船、乗組居候アテリヤン召仕増太郎申立書略、

六九五 英船フキロンク船頭役山崎政治見聞書

六九六 八月四日晚景副島次郎イロン船ヨリ帰船承候趣大略

一英フキロンク船、七月十九日夜八ツ過比当湊出帆、同

海陸戰略相決、軍艦五艘蒸気船ヲ虫船 昼夜トナク台場之

二十三日出羽秋田之湊江着船之処、繫場悪敷、三里程相隔リ候テ、船川ト申所江場所替、二十四日夜船川出帆、二十五日夕刻、越後新潟在留之外国人江用向且薪水ヲ乞請度、同所着岸之処、同所之儀ハ、二十四日官軍賊軍之戦争相始リ、海陸共官軍ハ薩州・長州・土州・加州筑前其余之軍艦相進ミ、放発有之、中々湊江難乘込、三里程相隔リ船繫リ致シ見聞致居候処、二十六日昼夜之境ナク中々大戦争ニテ、二十九日ニ至リ、官軍勝利、新潟下町奉行所虫船 外所々不残賊軍落去、官軍守護相成

船頭役

事件見聞、二十九日平穩相成候ニ付、薪水乞請ツマ 一庄内ニ異国形風帆船アリテ、津軽ヲ襲ハントセシニ、官軍ヨリ奪取レリ、庄内ハ兵少ク苦メリ、  
一仙臺兵甚弱シ、  
一米澤ハ官軍ニ抗スル氣ナシ、  
一右辰八月十日長崎ヨリ飛脚着、右之趣相知候、

六九七 米五千俵・金二万両ヲ徳川家家臣ニ下賜

ス

一徳川氏ノ領国邦内四方ニ散在シ、其総高凡四百万石、

此内蔵入ヲ以テ養フ所ノ旗士数千ニ凡二百万ヲ給ス謂所

藏米取也、殘二百万石、此他諸税金凡百万兩計、其領地半ハ

関西ニ在リ、若シ一朝戦争ニ及ハ、此分敵ノ有トナ

ラン、関東・奥羽ニ在ル者、関西ノ如ク豊ナラス、此

区々タル関東ヲ守テ何ヲカ成サン、決極土地ヲ割キテ

抵当トシ、西洋人ニ借ラサルヲ得ス其抵当トシテ書スヘキ

シ誤テ此事ニ及ハ、如何ソヤ、同胞憤争シテ、他人ノ

為ニ邦地ヲ失フ、豈恐レサルヘケン哉、予不肖トイヘ

トモ日夜是ヲヲモヒ、戦ノ勝ヘキアレトモ、慎テ為サ

ス、利ノ取ルヘキヲ知レトモ、敢テ為サス、数万ノ士

輩ヲ饑餓セシメ、勇氣ヲ挫折シ、難ヲ解キ紛ヲ釈ク、

其才ノ拙ト慮ノ劣ヲ不顧、百難ヲ負担シ、終ニ今日ニ

及フ、孰人カ能ク此胸裏ヲ察セン哉、マタ外人ノ知ル

ヲ求メサルナリ、嗚呼如此倒レテ止ム、何ソ此間ニ於

テ疑ヲ存セム、  
一官軍東下、我徳川氏ノ領国皆收納ス、無禄ニシテ士ヲ

養フ、殆ト将ニ一年ナラントス、此際何ヲ以テ数万ノ

人口ニ給セン、且官兵我カ倉廩ノ空虚ナルヲ察セス、

貯蔵ノ多カランヲ疑ヒ、我カ説ヲ不容、就中駿河へ士

族ヲ移転セシムル日数幾許ヲ以テ、可処置ノ令ヲ伝フ、

無情ノ甚敷爰ニ到レルヤ、我金庫固ヨリ一空金アゴント

ウ唯一ツアルノミ、五月コレヲ出シ、食禄百俵以下ノ

輩ノ給料ニ充テシム、其他金座粃藏金・諸役所ノ貯金

幾許アリトイヘトモ、コレ政府ノ用漫ニ私用スヘカラ

ス、淺草米蔵ニ米一万五六千石アリ、窃ニコレヲ以テ

駿河移転ノ用ニ供セントス、大久保市蔵氏ニ説テ、コ

レヲ渡シ給ハランヲ請フ、此時官兵ノ會計長谷川仁右

衛門予ヲ訪ラヒテイフ、官軍モマタ用金・米穀欠ク、

故ニ此蔵米ヲ以テ一時使用ニ充ツト、其内部ノ欠乏甚

シキヲ密談ス、終ニ米五千俵・金二万両御下附ノ議ニ

決ス、

(戊辰八月)

六九八 田安藩等届書

明治元年八月

慶喜儀、去月二十一日銚子浦ヨリ乗船、海路無滞、廿三日夕駿府寶臺院へ着仕候旨申越候、依之此段御届申上候、以上、

八月

(徳川慶應)  
田安中納言  
(寄民、前津山藩主)  
松平確堂

六九九 駿河以東十三ヶ国ノ社寺ハソノ府藩県ニ

属サセ、難事件ハ鎮将府へ申出サス

(七月二十日)

一 今般東京ニ於テ、当分鎮将府被立置、駿河以東拾三ヶ

国相殿：甲・豆、上下野・奥羽可為支配被仰出候間、此段

相達候、

一 駿河以東十三ヶ国社寺之儀、所部之府藩県ニテ支配可

致候処、其難決事件ハ府藩県ヨリ鎮将府江可申出候様、

今度改テ被仰出候事、

但

神社之儀兼テ御布令之通、

勅祭神社之向等ハ、直ニ神祇官支配可請候、且ハ

寺院之向官位并参内願等、

朝廷ニ關係候事ハ執奏江可申出、若執奏無之分ハ、

直ニ鎮将府江可願出候事、

七〇〇 海舟日記

八月廿日

開陽ヨリ一封到来、昨夜御船悉ク大去、其行ク処ヲ知ラス、趣意書即刻中老衆へ為持差出ス、嗚呼士官輩我カ令ヲ不用、

廿一日

増田貞右衛門来訪、明後日否文通承リ之為可遣約束イタシ、但軍艦脱走可致事ハ、過日已来精々心附、説諭等イタシ、且長谷川氏へ差止方愚存モ申延置候処、不任心底、愚考ニハ多分差止リ可申見込モ有リトイヘトモ、恐ラク不用意之所ヨリ激説セシヤ、甚疑敷モノアリ、此後之説諭等、愚存御採用モ被下ル、ニ於テハ、容易ク引戻行届ヘク欵、右等左京亮殿へ可然被仰上被下度ト云々、

廿四日

京師ニテ紀ノ水野大炊并越前家、其外中川親王ヲ奉シ、薩・長二家ヲ追ハムトスルノ企アリ、発覚、親王家ハ

一名ヲ下シ給ハリ、藝州へ御預ケ、越春嶽ハ岩倉殿嚴敷御譴責有之、辛クシテ滯京御免ト成ル、其他未タ確証ヲ不得ト云、嗚呼人々各小私アリ、其極國家ノ大体ヲ忘ル、ニ似タリ、彼此之論、彼我ノ別アルハ其識不足ナリ、正大之説不被行ハ天ナリ、何ノ如斯ノ策ヲ施ス哉、

梅田國來訪、聞ク、仙臺藩太田盛・米藩宮島誠一郎輩先日京師ヨリ歸來リ、窃説ク、二條家・廣橋家其他ニモ、當時之公ヲ廢セムト云者アリト、是等ヲ以考レハ、我軍艦之士等小節小細工之輩ニ鼓動セラレ、忽チ輕拳ニ及ヒシ欤、不可知、永井主水之乗組タル、尤以テ可怪也、

廿七日

或人開陽艦脱走之趣意ニ付、頗ル確証有ルノ書ヲ送ル、略ニ云、熊藩並米・蘭・佛國之士等、激スル所アリト云々、以是我カ嫌疑ヲ解カム事不難、鎮將府皆我手ニ出ルヲ疑フ欤、示シテ以テ是ヲ解クニ、何ソ難キ事カアラム、然レトモ烈藩内破シテ其國議一定セス、隱顯皆不可言モノアリ、ユヘニ其各國猜忌シテ、一難ヲ他ニ讓ラムト欲スル者、天下皆是ナリ、我タトヘ嫌疑

之為ニ其死ヲ遁レストイヘトモ、如斯之瑣事ヲ以テ、一身ヲ清ク成サントセツ哉、命數ハ天ナリ、人ノ疑ト不疑ト、何ソ是ヲ以其行ヲ違ヘム哉、

### 七〇一 忍藩届書写

六月廿四日三字白川表ヲ發シ、二手ニ分レ薩・長・大垣・弊藩本道ヨリ進軍、關山麓郷戸村ニ於テ賊兵砲壘ヲ設、凡百人許備衛、關山山上ヨリ大砲打放防戦候ニ付、砲撃ニ及候処、暫時ニ逃走、賊兵死骸揚取候間モ無之哉、七八人斃死ノ俣ニ有之、夫ヨリ直ニ本道進軍、金山宿前ヨリ三手ニ分レ、本左右道薩・長・土・大垣・弊藩・黒羽合兵ニテ進撃ノ処、金山宿砲壘ヨリ賊兵大砲打掛候ニ付、砲撃ニ及暫時ニ討払、金山宿乘取候、賊兵多分ハ仙臺・相馬・棚倉ノ兵ニテ、凡五六百人程欤、猶深ク進撃、薩・大垣・黒羽等藩々ハ間道ヨリ進ミ、長・土・弊藩ハ本道ヨリ進ミ、棚倉城手前松原ニ賊兵砲壘ヲ築キ、左右ニ伏兵ヲ置防戦候得共、是亦速ニ追払、棚倉城下口ヨリ乘入、関門前ヨリ大砲打掛候処、守禦ノ術尽果候哉、賊兵棚倉城内外ヲ放火シ、十

明治元年(1868)

字頃水戸・會津ノ兩道ヲ差シテ致敗走候旨、於出張先  
御届申上候趣申越候間、此段御届申上候、以上、

〔松平忠雄〕  
忍少将内

八月五日

佐藤江場之介

〔稿本表紙〕

明治元年  
九月 忠義公史料 一〇

〔稿本にて補正〕

七〇二 銚子港漂着ノ徳川家ノ脱艦美賀保丸ヲ処

置セシメ、脱走者ヲ捕へ謹慎セシム

九月朔日、徳川家ノ脱艦美賀保丸、下総国銚子港ニ漂着ノ報至リ、大総督府此ノ日軍監林友幸長門藩士ヲ遣シテ処置セシメ、更ニ斥候隊並ニ佐倉・志筑等ノ藩兵ヲ差遣シ、土浦藩兵ト共ニ、軍監ノ指揮ヲ受ケシメ、終ニ五拾余人ヲ捕縛シタレトモ、猶脱走セシ者アルニヨリ、隣藩ニ令シテ追捕セシム、後殘賊東京ニ潜伏セシ者アリテ、駿府

ニ謹慎セシム、

〔本文記載なし〕

七〇三 英国公使参内事件ノ償金ノ分配ヲ外国官知事東久世通禧ニ報ス

コノ日、英国公使書ヲ外国官知事東久世通禧ニ贈リ、本年二月晦日、英国公使参朝ノ際、兇徒ニ傷ケラレシ者ニ交附セラレタル扶助料ヲ分配セシヲ報セリ、ソノ文左ノ如シ、

以手紙致啓上候、然ハ拙者儀去三月二十三日我二月晦日参内之途中ニテ、日本人乱妨イタシ候モノ有之、其節ミニストル所附護衛之者疵ヲ受候ニ付、右償金トシテ一万四千弗御贈相成候御手紙致落手候、右償金拙者忝致受納候、恭謝之儀朝廷へ御伝奏被下、拙者恭敬之意、朝廷へ致貫徹候ハ、大慶可存候、右金子左之通致分配候段、乍序貴下へ申上候、

第一 疵ヲ受身体自由ニ相成不申、無余義可致帰国両人之者ハ、五千弗ツ、手当可致積ニテ、一万弗本国ロルドシツプ之手ニテ、右兩人ニ始終善キ手当可致候為



メ、拙者本国之外国事務ニ預リ重立候ヒクレタリヘ相送申候、

第二 右英国ニ送り候所之路用トシテ、兩人四百弗ツ、手当致シ候、

第三 殘金三千二百弗ヲ重疵ヲ受候六人へ五百弗宛、薄疵ヲ受候者ニ八百弗ツ、致配当候、謹言、

千八百六十八年第十月十六日

英吉利国特派公使

兼全權ミニストル

ハल्ली・パークス

外国官准知事

東久世中将

閣下

七〇四 公現親王白石ヲ去リ再ヒ仙臺ニ赴ク

二日、入道公現親王<sup>王</sup>翰王白石ヲ去リテ、再ヒ仙臺ニ赴ク、

ソノ概況左ノ如シ、

<sup>〔宮城島〕</sup>

自証院記ニ云、白石ニ在セラレ御寺務更ニナク、軍事

ニ関スルノ儀ハ毛頭之レナク、邂逅諸藩通行ノ人相ヒ

伺カヒ、奥・羽両国ノ中、配下之寺院参上之外、評スベキノ義務ナク、為スベキノ音信絶テナシ、君臣碌々

四十余日ヲ経、然シナカラ官軍追々諸城ヲ降シ、駒ヶ峰ニ逼レトモ、猶未タ御謝罪ノ機会ヲ得ス、戦々競々

タリ、何レモ身命ヲ忘タレ共、宮御方且ク当国避逃ナサル、御素懷ヲ暢ルニ至ラズ、官軍ノ進到ル、宮ノ御

上ニ冠スル心地セラル、止ヲ得ス、

一、九月朔日、今晚御発途、仙岳院へ御還リ、

一、二日、仙岳院へ御着、各藩使者ニテ相伺ハル、

一、三日、御内仏場ニ於テ、今日ヨリ天下泰平ノ御祈

禱御始行之事、

七〇五 指揮役沖一平新潟付近ニ進撃ノ状況ヲ報

告ス

コノ日、曩時軍艦乾行丸損傷修繕中、軍艦攝津丸ニ移乘

セシ指揮役沖一平<sup>直次</sup>ヨリ、去ル七月二十一日以来新潟

附近ニ進撃セシ状況ヲ報告シタルニヨリ、届出ヲナセリ、

ソノ書左ノ如シ、

届書

軍艦乾行丸之儀、蒸氣鐘之部へ損所有之、修復不致候  
テハ、夜白連続運用不相調候ニ付、其段惣督府へ御届  
申出置候折柄、御艦攝津丸備付大砲損所等有之、放発  
不相成候間、乾行丸大砲并砲手等、攝津艦へ乗付、新  
潟刃進撃候様被相達、私始士官・砲手迄都合三拾四人、  
大砲四門・彈薬共載付、過ル七月廿一日能登七尾出船、  
同廿三日越後柏崎ヨリ長州軍艦丁卯丸外ニ加・筑・藝・  
柳川蒸気商船四艘へ陸軍千人余乗込、一所ニ出船、佐  
渡小木一泊、同廿四日半夜同所出船、翌廿五日曉新潟  
ヲ三里過、新發田領内松ヶ崎浜口錨ヲ下シ、軍艦ハ陸  
兵都テ上陸相濟迄守衛イタシ居、其夜六ツ過、巡視之  
為メ新潟海浜へ転航相偵候処、水涯ノ砂陰ニ一町計ツ  
、相隔、砲墩七ヶ所ヲ設ケ相守候姿ニ被見及申候、其  
夜ハ同海滞船イタシ居候処、陸兵ヨリ新潟進撃ニ付、  
海軍モ応援之儀相達、同廿六日曉八時分陸上遙ニ砲声  
相響、破烈彈之飛行モ相見得候ニ付、放発之準備イタ  
シ居候砌、賊之砲墩ヨリ御艦へ対シ放発候間、則放発  
候得共、闇夜ニテ賊之砲声ヲ目的ニ狙撃候得共、彈到  
不分明ニ付、不數十放止、沖ニ滞船、同廿八日朝五時、  
賊地近ク艦ヲ進候ニ、亦賊ヨリ放発相始候ニ付、互ニ

放撃之央、丁卯丸モ松ヶ崎ヨリ航來、共ニ八時迄砲撃  
候得共、元來前件之如ク疎間之砲台故目的不相定、且  
陸軍モ未逼候テハ、迫モ落去之算無之間止放、七ツ過  
松ヶ崎へ引取碇泊、此期賊之砲彈一個左舷ヨリ右舷へ  
貫洞、為此攝津艦水夫砲手一人戰歿仕候、余彈ハ都テ  
舷上ヲ越シ、海中へ没シ申候、同廿一日朝五時、丁卯  
丸共ニ松ヶ崎出船又々新潟へ転航之処、賊ヨリ始砲ニ  
付、四時ヨリ九時過迄砲撃致シ候得共、今日モ陸逼迫  
不致候ニ付、八半時帰船、陸軍ト未明ニ進逼之期限尙  
牒シ合セ、其夜九時新潟へ転航、曉七時分ヨリ陸兵相  
迫候欵、砲声間近ク相聞候ニ付、直ニ放発、賊ニモ激  
ク放発相防候、廿九日朝四時前、陸手之賊瓦解自ラ火  
ヲ放候テ逃候ニ付、沿海之砲台自然ニ潰乱、彌彦へ向  
ケ敗走イタシ候、猶追撃之上御船ニテ上陸、官軍新  
潟へ繰込、賊一人モ罷居不申、静謐相成居申候ニ付、  
其尽御艦へ引取申候、此段御届申上候、以上、

八月

乾行丸指揮役

沖 直次郎

弊藩軍艦乾行丸、越後海辺滞船之処損所有、砲手並大  
砲等御艦攝津丸へ乗付、新潟刃進撃之次第、別紙之通

彼表ヨリ届申越候間、不取致此段御届申上候、以上、

九月二日

島津少将内

新納嘉藤二

七〇六ノ三

参与被 仰付候事、

九月

行政官

肥前少将

職務進退録  
鍋島直大家記

七〇六 小松清廉外国官副知事兼務ヲ命セラレ鍋

島直大・阿野公誠ハ参与ヲ命セララル

七〇六ノ四

弁官事被免参与被 仰付候事、

九月

行政官

阿野中納言

職務進退録  
阿野公誠履歴書

三日、参与小松清廉外国官副知事兼勤ヲ命セラレ、外国  
官副知事鍋島直大並ニ弁事阿野公誠ハ各本官ヲ免シ、参  
与ヲ命セララル、ソノ辞令左ノ如シ、  
七〇六ノ一

小松帯刀

当官ヲ以テ外国官副知事被 仰付候事、

九月

行政官

職務進退録  
小松清廉履歴書

七〇七 兵庫県知事伊藤博文米国領事ニ書ヲ贈リ

米国水夫乱暴ノ罪ヲ糺サシム

七〇六ノ二

肥前少将

外国官副知事被 免候事、

九月

行政官

職務進退録  
鍋島直大家記

糺サシム、

一筆致啓達候、然ハ昨日拙者召捕、及御引渡置候貴国

商船水夫宍人、昨日午後八ツ時過、神戸町端之遊女屋

コノ日、米国商船キング水夫ハールマスコ酔酩シテ、兵  
庫港衛士青木猛阿波ヲ傷ツケ、且ツ兵庫県解舍ニ闖入ス、  
知事伊藤博文之ヲ捕ヘテ書ヲ米国領事ニ贈リ、其ノ罪ヲ

近辺ニテ、大酔之余種々乱暴相働候ニ付、其場所ニ居合候日本人立寄捕押可申ト相企、追驅候折柄、当所警衛之士官老人用事有之、通路致候、右水夫行違ニ小刀ヲ以、背之中央ニ突刺、其刀ヲ携候俣逃去候ニ付、右士官ハ愕然之余リ、医師へ罷越療治相頼候処、疵痛強、今ニ難渋候趣訴出申候、然ル処右水夫ハ其場ヲ逃去、

当節普請中ニ有之役所之地所へ立入、普請掛之役人ニ対シ、無法ノ処置致候而已ナラス、職人共之所業ヲ妨候折柄、拙者罷越、其所持イタシ候棒ヲ取揚候処、小刀ヲ持手向ヒ候ニ付召捕、貴館へ差送申候次第ニ御座候、右ハ士官ニ無故重キ手疵ヲ為負候段、不法無礼之次第、当人ハ嚴罰ニ被処、尚十分成御所置有之度、為其及御掛合候、以上、

九月四日

伊藤五位

米岡岡士宛

外務省記

七〇七  
今八半時頃、徴兵之内青木猛ト申者、兩人連ニテ宇治川近辺歩行仕候処、外国人老人、福原廓ニテ何致致乱暴候儀哉、門外へ驅出、跡ヨリ多人数追驅候節、無何

分分ハ蓋、近傍ニ猶予仕居候処、不慮ニ後ヨリ劍ニテ背中ヲ疵口二寸計リ被突、直様逃去候ニ付、無抛陣所へ罷帰、有姿申出候ニ付、不取敢書取ヲ以御届仕候、以上、

慶應四年辰九月三日

六田卯之助

徴兵仮隊長

外国事務御役所

外務省記

七〇八 薩藩監軍關山峠戦争状況届出書

コノ日、會津領關山峠ニ於ケル戦争ノ状況ヲ、ソノ参加隊ノ本藩監軍ヨリ、鎮將府ニ届出テタリ、ソノ届書左ノ如シ、

薩州藩届書

藤原口へ出陣仕候弊藩一小隊、当月二日未明ヨリ會津若松へ六里余有之大内村繰出シ、同所ヨリ二里余ノ場所關山ト申要地江、賊兵本道ヲ中ニ置、左右ノ山岳へ伏居候間、弊藩並宇都宮・黒羽・館林ノ人数、山岳本道江分配致シ、弊藩先鋒トナリ、九ツ過ヨリ烈敷及戦

争候内、隊長山田司儀モ討死仕、其外死傷左之通御座候得共、尚夜半時分迄奮戦仕、其内手詰ノ戦モ有之、賊之首級六七打取、其外打捨等モ多分御座候得共、深山ノ際ニテ其数不相分申候、同夜々中番兵致シ、只今ヨリ直ニ若松城下ニ進撃ノ筈御座候、此段不取敢御届申上候、以上、

戦死 山田 司 浅手 柏原治左衛門

浅手 柚木正次郎 深手 伊藤正助

浅手 福永十郎 深手 福永十次

浅手 松田源之丞 深手 福永矢七郎

深手 丸野仲次 同 日高喜次郎

浅手 壹岐正之進 浅手 牧 與左衛門

深手 松田宗次郎 以上、

九月三日 薩州監軍

上原善藏

國分藤之丞

七〇九 公卿・諸侯・徴士等家族ト共ニ任地へ赴クヲ許ス

四日、公卿・諸侯及ヒ徴士等ノ家族ヲ携ヘテ、任所ニ赴クヲ許ス、其ノ達書左ノ如シ、

公卿・諸侯並徴士等、在職之地へ家族召寄候儀、可為勝手旨被 仰出候事、

九月

行政官

官中日記  
弁事局叢書

七一〇 越後口総督嘉彰親王上杉齊憲ノ降伏ヲ許

シソノ子茂憲ヲ賊徒追討先鋒ニ命ス

コノ日、越後口総督嘉彰親王、寛典ノ処置ヲ以テ、上杉齊憲ノ降伏ヲ請ヒシヲ許シ、実効ヲ立テテ罪ヲ償ハシム、尋テソノ子茂憲式部新發田ナル督府ニ赴キ、征討先鋒ヲ請フ、之ヲ許ス、ソノ関係書概要左ノ如シ、  
七〇一 齊憲謝罪書

臣齊憲 恐惶頓首泣血奉歎願候、今般會津御征討之砌、名分順逆ヲ誤リ、於出先家来共抗官軍、奉惱 宸襟候段恐懼至極、臣子ノ分不相立先非悔悟、今更何共可奉申上様モ無御座候次第、臣乍不肖モ素ヨリ奉抗 朝廷候存意ハ毛頭無御座候得共、全ク遠境隔絶ノ僻土ニ罷

在、春來天下之事情形勢モ一々承知不仕、多恐モ厚キ  
叡慮ノ旨モ具ニ不奉伺、遂ニ右様ノ事件ニ立至リ、畢  
竟臣兼テ指揮不行届ヨリ所致ニテ、如何ニモ重々奉恐  
入候次第ニ付、此上ハ本城ニ罷在候モ甚奉恐入候間、  
速ニ城外へ退去謹慎恭順罷在、即チ出張ノ隊長參謀之  
臣ハ嚴敷謹慎申付、奉仰 朝裁、拳鬪藩誓天地勤 王ノ  
外他志無御座候、就テハ同盟ノ列藩へモ早速降伏謝罪  
為仕候様、説得尽力仕罷在候間、悔悟謝罪之藩々一同、  
御寬典ノ御処置被成下候様、冒万死偏ニ奉歎願候、誠  
惶誠恐謹言、

九月

藤原齊憲

北征日記  
上杉茂憲家記

七二〇/一  
督府達書

討伐被 仰出候 御沙汰書、未夕拜承不仕由申出候ニ  
付、別紙一通差遣候、總督官既ニ 御奉命之上ハ、何  
因迄モ御進撃可被為遊候思召ニ候得共、此度謝罪申立  
候情実被 聞食、委細可被及 御奏聞候間、国元へ引  
取、屹度実効相立可申候事、

九月四日

七二〇/二  
茂憲歎願書

臣茂憲泣血再拜、大總督府御執事マテ申上候、春來  
形勢事情不通ヨリ抗 官軍、今更何共可申上様無御座  
候段、先達テ父齊憲以家來重奉歎願候節、佐竹中將ヲ  
以テ父齊憲へ被仰渡候御罰文之趣、奉拜読、如何ニモ  
如 嚴命會津容保御征伐ニ付テハ、重キ御沙汰モ奉蒙  
ナカラ、遂ニ今日之形勢ニ立至リ、乱臣賊子之刑典難  
逃、今更措身之地モ無御座、唯 朝廷寬典之御処置ヲ  
仰キ奉リ候処、恐多クモ先達テ歎願之次第ハ、一先ツ  
御聞届被成下、猶此上勤 王之実効相立可申旨蒙 御  
沙汰、寬仁之 御趣意何共可奉申上様モ無御座、奉感  
佩候、此上ハ是非ニ鞠躬尽瘁、勤 王之実効ヲ奉表度  
至願ニ御座候処、差当リ降伏謝罪不仕藩御座候ニ付、  
右御先鋒等被 仰付候ハ、上下一同死力ヲ尽シ奮戰  
仕リ、奉報 鴻恩万分之一度奉存候、何卒御聞届ニ相  
成、此上寬仁之 御沙汰被 仰付於被下置ハ、冥加之  
至難有奉存候、此旨宜御執達之程、不顧多恐奉歎願候、  
誠惶誠恐頓首、

北征日記  
東伏見宮家記

九月(八日)

藤原茂憲

北征日誌  
上杉茂憲家記

七二〇/四

十一日達書

上杉齊憲父子悔悟謝罪之儀申出、城下へ謹慎 天裁ヲ奉待候段ハ、早速 御奏聞被成置候処、今般式部儀、当表へ罷出、賊徒追討之先鋒相勤、謝罪之美効相顯度旨、歎願之趣御聞届被成候間、迅速出兵御指揮ニ随ヒ賊徒追討可致旨 御沙汰候事、

九月

但賊徒ト雖、兼テ寛大之御趣意ニ有之候事故、致帰降候者ハ敢テ不殺、相応ニ扱ヒ置可申、 御奏聞之上何分之御沙汰可有之候事、

北征日誌  
上杉茂憲家記

七二一 徳川藩脱艦下田港へ漂着ニ付、藩船豊瑞丸ヲ同港へ廻航スヘキヲ命セラル

コノ日、大総督府ヨリ、藩船豊瑞丸ニ徳川藩脱艦ノ下田

港ニ漂着シタルヲ取調ノ為メ、肥前ノ兵隊出張ニ付、塔乗セシメ、同港へ廻船スヘキヲ命セラル、其ノ達書左ノ如シ、

豊瑞丸

徳川藩脱艦下田港へ漂着、右為取調肥前兵隊乗込、急速同港へ廻船可有之旨 御沙汰之事、

九月

東征総督記  
鎮將府日誌

七二二 小松帯刀玄蕃頭ニ任セラル

コノ日、小松清廉玄蕃頭ニ任セラル、ソノ宣旨左ノ如シ、

小松帯刀

任玄蕃頭

右

宣下候事、

九月四日

七二三 東幸ノ期近キニ付宮門及ヒ諸関門警衛規則等ヲ定ム

則等ヲ定ム

五日、東幸ノ期近キニアルヲ以テ、宮門及ヒ諸関門警衛規則ヲ定メ、九門七口等ノ警守ヲ嚴ニシ、九門内ヲ巡邏セシメ、市中ハ巡邏ヲ罷メテ守兵ヲ置キ、以テ緩急ニ備ヘシム、ソノ警衛規則左ノ如シ、

七三ノ一 諸御門並諸関門警衛之規則

一 宮門御警衛兵員一小隊、尤一昼夜半隊ツ、常詰之事、

但昼夜二人宛、二夕時替ニシテ回番之事、

一 九門並七口関門警衛兵員二小队、尤一昼夜一小隊宛常詰之事、

但一昼夜ヲ四分ニシテ、一分隊ツ、回番之事、

一 七口之外、間道之関門警衛兵員一小隊之事、

但詰番之儀ハ、宮門之規則同様可相心得候事、

一 諸御門・諸関門之内、警衛之藩々ハ、固メ人数外異変

之節ハ、相忒之援兵繰出相成候様、用意可致置事、

右之通、今般諸御門其外警衛之規則被為立候間、心得

違無之様可致旨申達候事、

九月(五日)

軍務官

官中日記  
田沼意齊家記

徴兵中

今般 御東幸被為遊候付テハ、御留守中九門内取締別テ至重ノ事ニ付、警衛向昼夜共一入嚴重可取計旨申付候事、

九月

官中日記

七二四 兵庫県知事伊藤博文書ヲ大坂府知事後藤元曄ニ贈リテ、土佐ヨリ佛国ニ払渡スヘキ堺事件償金ノ事、並ニ外國蒸氣船傭雇ノ件ヲ議ス、ソノ文左ノ如シ、

大坂

兵庫

後藤象次郎様

伊藤俊介

至急

尚々佛へ相払候金、自然当地ニテ相渡候テモ不苦事

ニ御座候(得九)一ハ、中島作太郎・土肥真一郎明日ノ便船

ヲ以横濱行仕候ニ付、兩人ニ相托差送候テモ不苦哉

ニ奉存候、此辺御含御確答可被成下候、以上、

以飛書得貴意候、然ハ佛公使ヨリ此度堺一条償金為請



取、軍艦差越申候趣、右船将ニモ御面談、逐一御承知被成候御事ト拝察仕候、今日五日ハ則彼ノ十月廿日ニ相当、右金御払渡約定日限ト奉存候、然ニ此度御渡方相成不申儀ハ、如何ノ御差障ニ御座候哉、奉伺度奉存候、佛公使ヨリ大坂在留ノコンシユルヘ、右日限中金子不払渡時ハ、大坂ヲ引払横濱表ヘ引取候様下命致候由、窃ニ承リ懸念罷在候ニ付、態々申上候、自然於大坂五万ドルノ金出来不申時ハ、過日小松氏ヨリ預置候十万ドルノ中ヲ以、相渡置候テモ可然事乎ト奉存候ニ付、乍職外ノ事邦家ノ重大事ニ係候儀ニ付、申上候間、明日昼十二字コスタリカ出帆前御報被下候ヘハ、佛へ払渡候手都合ニ可仕、尤右金子払渡候テモ差支無御座候哉、是亦篤ト御取糺、巨細御紙面ヲ以御指揮奉待入候、

一今日小松氏ヨリ老台ヘノ御書簡、五代ヨリ差越、相州出兵ニ付、蒸氣雇入候様トノ御沙汰ニ御座候処、十分ナル船居合不申候ニ付、コスタリカ船便ヲ以横濱ヘ申遣候ニ、ウヨルクト申船ヲ呼寄候ヘハ、千五百人位ハ乗組出来可申候、羽州迄二万ドル已下ニテ参リ可申候哉ノ趣ニ御座候、是モ屹度御指図被下候ヘハ、直ニ約

定可仕候、御答奉待候、為其態々飛書如此御座候、匆々頓首、

九月五日夜第十字

七二五 崇徳天皇ノ神靈ヲ京都ニ奉遷シ白峯宮ト

号ス

六日、崇徳天皇ノ神靈ヲ、京都今出川飛鳥井町ニ奉遷シ

テ、仍白峯宮ト号ス、ソノ達書左ノ如シ、  
七二五ノ一

八月二十四日達書

今般讚岐国ヨリ

崇徳天皇神靈御遷被

仰出、来月上旬当地今出川通飛鳥井町ヘ着御ニ候事、

但尔来ハ可奉称

白峯宮事、

右ニ付、神社ヘ献備之儀願出度所存候者ハ、品書ヲ以

テ神祇官ヘ可伺出事、

八月

行政官

官中日記  
津和野藩記

七二五ノ二  
三日達書

來六日、崇徳帝神靈白峯宮へ飛鳥井町、御遷還被  
為在候間、為心得相達候事、

九月

行政官

官中日記  
嵯峨実愛家記

(三日達書は復古記にて補正)

七二五ノ三  
祭儀録ニ云、九月四日 御舟抵于浪華、同五日以伏見  
熊本藩邸為 行宮、同六日自伏見至于御香宮拜殿、奉  
還座於 御羽車、神祇判事植松雅言・同権判事愛宕通  
旭等奉仕略下

七二六 大総督府向後脱走屯集ノ輩ハ、悉ク嚴科

ニ処スヘキヲ達ス

コノ日、大総督府向後脱走屯集ノ輩ハ、悉ク嚴科ニ処ス  
ヘキヲ達ス、ソノ達書左ノ如シ、

先般以來徳川旗下、其外諸藩脱籍之徒、官軍ニ抗衡致  
戰爭候者不少候処、伏罪之上ハ被処寛典候、然ル処下  
情兎角悖慢、今以脱走屯集等致シ候段、重々不屈之至

二候、此上ハ

御仁恤之道モ被為絶候ニ付、向後脱走屯集ノ輩於有之  
ハ、士官張本ハ不及申、夫卒ニ至迄総テ可被処嚴科旨  
御沙汰候事、

右之通、今般御治定相成候条、為心得申達置候事、

九月 (六日)

東征總督記  
津和野藩記

東征總督記ニ云、右之通鎮將府弁事へハ諸藩並朝臣之  
者へ触達、東京府判事へハ府内へ触示可申趣ヲ紙面ニ  
テ申遣候事、但府内三ヶ所計高札ニ認可出事、

七二七 勤務時間ノ増加及ヒ兼勤等藩庁達書

コノ日、藩庁ニテハ、目下戰時中出軍ノ為諸役員減少ニ  
付、勤務ノ時間ヲ増加シ、兼勤ヲ為シ、以テ諸事ノ貫徹  
ヲ図ルヘキヲ達セリ、ソノ達書左ノ如シ、

一 奥羽・北越戰爭至急之段ハ、一統承知之通ニテ、追々  
夥敷人数出兵モ被仰付、未鎮定ニ不至候、付テハ当世  
態諸座筆者・小役人等四拾歳以下之面々ハ、都テ陸軍  
所江罷出、稽古方被 仰付筈候得共、先達テ諸役場人

數減少被仰付置候付、局々依緩急此節別勤被仰付候、  
右ニ付テハ、跡御用向之儀ハ殘人數ヲ以、長詰等ニテ  
精々繰合可相勤候、左候テ郡奉行以下之儀ハ、筆者方  
御用ヲモ兼、諸事實徹精々致弁達候様可致候、此旨向  
々江可申渡候、

慶應四年辰九月六日

良馬

七二八 伊勢雅楽願書

コノ日、又藩内岩川・末吉ノ領主伊勢雅楽ヨリ、藩庁ノ  
岩川ニ対スル諸事件、末吉取次ノモノ多ク、為ニ敏速ヲ  
欠キ、或ハ遺漏アルニヨリ、他領同様直接ノ交渉願出デ、  
藩庁之ヲ允許セリ、ソノ願書左ノ如シ、

口上覚

私領分岩川之儀、先祖代ヨリ追々依願御役場何篇私領  
同様被相立被下、別テ難有仕合奉存候、然処諸御用向  
之儀、向々御座方ヨリ右役場江御直当、又ハ末吉江一  
頭ニ被仰渡候モ有之、末吉麓之儀ハ遠路相隔、急速之  
御用運兼候儀トモ多々有之、間ニハ御用向相洩候モ有  
之、旁混雜仕候付、以來不依何辺向々御座方諸御役場

ヨリ御用向外、私領同様領分役場江御直当相成候様、  
被仰付被下度奉願候、此等之趣被仰上可被下候儀奉願  
候、以上、

但向々御座方江御用筋御届向等之儀、私領同様領分  
役場ヨリ直ニ申來候、此段為御見合申上候、

慶應四辰九月六日

伊勢雅楽(具書)

七二九 東海道筋小荷駄奉行肝付郷右衛門、大総

督ヨリノ賜金並ニ東北地方ノ戦況ヲ報ス

七日、横濱滞陣中ノ東海道筋小荷駄奉行肝付郷右衛門、  
書ヲ大坂詰御留守居衆ニ贈リテ、大総督ヨリ本藩ノ戦役  
負傷者並ニ軍務ノ為ニ疾病ニ罹リシ者ニシテ、既ニ帰国  
セシ者ニモ賜金相成ルヘキヲ報シ、尚国許軍賦役ニモ同  
事件並ニ東北地方ノ戦況ヲ報セリ、ソノ文左ノ如シ、  
七二九ノ一  
一金二十両宛

内

十両宛

伊藤権兵衛

武元庄五郎

達山勇之進

一金五兩宛

岩城源次郎

内

高松庄兵衛

二兩二步宛

立山要八郎

六番大砲隊

若松十左衛門

夫卒

有川陽之助

源次郎

伊集院小藤次

十二番隊

種子田左門

夫卒

大迫喜右衛門

袈裟介

中島直次郎

私領二番隊

齊藤藤太

夫卒

右十三人手負、横濱病院ニテ養生イタシ、此節御国許

右同

直八

へ被差下候、

休兵衛

一金十兩宛

内

五兩宛

一金一兩宛

佐竹猪之助

右四人病人ニテ被差下候、

大迫喜右衛門下人

津曲幸右衛門

四郎

津曲清八郎

岩切喜次郎下人

右三人病人ニテ被差下候、

正太郎

益満宗之助下人

善助

右三人病人又ハ手負之人数へ被召付被差下候、尤金一両宛此表ニテ被成下候、

右ハ此節、豊瑞丸帰帆ニ付御国許へ被差下候、先度ヨリ外国船等之便船ニテ被差下候砌之手負人数、其外へモ被成下候金員数モ相重居候へ共、此節ハ御国船ノ儀ニモ有之、コトニ当時別テ御金繰六ヶ敷折柄ニテ、此節ノ儀ハ本行之通被成下候、左候テ此表莫大之御入費別テ御金差支候処ヨリ、二十人丈ハ半金ツ、被成下候様御取計有之度、大久保一蔵ヨリ可申越旨、銘々へ御渡付有之候様被成給度、此段及御問合候、以上、

東海道筋

小荷駄奉行

横濱滞陣

肝付郷右衛門

九月七日

大坂詰

御留守居衆

追テ先度ヨリ御国許之様被差下候人数、万一京・大坂辺へ滞居候儀モ有之候ハ、無残此節便ヨリ被差下

候様御取計有之候様分テ可申越旨、一蔵ヨリ承候事、

七一九一

肝付郷右衛門報知

誰様御在国モ不奉存候得共、弥以御堅勝可被成御座珍重奉存候、次ニ私ニモ無異罷居申候間、乍慮外御休意思召可被下候、別紙ヲ以テ段々御問合申上候得共、猶又御取扱向宜敷様御取計被下度左之通、

一手負・戦死之人数江ハ御国許被差下、且養生中相果又ハ戦死之人数江ハ、御国許ニテ別冊名書ノ通御下渡被成下度、御金之儀モ八百三拾五両被相下、人数八拾四人其内五拾式人ハ、横濱又ハ江戸・白川其外諸所ニテ、当人々々江直渡イタシ候、三百式拾両丈ノ金子ハ御国許ノ様差下候、当然ノ事候得共、出陣先小荷駄方軍用金別テ差支、追々大総督府參謀方又ハ大久保一蔵等江申出、拝借御下金相成、彈藥御買入、且一合戦ノニ過分ノ及費用、無抛右三百式拾両之金モ右江振向召仕候間、其許ニテ右丈ノ員数ハ夫々筋々江御申出、別冊三拾式人江被成下候様御取計可被下候、御国許ヨリモ過分ノ御人数御差出、格別御入費サシ知レタル事ニ候得共、又出陣先何様ニモ金策ノ道無之所ヨリ、治部殿・

正治殿江モ申談ノ上、右之通致取扱候間、相達次第御下金有之候様、御取計被下度奉頼候、

一戦死人数遺髪其外刀・鉄砲・諸品々贈遣候間、相届候様御取計可被下候、

一手負ノ人数追々快気イタシ再帰隊、深手旁ニテ其儀不相調方ハ、細々取調ノ上豊瑞丸ヨリ被差下候、一人モ下リ度趣意無之、押々ノ事ニ御座候、其身ハ其通コソ当然候得共、出陣先ニテ步行旁不自由ニテハ、第一小荷駄方込入申事ニテ、細々申諭ノ上被差下候、右等ノ儀ハ大久保氏等モ申談候、イツレモ一張奉公ハ為致事ニテ、其上ニモ又々帰隊イタシ度トノ趣共、誠ニ感心イタシタル次第御座候、

一會津表ノ儀ハ、此節豊瑞丸ヨリ大久保氏ヨリ細事御届書相成賦ニ御座候、其趣ハ去ル廿八日會津城下ヨリ伊地知正治ヨリ仕出之御届ニ御座候間、別段不申上候、最早落城イタシ候半、

一我々共ニモ五月廿九日江戸出立、六月六日白川着陣、十二日賊兵ヨリ押寄、白川ノ攻掛、薩州ノ固場三ヶ所江ハ賊屯人モ不来、長州・大垣・土佐ノ固メ江合式三千計押寄、朝六時分ヨリ八ツ時分迄砲戦、御国兵ハ一

小隊宛ニテ持場ヲ守リ、其余ニ諸所江応援致シ、外藩固メノヨリ援ヲ乞フ事急也、然ニ一小隊又ハ半隊ツ、クリ出、応援ニテハ無之、先鋒ニ進ンテ散々ニ賊ヲ打散、打取モ不少候得共、薩ニカキリ始終打捨切捨、互ニ功ヲ争フ意毛頭無之、賊ヲ打破ヲ以趣意トシ、大垣・長州モ其意ニ習ヒ御国ノ強勢ニ從ヒ申候、其外モ同様ノ向ニ相成候、廿二日又々寄来、廿五日同断、然処七月廿五日ニハ大挙シテ寄来候得共、方々散々打散、毎度ニ御国ノ固ニハ押寄不申、方々応援ニ候、阿州ノ固メ場ト土佐ノ固メ場、ステニ破レントスル折ニ、五番隊進ンテ追退、一里半計モ追打、阿州ナトハ新し地理不案内故、賊兵間道ヨリ寄来候ヲ不知、正面ヨリ少々掛ル兵ヲ防戦スルヲ見テ、横合ヨリ賊進來候由、然共応援是ヲ助、追打取モ不少候、賊徒兼テイフ、七月十五日ヲ限り白川ヲ追落ス事不叶時ハ、トテモ其後拔事不能、イカナレバ官軍ハ追々軍勢相重可申、夫故是非打破焼払可申ト、其用意ニテ火ヲ掛ル道具迄モ持来候得共、散々追払、六月十二日ヨリ七月十五日迄ノ内ニハ、斥候先或ハ番兵等ハ少々ツ、ノ砲戦ハ数度ニ有之、手負等無之候得ハ、官軍ハ戦ヒノ様ニハ不考位ニ候、

四ヶ度戦ヒニハ段々手負・戦死モ有之候、六月廿四日ニハ白川ノ關山・釜ノ子・淺川辺ノ賊ヲ打散、棚倉江進軍、其日城ヲ攻落、二番隊・四番隊・六番隊・兵具隊・二ノ大砲隊・長州・大垣・土佐・黒羽・五番隊・遊撃隊・一ノ大砲隊、外ニ長州・大垣・土佐兵残り守之、然処白川ヨリ棚倉江廿四日ニ官軍ノ進撃ヲ聞、白川空虚ナラント押寄來候処、官軍アラカシメ計テ知之、待設テ是ヲ破ル、七月十六日土佐・彦根淺川トイフ所ヲ守ル、兵具隊ハ釜ノ子ヲ守ル、一里位隔右淺川江賊寄來、土・彦破レ大砲台場ヲ捨、半道計引退散々ノ折柄、兵具隊聞之応援シテ、賊之横合ニ突出散々追打、其時彦根モ土佐モ機ヲ直シ守返シ、又々本台場取返シ、我カ棚倉ヨリモ応援ヲ出シタル由候得共、早賊落去、又七月廿七日奥州平江被向候兵ト、棚倉兵ト兩道二分テ、三春城ヲ不戦シテ降伏、八月朔日二本松落城、守山ハ賊ニ不組、又官軍ニモ兵ヲ不出孤立シテ居候得共、是モ廿七日ニ伏シテ久留米・大村ノ兵守之、福島城落去、然ニ白川ヨリ六里位ノ所、會津境ノ要所スカ川トイフ所江、賊兵千五百計固居候処、白川勢ト二本松ノ勢、双方攻撃ノ風説ヲ聞テ、朔日夜不殘會津江引退、聖至

堂トイフ要所第一ノ地ヲ守ノ由風聞也、夫故白川ヨリ二本松・福島辺ノ通路囲テ、中途ニ賊徒ナシ、若白川ノ兵隊ヲ都テ他ノ地江クリ出時ハ、湯本・今市・聖至堂辺ノ間道ヨリ賊徒押寄、白川ヲ焼払時ハ官軍甚不利、奥羽第一ノ咽口守之事弥嚴也、何分賊ハ多勢、官軍ハ少勢ニシテ、四方八面敵地ノ真中ニ有之候白川ヲ守ルノ事ニテ、昼夜ノ番兵小勢ニテハ不相叶、始終敵寄來候テ防戦ニ毎モ勝利、然処追々彦根・土佐・尾州・紀州・肥前ノ人数モ着陣、アラカシメ八月八日夜評議、白川ノ地ヲ小勢ニテ守ラセ、今市・湯本街道・聖至堂口辺ニ人数ヲ押出、不掛シテ敵ヲ押エ、本道ヨリ進ンテ二本松ト本宮ト云兩地ニ官軍屯集、二本松・棚倉・守山・三春辺ニハ少々守衛ヲ殘シテ、中山道ヨリ二道二分テ會津ノ地ニ進入、仙臺ノ地ハ二本松・福島二兵ヲ殘シテ是ヲ押エ、會津・米澤辺江ノ応援ヲ立功、湯本・今市街道・聖至堂押エノ兵ハ、不戦破レサルヲ主トシ、聖至堂口ヨリ掛ルノ勢ヒヲ張時ハ、敵必第一ノ要地タルニヨリ、會津城ヨリモ勢ヲ出シテ応スヘシ、左候得ハ本城ハ、猶兵勢少シテ攻ニ安カラントノ評議ニ一決シテ止ヌ、二本松ノ方ヨリ成田彦十郎・川村與十郎・

池ノ上四郎左衛門・須磨敬次郎等来、八日ノ夜七字前ヨリ本営ニ集ル、篠原・鈴木・小倉・野津・伊集院直右衛門・飯牟禮喜之助其外五六人有之候得共、不覚夜半迄右ヲ論ス、其内ニハ且怒リ、且笑ヒ、且棄ミ、與十郎・左衛門・冬一郎・武五郎其外イツレモ正治・治部ニ迫リ、一日モ早ク會地ニ攻入ラントイフ、進軍ハ甚安シ、然共白川ヲ守ルノ兵ノ来ヲ待テ進ント、近日中ニハ肥前カ細川カノ間、可来兵ノ五六百モ来時ハ直ニ進シ、若此白川ヲ敵ノ為拔ル、時ハ、甚官軍利ヲ失フベシト云、然ハ此白川ノ地ヲ都テ焼払テ出ント、サスレハ賊来テ足ヲ止ルニ地ナシトイフ、又正治イフ、湯本・聖至堂辺ヲ押ユルノ兵モ少シ、三日ヲ待テ右藩ノ兵来ルヘシ、聖至堂ハ第一地タルヘシト武五郎・冬一郎イフ、聖至堂口江ハ此二小队ヲ以向ヒ、無二無三打破ヘシ、其機ニ乗シ、中山道ヨリ進ンテ城ニ迫ルヘシ、聖至堂ハイカナル要地トイフ共、死ヲ決シテ打破ルヘシト云フ、正治不諾、兵ヲ損セシテ破ルヲ良策トイフヘシ、イツレモノ論議誠カンシンイタシ居候、其内長州・大垣等モ隊長々々来テ、薩隊ノ向フ地ニ付テ向ハント、シキリニ乞フ、土佐モ来テ同シ、其外隊モ来

テ方向ヲ乞フ、有馬七左衛門・平田九十郎・濱田源兵衛・池ノ上四郎左衛門等応接ス、夜半ニ至テ前件之通ヨウ／＼相決シ、既二十日ニ、會津ノ地ニ進軍ヲアラカシメ定メ、九日ニ鷲尾殿惣督江内評ノ趣ヲ申上ルニ究テ止ヌ、九日朝成田・須磨・川村・池ノ上等二本松ノ方江帰ル、然処九日ニイタリ、乾退助方ヨリ午便ノ筋有之段申来候由ニテ、其日ノ進軍ハ止テ十五日方ト云フ、然ニ小子事ハ軍用金乏敷、大総督府參謀方江拝借可申出、俄二十日出立江戸迄差越、彈藥ノ儀モ早々貳拾万發丈差贈候様トノ事、致出立其後ノ次第不承候処、廿八日ノ飛札三日ノ夕方相達、大久保氏ニテ一見イタシ候、彈藥モ廿八日・廿九日・朔日拾五万發計ハ贈遣候得共、今拾万發計ハ贈遣候賦ニテ、取入方ニ横濱江三日ノ夜半江戸立、横濱江昼前着、則ヨリ手当大体相揃賦、中々貳万ヤ三万兩ノ金ニテハ、何ヲトウイタシ様モ無之、大心配イタシ候、我國ナカラモ合戦ノ次第兵隊ノ勇氣中々筆紙ニ尽シカタシ、生捕ノ者イフ、薩州ノ兵隊ハ、イカナル台場モ、向フ所破ラストイフ事ナシ、正面ヨリ形チヲ隠シ押寄、決テ魔法隊ニテ可有之、マタヒ、隊是ハトヲ以テ相國ニハトナシト云フ有リ、是ハ撤



兵ニテ攻来奇妙ノ兵隊トイフ、分捕書付ノ内ニモ有之候由、御国ノ兵勢誠ニ鬼神トイフヘシ、大垣勢ノ真実誠ニムソフナル次第ハ一步モ不退、御国隊ニ付テ進来候白川口之長州勢ヨリハ、カヘツテ盛ニ御座候、人氣一体正道ニ有之、最先鋒ヲ勤巧<sup>功カ</sup>ニ依テ被賞トノ事ニテ、其時迄ハ官軍ニ属シ候迄ニテ候処、赦免ヲ蒙リ効ヲ被賞、本官旧領如本被復トノ事ニテ、今コソ実ニ官軍タリ、今ヤ早ヤ世ニ思ヒ残事モ無之、一人モ生テ再度国ニ帰ニ不及、必死ノ格護トイフノヨシ、実ニ其通ノ働キニ御座候、御国ノ兵ニ付添候故、一度モ敗軍不致、夫故薩兵ノ向フ方ニ付テ進ント望申候、長州モ同様共ニ進ント<sup>イカ</sup>フノ由、土佐モ同様マタ黒羽纒一万石位小身ニテ、頭ヨリ敵ノ真中ニ孤立イタシ、始終心ヲ不変官軍ニ付テ大藩同様ニ有之、人物モ一体宜敷候、砲術モ以前ヨリ余程向ケ居一段成働ニ候、奥州・仙臺・庄内表等ノ儀、色々承及候得共、取占タル事ニ無之候間、不申上候、目前之事迄アラ〜申上候、何分一人ニテ方々馳廻リ、彈薬取入旁大心配可笑モ無憚、不綴之アラマシ為御知申上候、委細ユル〜申上度候得共、不相調候、

一前件ノ趣、何分可然様御取扱奉頼、

一此節大迫喜右衛門・種子田左門ナト帰国候間、委細御聞可被下候、

一井上新右衛門・兒玉與助江モ伝言相頼候間、御聞取可被下候、

右之通御頼談申上度、如此御座候、

肝付郷右衛門

九月六日

横濱ヨリ

御国許

御軍賦役様

七二〇 藩庁兵士等ノ非常召集規定ヲ申渡ス

コノ日、藩庁ニテ陸海軍兵士並ニ無役者等ノ非常召集規定ヲ申渡セリ、ソノ文左ノ如シ、

御定場左之通

一陸軍兵士

右陸軍所へ可相集候、

一海軍兵士

右海軍所へ可相集候、

一 台場受持之面々ハ、夫々持場へ可相集候、

一 無役之面々ハ、下方限ハ御城下供屋へ組々不入交様相

集、上方限ハ種子島彈正屋敷迎へ前条同断可相集候、

一 一番早鐘ニテ軍粧シ、二番早鐘ニテ早ク右之場へ可參

着候、以上、

七二一 明治ト改元シ一代一号ノ制ヲ定メ大赦ス

八日、詔シテ明治ト改元シ、一代一号ノ制ヲ定メラレ、

本日以前ノ犯罪ハ、大逆・故殺及ヒ犯情赦シ難キ者ヲ除

クノ外、凡テ一等ヲ減セラル、ソノ詔書及ヒ達書左ノ如

シ、  
七二一ノ  
今般

御即位御大札被為濟、先例之通被為改年号候、就テハ

是迄吉凶之象兆ニ随ヒ、屢改号有之候得共、自今

御一代一号ニ被定候、依之改慶應四年可為明治元年旨

被

仰出候事、

九月 (八月)

行政官

官中日記  
有栖川家記

七二一ノ二  
改元詔書

詔体太乙而登位、膺景命以改元、洵聖代之典型、而万

世之標準也、朕雖否德、幸賴祖宗之靈祇、承鴻緒、躬

親万機之政、乃改元、欲与海内億兆、更始一新、其改

慶應四年、為明治元年、自今以後、革易旧制、一世一

元、以為永式、主者施行、

明治元年九月八日

議政官

輔相

岩倉右兵衛督具視

議定

中山儀同忠能

正親町三條前大納言實愛

徳大寺大納言實則

中御門大納言經之

松平中納言慶永

山内中納言豊信

伊達宰相宗城

参与

阿野中納言公誠

鍋島少將直大

三岡四位公正

福岡四位孝弟

小松玄蕃頭清廉

後藤象二郎元燁

大久保一藏利通

木戸準一郎孝允

廣澤兵助真臣

副島二郎龍種

横井平四郎時存

岩下左次右衛門方平

大木民平喬任

行政官

弁官事

坊城右大弁宰相俊政

勘解由小路左中弁

五辻彈正大弼安仲

秋月右京亮種樹

西四辻少將公業

神山五位君風

田中五位輔

神祇官

知官事

鷹司前右大臣輔熙

副知官事

龜井中將

判官事

植松少將雅言

福羽五位美静

會計官

知官事

萬里小路中納言博房

判官事

池邊五位永益

軍務官

副知官事同様

有馬中將頼慶

三等陸軍將

坊城侍從俊章

判官事

海江田五位信義

外国官

知官事

伊達宰相宗城

副知官事

小松玄蕃頭清廉

刑法官

知官事

大原中納言重徳

副知官事

備前侍従章政

判官事

中島五位錫胤

土肥謙蔵

京都府

知府事

長谷宰相信篤

判府事

松田五位道之

青山小三郎貞

等謹奉

詔以施行、

明治元年九月十二日

宮内省記  
太政官日誌

七二二三  
今般

御即位御大礼被為濟、改元被

仰出候ニ付テハ、天下之罪人、当九月八日迄之犯事、

逆罪・故殺並犯状難差免者ヲ除之外、總テ減一等級被赦

候事、

但犯状難差免者ハ、府藩県ヨリ口書ヲ以テ刑法官へ

可伺出事、

九月(八日)

行政官

官中日記  
毛利元徳家記

七二二四

来八日辰刻改元式被為行候ニ付、

参賀可致事、

但御当日相除、九日ヨリ十二日迄之内参賀、重軽服

ハ御神事後參賀可致、総テ不及献物候事、

九月 七日

行政官

一來八日改元之式被為行候付、參賀之節諸侯着服如何

相心得可申哉、

〔采〕一衣冠指貫着用之事」

一在国在邑之輩、重臣ヲ以右同様申上候節、着服如何

相心得可申哉、

〔采〕一麻上下着用之事」

一右同断之節、公議人之參賀ニ及中間敷哉、若參賀仕

儀ニ御座候ハ、是亦着服如何相心得可申哉、右之

節

御仮建へ罷出可申上心得ニ御座候、

右之稜々奉伺候、乍御面倒御書入奉願候、

〔采〕一可為伺之通事」

九月七日

三藩

別紙之通、因州様衆ヨリ廻達相成候間差上候事、

辰九月八日

内田仲之助

今般改元式被為行候付、在京無之面々ハ、重臣ヲ以參

賀可致旨被

仰出候付、

太守様

中将様ヨリノ為御使、御手前様御仮建へ被成御出、御

使番小野兵部丞へ御出会恐悦被仰上候処、柳原大納言

様被成御承知候旨、被申聞候、夫ヨリ大宮御所奏者所

へ被成御出、北面林松之介へ御出会、恐悦被仰上候様

可申上旨被申聞候、

右之通、今日御同伴御留守居附役赤井直之進相勤申候、

此段申上候、以上、

辰九月十二日

内田仲之助

〔島津久義〕主殿様

〔政風〕島津忠義家記

七三 藩庁異船渡来ノ時ノ心得ヲ海岸附郷々ノ

地頭・領主及ヒ船奉行ニ達ス

九日、藩庁ニテハ異船渡来ノ時ノ心得ヲ、海岸附郷々ノ

地頭・領主及ヒ船奉行等ニ達セリ、ソノ文左ノ如シ、

異船入船之節心得

一西洋船ニ不限、三艘以下之船ニテモ、何欵詔合有之渡

来之節ハ、地頭見計を以、時機次第早打又ハ大宿次等

を以、早速海軍所江届申出候様申渡置候得共、其通ニテハ、万一異変之段之御手当向等、間後可相成候間、以来右様之船渡来弥異変ニ疑敷見定候ハ、地頭見計を以相図も砲発并烽火相立、順々請次候儀共、四艘以上之洋船入船之節通可取計候、右ニ付テハ不慥之儀も慮忽ニ致相図候テハ、動揺ハ勿論、余計之手数ニも相拘事候条、念入差図可有之候、此旨山川・佐多より谷山・櫻島迄海岸付之郷々地頭・領主江申越、御船奉行其外可承向江も可申渡候、

但四艘以上之西洋船并何軟無子細、右以下ノ船入船之節ハ、是迄申渡置通可相心得候、

九月九日

良馬

明治元年辰九月八日改元明治トナル、

### 七二三 軍務官各藩従軍死傷者名ヲ録上セシム

十日、軍務官ヨリ各藩ノ従軍死傷者ノ氏名ヲ録上セシム、ソノ達書及ヒ本藩ノ調書左ノ如シ、但調書略ス、

達書

当春以来戦争ニ付、死傷人名一々兼テ届出候得共、尚

亦篤ト取調、迅速可申出旨申達候事、

九月十日

軍務官

### 七二四 小松帯刀東幸ノ東京先発ヲ命セラル

コノ日、小松帯刀御東行ノ御用ニテ、東京先発ヲ命セラル、ソノ辞令左ノ如シ、

小松玄蕃頭

御東幸御用ニ付、東京先着被 仰付候事、

### 七二五 白濱勘兵衛徴士・日田県判事ヲ命セラル

十一日、藩士白濱勘兵衛徴士・日田県判事ヲ命セラル、ソノ達書左ノ如シ、

達書

白濱勘兵衛

徴士・日田県判事被仰付候事、

九月

行政官

【参照】

薩摩少将

其方家来白濱勤兵衛儀、徴士・日田県判事被仰付候間、  
出仕可申付事、

九月

行政官

非藏人口唯今御用御留守居附役勤小野半左衛門罷出候  
処、白濱勤兵衛徴士被仰付候付、在京無之候ハ、当  
人へ可申越旨、清閑寺左大弁様被仰聞、御書附被成御  
渡候事、

辰九月十一日

内田仲之助

七二六 駅通規則ヲ定メ府藩県ニ宿弊ヲ釐革セシ

ム

十二日、駅通規則ヲ定メ府藩県ニ令シテ宿弊ヲ釐革セシ  
メ、又東幸沿道ノ諸藩ニ令シテ緩撫ノ大旨ヲ体シ、務メ  
テ通伝艱滞ノ患ナカラシム、ソノ規則並令告左ノ如シ、  
七二六ノ一  
助郷ハ天下之公課ニ候処、私役等ヲ以種々申立候村邑  
モ有之、右ハ奉対 朝廷恐入候次第ニ候、然ル処領主  
支配添書相認、為致歎願候向モ有之、心得違ノ事ニ候、  
尤難渋ノ村々ハ甲乙御取調ノ上、減役除免等可被 仰  
付旨、御布告モ有之候得共、即今一同ニ申立候テハ、

御組替之妨礙ニモ相成、自然 御法制相立兼、諸道一  
般ノ難渋ニ立至リ候儀、大小緩急ノ次第深ク相弁へ、  
縦令領分支配ノ内難渋ノ村邑有之候共、追テ御取調ニ  
相成候迄、他村並ノ郷役相勤候様、於府藩県相応ノ手  
當致置、眼前諸道ノ難渋相救、御用弁致シ候様一同承  
知、共々尽力可有之事、

助郷組替相濟候分、追々宿方支配ノ府藩県へ御委任可  
相成候間、支配違ニ不拘人馬觸当次第速ニ差出シ、都  
テ其宿々ノ指揮ヲ受候様可致、郷方支配府藩県ニヨイ  
テモ得其意、配下へ常々為申聞、不都合無之様可致候  
事、

九月(十二日)

駅通司

七二六ノ二

駅通規則

一 駅通之法則ハ総テ駅通司ニテ確定シ、府藩県其法則ヲ  
守リ、遠近諸道一般ニ取締可申事、  
一 駅組替之儀ハ、駅通司ニ於テ取調、其駅支配之府藩  
県へ達シ、府藩県ニテ請取調印等可申付事、  
一 駅々附属村之内、他支配入雑居候共、其駅支配之府藩  
県ニテ、一手ニ取扱可申事、

一 駅郷之者共訴訟並願之儀ハ、其駅支配之府藩県ニ於テ可致所置、万一見込難付節ハ、其支配ヨリ添簡ヲ以駅通司へ可申立事、

一 駅郷之儀ニ付、駅通司へ呼立候節ハ、其者支配之府藩県へ相掛リ呼立可申、万一至急之儀ニテ直ニ呼立候節ハ、其旨支配へ前後ニ相達可申事、

一 駅々廢置道替等ヲ初、往来ニ關係致候事件ハ、總テ駅通司へ相達取計可申事、

附出火・出水井道中筋異変有之、往来ニ差支候節ハ、

駅々伝馬所取締役ヨリ逐一駅通司へ可届出事、

九月 午二日

駅通司

七二六ノ三

御東幸沿道諸藩へ

先般相達候東海道助郷、一宿凡七万石附屬可被 仰付  
筭候処、御多端之折柄、未タ御組立不相成宿々モ有之、  
今般 御東幸被 仰出候付テハ、是迄疲弊之定助郷而  
已ニテハ、必至難涉之趣相聞へ候得共、右ハ不日新助  
郷御組立出来次第、御布告之通五月已来之分共、宿郷  
平等ニ割勤メ、埋可被 仰付候条、其旨相心得、一同  
申合、御継立無滞尽力可致候、尤是迄取来候割錢之儀

モ、自今宿郷一体之訳ニ付テハ、別段宿方へ受取候ニ  
不及、私賃錢不残出人馬へ相渡候様、是又相心得可申  
事、

九月 午二日

駅通司

七二七 東北征討諸軍ノ兵士ニ防寒用毛布ヲ賜フ

十四日、東北征討諸軍ノ兵士ニ防寒用毛布ヲ賜フ、ソノ  
達書左ノ如シ、

征討諸軍へ御沙汰書

東北征討之諸軍勇進長驅、已ニ賊巢ニ逼リ、捷報日ニ  
至リ 歡感不斜候、然処辺陲之地追々寒天ニ赴キ、風  
雪慘苦ニ可至哉ト、深ク被為痛 聖念候ニ付、格別之  
思召ヲ以テ、聊為防寒毛布一着宛賜之候事、

九月 午四日

行政官

七二八 赤塚真成書ヲ谷村昌武外二名ニ贈リ、春

日艦ノ從軍行動及ヒ東北地方戦況ヲ報ス

コノ日、軍艦春日丸艦長赤塚源六、書ヲ谷村小吉・郷原



内吉・徳田彦二ニ贈リテ、春日艦ノ從軍行動及ヒ東北地方戦況ノ概略ヲ報ス、ソノ文左ノ如シ、

赤塚源六書翰

尚々仙臺・米澤降伏、會津攻禿シ、庄内・盛岡ノミ、最早心易ク罷成、追付鎮定可相成、

御三所様被為揃御勤務被成御座、大慶奉存候、蒸艦去月六日前之濱出帆後、海上殊之外ヨロシク、翌七日夕方二平戸領川内港江入船、翌八日朝四ツ時分同所出船、同十日二字二十五分越後柏崎江着船之処、村上迄進撃相成居、戦毎ニ官軍勝利ヲ得、新潟辺ハ少ハ六ヶシカルベクニ、容易落去候由承、同夜三字ニ柏崎出船、翌十一日朝八時比ニ新潟江着船直ニ上陸、海軍参謀本田<sup>親徳</sup>彌右衛門<sup>親徳</sup>引合候処、猶又戦争之次第モ相分、然処ニ石炭乏敷相成、積入方トシテ佐渡国小木港之様同日暮前同所出船、同十五日新潟へ帰艦、

一春日丸ヨリ先ニ前之濱出船之異船並久留米船式艘共ニ、イマタ着船無之候ニ付、不落着之処、異船ハ同日同所江着船相成、平戸沖辺ニテ難儀イタシ候由ニテ、帆柱等モ吹折、見苦敷体ニ相見得、夫故兵隊モ難儀被察候、同所ニオヒテ右異船亦々御頼入相成、其俣兵隊

積乗、羽州秋田之様御着相成、翌日十七日朝同所出船ニテ候、同廿二日久留米船同所へ着船イタシ候付、遲着之訳相尋候処、玄界通り抜候時分ニ機械相損、長州領福浦へ入船修覆イタシ候付、夫故遅引相成候由、海上ハ無事ニ航海之由、

一羽州秋田口之形勢不相分候ニ付、八月廿五日十時比松ヶ崎出船通り掛、敵地庄内領鼠關其外鴨辺江備付候砲何程居付相成候哉、且台場所拵へ候哉、如何之手配イタシ居候哉、為試砲発イタシ候処、鼠關ハ左程手厚ニモ無之、鴨港ハ城下ヨリ三里之里数ニテ、余程要所ト相見へ、三十二斤位之後装砲ラシキ砲五六挺、台場ニ据付候様子ニテ、其余ハ十二斤位之砲ト相見得候、彼方ヨリモ相応ニ応砲イタシ候得共、艦ニハ一発モ当リ不申候、鴨近辺ニハ台場式三ヶ所築立置候、随分堅固ニ御座候、同廿六日久保田湊着船、直ニ上陸、伊東次右衛門・村田新八・柴山龍五郎同道城下之様参リ、大山格之助江引合、羽州之事情承候処、白川口・越後口之様ニ墓々敷進撃モ無之、全隊兵威盛ニ無之、案外之次第ニ御座候、去ル廿三日秋田領之内神宮司口出張之島津登隊<sup>久保</sup>進撃之処、当日之戦争不勝、夜ニ入賊裏手ニ廻

り、不意ニ此方之本陣ニ突入、殆狼狽終ニ防禦全無之、我兵散乱シタリ、彈藥少々用金等モ打捨タリ、此所ニテ島津真八郎第八郎久徳戰死、足輕隊長モ戰死、其外手負・戰死ヨク不相分候、此一戰ニ諸藩兵ノ勢ヒ可增加之処ニ、初戦ニ右之大敗北、諸藩々之隊々モ力ヲ落シ、只々濡鼠ノ様ニテ、持口ヲ守リ候ノミニテ、進撃之嘶モ無之、実ニ残念之至也、肥前兵ハ大凡二千余リモ出張候得共、人数計ナリ、殊ニ秋田兵ハ砲械少ク、過半ハ鎗・長刀之ヲシヤレニテ、実ニイケントモスルニ力ナシ、我艦ノ評決ニハ村上口・秋田口双方ヨリ進撃相成、其機ニ応シ足輕式小隊・西千嘉隊・大砲隊此人數ヲ以、庄内鴨又ハ酒田辺ヨリ突入之決策ニテ、艦之如キハ縦横ニ奔走、海岸ヲ打敗、陸兵之応援可致之処、秋田口右之次第二テ、夫ヨリ村田・柴山・伊東談合、今少シ秋田口ニ勢ヒヲ不附シテハ、不相落ト日限ヲ究メ、海陸ヨリ一緒ニ進撃相始メ候テハ、何様可有御座哉ト、大山格州へ及論評候処、同人モ至極同意ニテ、肥前末家鍋嶋上総宿陣江大山・村田・柴山同道參リ、右之論相立候処、最初クドク論モ立兼候得共、頻リニ此方ヨリ論相立候処、後ハ同論相成、廿九日未明ヨリ進撃ニ相

決、海陸之暗号等相定メ罷歸候、賊兵ハ海岸道川ト云所江屯集イタシ居候、去程ニ八月廿九日未明ニ久保田湊出艦、龜田領長濱ト云所へ參リ掛リ候処、最早砲撃相始リ、道川ト長濱トノ間勝ト云所ニテ、敵賊ハ嶮地ニヨリ、味方ヲ眼下ニ見卸ス程之要地ナリ、官軍ハ尤低カ卑ク地ニ張出候付、進ントスレドモ進マレス、退ントスレドモ退カレス、進退不自由ニ相見得候ニ付、艦ヨリ此有様ヲ見ルヨリ、英々之声ニテ、四五町之処迄寄付ケ、玉葉ヲ不惜賊兵之真中江打込候処、暫時之間砲声モ相止メ、動揺之体ニ相見得候、然共陸官軍一步モ不進、一向賊ヨリ射詰ラレ候様子ニテ土台之側ニ伏シ、敵之彈道ヲ避ケ候ヲ先キトシテ、我ノ銃ヲ射ル事ヲ後ニシ、敵ヨリハ雨ノ如ク銃丸ヲ飛シ、味方ヨリハ四五発ツ、ポシヤクト射出ス位ニテ、中々目モ当ラレ又次第ナリ、艦ヨリハ益味方ニ精氣ヲ益増カント、実彈・榴彈着發彈込替々々打出シ候得共、以前之通半歩モ敵ニ足踏イタス之様子全ク無之、此上ハ応援之詮不相立、稀レニ打方イタシ、沖之方ニ乗出シ見物仕、兵糧等給ベ煙草スツバノ体ニテ、面白事無限、然共官軍之不進ハ不面白候、凡五ツ時ヨリ七ツ半比迄、打合ニ大

概百發余リ彈藥費シ申候得共、全其詮無之殘心不少々、然ルニ余リ陸軍進兼候付、伊東次右衛門・伊地知休八兩人バツテラヨリ上陸、戰場迄差越、惣督府監軍長藩山元登雲介・肥州大將鍋島上総江今日進撃之次第引合相成候処、右兩人返答ニハ、御存通敵ハ嶮地ニ出張候付、唯今ニテハ味方進兼候間、夜ニ入一先引揚、夜撃之手段ハ宜ト決儀相成候段返答候付、次右衛門申候ハ、艦之儀ハ風之模様ニヨツテハ、応援モ出来兼候付、其段ハ前広申上置候間、左様御心得可給段申候処、今一度ハ御打込被下度ト鍋島申候ニ付、艦之儀ハ何時ニテモ応援可仕候、然共陸軍不進候テハ、敵散兵之中江大砲丸数多打込候テモ、無益之事ニ御座候ト申候処、タマカラレ候由、実ニ此位之大將ニテハ、十篇戦候テモ勝算之目留無御座、可笑次第也、左候テ次右衛門帰艦、右之報知ニテ今一応手繁キ砲發相始メ候得共、以前ニ不相替候、既ニ日モ西ニ傾キ風モ少々吹出シ候ニ付、暮過迄見合久保田湊迄帰艦、翌朝ニ相成風模様悪シク候ニ付、湊ヨリ十里計リ有之候湊船川ト云所へ逃シ、弥風強ク西南之風ニテ、殆ト破船沈没セントスルノ塩梅ニテ、是ニ大キニ苦ミ申候、然処夜十一字比ヨリ南

西之西ノ風ニ相成、横波ニテ船之動揺甚シ、翌朝ニ相成少々ハ浪小ク相成候得共、船之動揺ハ不相替、九月朔日昼一字比ニ相成、波静ニ相成、初テ蘇生之心持ニ罷成、此因窮御推量可被下、艦モ所々損所相見得、今千斤位モ御手入無之候テハ、本之春日丸ニハ相成申間敷候、天災無致方次第也、同六日夜十二字船川出艦、翌七日三字比越後松ヶ崎着船、早速上陸、西郷吉之助トノへ曳合候処、仙臺口之模様相分リ、白川口ヨリ會城下迄押寄、越後津川口之隊ト合隊ニ相成、去ル六日土州人之書状ニ、(采九)去ル八日ニハ城中江突入之賦之由承候、上杉ハ弥降伏、主人新發田迄出向、謝罪之道相立候由、右ニ付庄内鴨・酒田辺ヨリ、機ニ応シ海岸ヨリ突入之策相變、上杉堺ヨリ庄内之後口ニ突入之決策ニテ、足輕式小隊・大砲半座・西千嘉隊坏モ、同八日朝松ヶ崎出立、上杉堺之様進軍ナリ、当艦三字比ヨリ風模様不宜ニモ候付、佐渡国小田湊江相逃シ、同十日夜十二字五分同所出艦ニテ、越前敦賀湊之様石炭積入トシテ航海、同十一日六字四十分ニ着舟、当所ニ平山龍助・有馬藤太彈藥運送一条ニ付、出張相成、カタク都合ニモヨロシク、石炭モ唐津石炭有之、十分積入相

濟次第ニハ、亦々新瀉之様廻船、依時宜候テハ、庄内

徳田彦二様

方へ廻船之含罷在候、何分ニモ北海ハ音ニ承候通り、  
今比ヨリ先キハ恐ロシキ場所ニテ、風トノ戦争ハ直ニ

逃ルカ大勝利ニ御座候得共、夜中ニ不意ニ北前ニテ申

七二九 越後口総督嘉彰親王河沼郡氣多宮村ニ至  
リ諸軍ヲ勞ス

觸候銃砲風トヤラニハ、中々難儀御座候、越後柏崎江

十五日、越後口総督嘉彰親王參謀以下ヲ率キ、新發田ヨ

筑後柳川蒸氣船一艘・藝州万年丸一艘、右式艘ハ陸ニ

リ津川ヲ經テ河沼郡氣多宮村若松城ヲ距ルニ至リニ至リ、諸軍ヲ勞

吹上ケ用ニ立不申候、羽州久保田湊江肥前蒸氣船壹艘

ス、諸軍大ニ振フ、廿一日ニ至リ総督新發田ニ還ル、氣

陸上ニ吹上ル、奥州八戸江肥前軍艦壹艘、是モ瀬ニ乘

多宮村ニテ諸向ヘノ達書左ノ如シ、

上用ニ立不申候、突ニ油断ハ大敵トヤラニテ、暫時之

諸向ヘ達シ

間ニ右様災難ニ逢申事、少シハ船乗之油断ヨリ可生、

軍士御慰勞、且若松表事情ヲモ委細被

折角念ヲ入申事ニ御座候、當艦江柏崎ヨリ手負人等積

聞召度、當所迄御出馬被為在候処、賊地事情ヲモ御熟

乗セ、長崎廻艦致候様致承知居候へ共、何分石炭乏敷

知被遊候ニ付、一ト先新發田御本宮へ御帰陣ニ相成候

候テ、其通り御受難仕、無抛モ當湊迄參リ候儀ニ御座

事、

候、幸石炭モ過分ニ有之、思尽ニ積入、庄内之一左右

九月二十日

相伺、其上帰国ニ赴キ可申候間、御待可被下候、平山

七三〇 伊達慶邦・板倉勝尚軍門ニ降り徳川捕鯿

氏近々當所出立帰国之段承候間、荒増之一左右申上候、

ノ徒五百余人仙臺老臣ニ就テ降ヲ乞フ

九月十四日

赤塚源六眞成

谷村小吉様

郷原内吉様

コノ日、伊達慶邦仙台藩主平瀨口総督ノ軍門ニ降り、子宗敦

ト共ニ退城謹慎ス、徳川捕虜ノ徒五百余人亦仙臺老臣ニ就テ降ヲ乞フ、コノ日板倉勝尚モ亦白川口総督ノ軍門ニ降ル、ソノ關係書類ノ概略左ノ如シ、  
七三〇ノ一

慶邦歎願書

臣慶邦恐惶頓首泣血奉歎願候、今般會津 御征討之御、名分順逆ヲ誤リ、於出先家来共官軍ニ抗シ、奉惱宸襟候段恐懼至極、臣子ノ名分不相互、先非悔悟、今更何共可申上様モ無御座候次第、臣乍不肖モ素ヨリ奉抗敵

朝廷候存意ハ、毛頭無御座候得共、全ク遠境隔絶之礙土ニ罷在、春来天下ノ事情形勢モ一々承知不仕、恐多クモ厚キ

叡慮ノ旨モ具ニ不奉伺、遂ニ右様之事件ニ立至リ、畢竟兼テ指揮不行届ヨリノ所致ニテ、如何ニモ重々奉恐入候次第ニ付、此上ハ本城ニ罷在候モ甚奉恐入候間、速ニ城外へ退去謹慎恭順罷在、即チ出張ノ隊長參謀臣ハ嚴敷謹慎申付、奉仰

朝裁、鬪藩誓天地勤

王之外他志無御座候、就テハ同盟ノ列藩へモ、早速降伏謝罪為仕候様説得尽力罷在候間、悔悟謝罪ノ藩々、

一同御寛典ノ御処置被成下候様、冒万死偏ニ奉歎願候、誠恐誠惶謹言、

辰九月

臣藤原慶邦印判

諸道記概略  
仙台藩記

七三〇ノ二

仙臺藩へ

徳川脱走ノ家来、其藩ヲ依頼罷在候由相聞候条、其俵留置人員可申出候、真ニ悔悟謝罪ノ上ハ、寛大之御処置モ可有之条、動揺不致様可取締ノ旨、御達有之候事、但器械ハ取上ケ、早々可指出候事、

九月

參謀

仙台藩記

七三〇ノ三

伊達陸奥

今般降伏之歎願書御落手ニ相成候上ハ、速ニ城地並器械・彈藥御先鋒へ差出シ、謝罪ノ実効可相頭旨、御沙汰候事、

但徳川脱臣之儀モ、去ル十六日御達面之通、早々処

置可有之候事、

九月

參謀

平瀧口總督日誌  
仙台藩記

平瀧口總督日誌  
仙台藩記

總督日誌二云、九月廿四日陸奥參上相達、

七三〇/四

伊達陸奥

重役共へ

領分民政之儀、追テ御沙汰有之候迄ハ、重役ノ者乍慎  
取締可致段、

御達有之候事、

九月

参謀

平瀧口總督日誌  
仙台藩記

日誌又云、九月廿九日昨日昼三字、先鋒入仙城、城  
請取無異儀相濟候事、

七三〇/五

仙臺藩へ

徳川脱走之家来其藩へ依頼罷在候者共、屢抗

官軍候、其罪不輕候得共、真ニ先非悔悟ノ上ハ、出格

之御計ヒヲ以、死一等被免候条、其心得ヲ以鎮定可致

旨被命候事、

九月

参謀

【参照一】

以飛札得其意候、去ル十五日、仙藩使節伊達將監・遠藤文七郎・櫻田春三郎、肥後持場御軍門外ニ罷出、降伏謝罪之歎願書差出候、右ニ付翌十六日同所へ左久馬罷出、困情得卜聞糺シ候処、恭順謹慎之体相違モ無之ニ付、則歎願書御落手ニ相成候趣申渡候、則別紙之通<sup>上ノ達書</sup>ヲ指<sup>指</sup>又<sup>指</sup>御下札並御達有之候処、謹承仕候、依之明廿日中村城進発、御先鋒左之通巨楯迄御繰込ニ相成候、於同所御処置相付、直ニ城下へ御進軍、城地請取候心得ニ御座候、乍去但木土佐之一手六百<sup>(或曰)</sup>人計不伏王化、依之仙藩人数ヲ以討取、実効相建候段、申出居候処、仙之世子説得ニ寄、五百人ハ鎮定仕候得共、百人ハ脱走、徳川脱走ト合力致シ、此度専尽力仕候処之仙之老臣ヲ斃シ候企有之趣、今日達シ出申候、右ニ付殊ニ寄小戦争ハ可有之ト奉存候得共、前途見込モ相付居候事故、御安意可被下候、脱艦モ石炭ニ乏シク候事故、十分御手ニ入可申ト奉存候得共、榎本和泉如キ之鼠輩、仙藩降伏之機ヲ察シ、疾ニモ脱走可仕哉モ難計候ニ付、其辺之処モ仙藩へ急

心添仕置候事ニ御座候、

前文之次第第二付、最早兵隊御繰出シニ不及申候、薩兵モ昨日着仕候、是ニテハ人数モ十分ニ付、左様御承知可被下候、当局モ同様次第故、別段同役御差越シニ及不申候、総督卿ニハ巨楯へ御先鋒着之上、御左右申上、其上御進軍ニ相成申候筈ニ御座候、

先達テモ申上候蒸氣ニ乗組、可然人物早々御差越可被下候、

病院余程雜費入用ニ付、金三万金丈ケ早々御送り方不相成テハ、進退ニ甚困リ居候、其御取計奉頼候、

九月十九日

寺島秀之助

河田左久馬

高橋熊太郎

吉村長兵衛様

大村益次郎様

平潟口総督日誌

【参照一】

臣勝尚恐惶頓首泣血奉歎願候、今春會津御征討ニ付、鎮撫御総督府之

御敵命厚奉戴罷在候処、奥羽之形勢俄ニ変換、大藩之

指揮不得止、於出先家来共

官軍之御通路先へ不敬仕候段、全ク臣不行届ヨリ遂ニ順逆ヲ誤候事ニ立至リ、重々奉恐入候、奉抗

朝廷候存意ハ毛頭無御座候処、七月下旬

官軍御進軍、二本松既ニ落城之趣、猶恐愕進退窮迫、無余儀開城、隣藩之訊ヲ以テ、米澤表へ退居罷在候、然ル処上杉弾正ヨリ厚

叡旨之程奉伝承、

天恩深重之程奉感泣候、弊邑之儀ハ都鄙懸隔、春來道

路梗塞

叡慮之程モ不奉伺、至今日候段、今更申上様モ無御座

候、依之時事ヲ誤候者嚴敷謹慎申付、今般

御陣門へ罷出、居城並土地・人民共返上、奉仰

朝裁

候、

此上ハ主從誓天地、勤

王之外他志御座候、乍恐今日之情実

御憐察被成下、以海量之

御仁恵出格寛典之 御処置奉仰度、冒万死奉歎願候、

此段宜御執

奏被成下度、偏ニ奉願候、誠恐誠惶謹言、

慶應四辰年九月

板倉勝尚

板倉勝達家記  
重原藩記

【參照三】

勝達家記ニ云、明治元年戊辰九月十三日、於二本松參謀渡邊清左衛門殿へ、澁川教之助始為歎願罷出候面々ヨリ、主人甲斐守儀昨今從米澤藩福島へ帰邑致候由、伝承致シ候間、同人為迎罷越シ、為致降參候様致度旨出願候処、白川口總督正親町殿御聞届被成候旨御達ニ付、即刻福島表主人甲斐守為迎、澁川教之助始十三人二本松出發、其日福島ニ着ス、

福島藩

澁川教之助へ

明十五日四時、於竹田町善性寺、甲斐守儀へ致応接候、此段申達候事、

九月

參謀

福島藩重役各中

同十五日、御達之通善性寺へ甲斐守出頭、參謀渡邊殿

へ謁シ、歎願書右之通差出ス、同人方落手被致、

【參照四】

二十日達書

板倉甲斐守へ

一旦順逆ヲ誤リ、奉惱宸襟候上ハ、敵達モ可致候処、初秋來家來澁川教之助始正義之者共官軍ニ依頼シ、不得止之情態申出、追々実効モ相顯レ、且今般自ラ陣門ニ出、降伏謝罪之歎願書指出シ、先非悔悟、主從決心之趣ニ付、

御沙汰迄之間左之通可有之候事、

一、寺院謹慎之事、

一、城邑人民預ケ置候事、

一、実効之為武器類預ケ置候事、

但目錄可指出候事、

右之件申付候条、実効相立候様、精々勉励可有之候

事、

九月

奥羽追討白川口總督

御華押

平潟口總督日誌  
板倉勝達家記



七三一 皇学所・漢学所ヲ設ケ宮・堂上以下諸人

ヲシテ入学セシム

十六日、大学ヲ恢張センカ為、皇学所ヲ九條道孝ノ第二、漢学所ヲ梶井宮ノ第二設ケ、規則ヲ定メ、宮・堂上以下諸人ニ諭シテ入学セシム、ソノ達書及規則左ノ如シ、

達書

大学校御取建被遊、天下ノ人才ヲ集メ、文武共盛ニ被為備度

思食ニ候処、方今御多端之折柄、未タ御取調モ行届兼候間、先仮ニ九條家ヲ 皇学所ニ、梶井宮ヲ漢学所ニ被用候旨被

仰出候、就テハ兼テ御布令之通、先宮・堂上及非藏人・諸官人等、望ニ随ヒ入学可致候、就中三十未滿小番被免之輩ハ、成文勤学致候様可心掛旨被

仰出候事、

但皇学所學則開講等、追テ被

仰出候、漢学所來十八日開講被

仰出候間、辰刻集会可有之候事、

依体ハ堂上狩衣直垂、地下ハ麻上下ノ事、

規則

一、国体ヲ弁シ、名分ヲ正スヘキ事、

一、漢土・西洋之學ハ、共ニ 皇道之羽翼タル事、

但中世以來武門大權ヲ執リ、名分取違候者巨多有之、向後屹度可心得事、

一、虚文空論ヲ禁シ、着実ニ修業シ、文武一致ニ教諭可致事、

一、皇学・漢学共ニ互ニ是非ヲ争ヒ、固我之偏執不可有之事、

一、入学ハ八歳ヨリ三十歳迄ニ被定候事、

但老輩ト雖モ有望輩ハ可為勝手事、

一、毎年兩度學業之成否可試事、

一、入学之儀、毎月初五日ニ被定候、尤入学当日正服着用之事、

但入学致度輩ハ、其前月廿九日迄ニ弁官事ヘ可届

出事、

九月(十六日)

行政官

七三二 松平信庸・水野三郎右衛門等軍門ニ降ル

十七日、松平信庸羽前上白川口総督ノ軍門ニ降ル、督府謹  
慎ヲ命シ、ソノ藩兵ヲ荘内征討先鋒ト為ス、是日山形藩  
留守ノ老臣水野三郎右衛門等亦降ル、其ノ関係書類ノ大  
要左ノ如シ、  
七三ノ一

臣信庸誠恐誠惶泣血奉歎願候、先般庄内 御征討之砌、  
名分順逆ヲ誤リ、奥羽同盟ヘ相從ヒ、於出先家来共抗  
王師、彼是奉惱

宸襟候段、恐縮至極、臣子之分モ不相立、先非後悔今  
更何共可奉申上様モ無御座候、然ルニ今般厚

叡慮之程、米澤藩ヨリ奉伝承、恐愕至極奉存候次第、  
素ヨリ奉抗敵

朝廷候儀、毛頭無御座候得共、僻遠之偏土ニ罷在、春  
以来天下実情形勢モ弁別不仕、恐多モ深

叡慮不奉伺、遂ニ右様之事件ニ立至リ候段、畢竟常々  
指揮不行届ヨリ所致ニテ、幾重ニモ奉恐入候、依之速  
ニ城外ヘ退去恭順謹慎、家来末々迄急度謹慎申付、奉  
仰

朝裁、闕藩誓テ勤

王之外ニ念無御座候間、仰願ハ御寛大之 御所置ヲ以、  
謝罪之儀御採用被成下候様、偏ニ奉歎願候、誠恐誠惶

頓首敬白、

九月

源 信庸

松平信安家記

七三ノ二  
二十日督府違書

山村縫殿助ヘ

伊豆守謝罪歎願之趣、被遊 御聽届候、就テハ即今之  
実効相立候様可致候、依之猶御沙汰迄之間、銃器ハ其  
許ヘ御預、伊豆守儀ハ寺院ヘ謹慎可罷在旨可相達、此  
段被 命候事、

但器械・彈藥等目錄可差出候事、

白川口総督府

九月

參謀

松平信安家記

家記又云、九月十八日北陸道 御総督府參謀黒田了介  
殿ヘ、米澤口中山ニ於テ差出歎願書、

別紙歎願書、去ル十五日福島表ヘ重役山村縫殿助ヲ  
以差出置候得共、猶又当御軍門ヘ奉歎願候、以上、

九月

源 信庸

別紙上ニ載スルモノト同シ、故ニ之ヲ略ス、

九月十九日、上山城下へ官軍御練込、黒田參謀ヨリ口上御達、開城之上器械差上候様、尤器械見分致候間、取揃置候様御達ニ相成、其後於城内本丸黒田參謀器械御見分相濟、黒田了介殿退陣之上、重役御呼出ニテ口上御達、

莊内御征討先鋒被 仰付、実効相立候様 御沙汰之  
上、器械不残被下置候旨、御達相成候、

又云、九月ニ至リ米藩ヨリ降伏謝罪之儀談判御座候ニ付、早速承引仕、福島並秋田表出兵之人数早々引上ケ候様申遣、同月中旬迄ニ追々引上ケ申候、右ニ付二本

松表御滞陣御總督府正親町殿へ謝罪歎願書差上候処、九月廿日被成下御聞届、寺院ニ謹慎罷在候様被 仰渡、

難有仕合奉存、恐縮謹慎仕居候内、仁和寺宮様參謀黒田了介殿御達ニテ、莊内御征討之先鋒被 仰付、感憤奉 命、即刻三小隊繰出、是非々々御報恩之実効相立申度、既ニ莊内城下迄繰詰罷在候処、右藩モ同様謝罪歎願申出、戦争等モ無之、人数引取候様御達ニ付、兵隊引取申候、

七三ノ三  
先般莊内

御征討之砌、名分順逆ヲ誤リ、主人和泉守上京中、奥羽列藩ニ相従、家中之者共恐多モ奉抗  
官軍、今更恐懼至極、可奉申上様無御座候、必竟私共心得違ヨリ右之次第ニ相至、重々奉恐入候、然ルニ今般厚

淑慮之程、米澤藩ヨリ奉伝承、恐愕至極奉存候、依之家中一同謹慎恭順罷在、奉仰  
朝裁度奉歎願候、此上何分宜  
御処置被成下度、偏ニ奉懇願候、恐惶謹言、

水野和泉守家来

九月

水野三郎右衛門

水野式膳

朝日山藩記  
水野忠弘家記

朝日山藩記略ニ云、右之通歎願書、九月十七日參謀渡邊清左衛門殿へ進達仕、御落手之上、明十八日二本松表へ罷越、御沙汰相待候様ニト被申聞候、

七三ノ四

忠弘家記ニ云、九月十九日、薩州様御兵隊、米澤ヨリ

上山迄御練込ニ相成候趣ニ付、尚亦弊藩重役<sup>マ</sup>擧族友松彌五左衛門<sup>マ</sup>兩人、同所迄罷越、參謀黒田了介殿へ謝

罪歎願書差出候之処、御受取、附テハ開城、兵器差上候様御達ニ相成、明廿日山形へ御繰込之上、御改可被成旨ニ付、右兩人早々立戻、器械取調本丸へ差出置候処、同日未明山形御通過、寒河江辺屯集之莊賊御追討ニ付、兵器相改延引ニ相成、同廿一日夜会計方西徳次郎殿御入来、城内於本丸兵器御見分濟、謝罪ハ御聞届城ハ御預ケ、兵器ハ其俣被下ニ付、荘内 御征討之先鋒被 仰付、実効相立候迄、一家中謹慎可罷在旨、右之御書付御渡、明朝五半時迄出兵候様被仰渡、即出張仕候、秋田口へ致出兵候兵隊ハ、引揚次第前文同断被仰付候、

又云、同廿二日御達之通、四小隊砲一門繰出シ、西徳次郎差図ニテ、鶴ヶ岡城下迄進入宿陣之処、廿八日荘内降伏謝罪、御聞届ニ依テ解兵スヘキ旨、参謀中達セラレ、十月二日兵隊引揚ル、

七三三 島津久徴・廣兼報告ノ三春・二本松攻略ヲ

届出ス

コノ日、先月廿八日島津左衛門・島津伊勢ヨリ報告シタ

ル三春・二本松攻略ノ届出ヲナセリ、ソノ文左ノ如シ、

届書

前文先月廿八日ノ報告文

右之通弊藩惣宰島津左衛門ヨリ申越候ニ付、戦死・手負・分捕等之書付二通相添、此段御届申上候、以上、

薩摩少将内

九月

内田仲之助

別紙二通

戦死

川上助十郎 (親室)

井上吉左衛門 (良意)

山田十郎 (有次)

尾上為八郎 (正盛)

日高郷左衛門 (為徳)

有川藤七郎 (貞常)

満喜祐次郎 (厚)

藤崎宗八郎 (友次)

手負

松崎奎右衛門

山下喜之助

二木甚兵衛

貴嶋卯太郎

宮里仲庵

吉武彦四郎

榎本新助

山口藤左衛門

市來宗次郎

鎌田彌九郎

深見清次郎

大迫清左衛門

西俣彦五郎

藤田友次郎

松元助之丞

音堅市郎兵衛

藤崎吉次郎

夫卒金 助

同 万蔵

同 市太郎

同 磯吉

同房右衛門

同 源蔵

右二本松攻撃ニ付、戦死・手負右之通御座候、以上、

覚

丹羽 一學

内藤四郎兵衛

服部久左衛門

丹羽新十郎

丹羽傳十郎

丹羽和左衛門

安部井又之丞

千賀孫右衛門

右八人之賊徒城内ニ於テ自殺、千賀孫右衛門儀、家内

都テ切害相果候由、

四斤半砲 二挺

艇忽砲 壹挺

施条銃玉葉 二箱

大砲 八挺

小銃 三挺

右分捕ニ御座候、以上、

九月

七三四 榎本武揚等奪フ所ノ軍艦ニ隻清水港ニ入

ルニ付大総督府之ヲ追捕セシム

十八日、曩時榎本武揚等奪フ所ノ軍艦中、咸臨・蟠龍ニ隻下田港ニ漂到シテ、清水港ニ入りシヲ以テ、大総督府富士・飛龍・武蔵ノ三艦ヲ遣シテ追捕セシム、此ノ日三艦撃ツテ其一隻咸臨ヲ獲、他ノ一隻ヲ逸ス、ソノ概況左ノ如シ、

白尾采女届書

一昨十八日武蔵丸・飛龍丸・富士艦類船ニテ、駿州清水湊へ致着船候、然処賊船咸臨丸壹艘碇泊イタシ居候ニ付、両艦共ニ国旗ヲ以砲発ノ相凶ニ究メ、十一字頃ヨリ両艘ヨリ五六発位宛、致砲撃候処、無間モ賊船ヨリ国旗ヲ卸シ、降伏之体ニ見請候付、止砲直様武蔵丸・飛龍丸ヲ寄セ付、柳河兵隊等乗込ミ、此方ヨリモ士官差遣シ、抑鎮相成候、然処暫間有之、右賊船船將小林文次郎致上陸居候ヲ、徳川亀之助家来朝倉藤十郎当艦へ引列来候付、相捕へ乗セ付、賊船ヲ挽船ニテ当湊五字三十分出帆、只今着船仕申候間、此段御届申上候、以上、

富士艦船將代

辰九月廿日

白尾采女

三条家叢書

九月(十八日)

行政官

七三五 御東幸ニ付達書

コノ日、明後廿日御東幸ニ付、午前六時奉送スヘク、且大宮御所ヘモ伺候スヘキヲ達シ、尚各藩公議人モ亦東京ヘ伺候スヘキヲモ達セラル、ソノ達書左ノ如シ、

明後日東幸奉送ノ達書

在京諸侯

明後廿日

御東幸 御出輦ニ付、即刻為御見立、參

朝可有之事、

御出輦後十五ヶ日之内、一度

大宮御所江為伺御機嫌可罷出事、

但所勞等之輩ハ、重臣名代不苦候事、

東京 御着輦拜承之上、為恐悅 禁中並大宮御所ヘ、

可罷出事、

但所勞以下同文、

(後三行維新日誌にて補正)

七三六 東幸留守中薩藩以下四藩ヘ、洛中洛外ノ

警衛ヲ任ス

十九日、東幸御留守中、本藩及ヒ長州・肥後・彦根ノ四藩ヘ、洛中・洛外ノ警衛ニ任シ、庶民ノ安堵ニ尽力スヘキヲ令セラル、ソノ本藩ヘノ令達左ノ如シ、

薩州

御留守中取締之儀、長・肥・彦三藩ヘ同様被

仰付候間、各申合洛中・洛外嚴肅警衛、諸民安堵候様、

精々尽力可有之旨

御沙汰候事、

但巡邏ニハ不及候、兼テ其持場取極置、臨時非常出

火等之節ハ、其所ヘ人数差出可申事、

九月

行政官

官中日記  
島津忠義家記

七三七 伊地知貞馨軍艦購買御用掛ヲ命セラル

コノ日、伊地知貞馨丞之軍艦購買御用掛ヲ命セラレ、大坂貨幣司ニ出勤セシメラル、其ノ達書左ノ如シ、  
七三七一  
達書

伊地知壯之丞

御軍艦等御買入御用掛被

仰付候ニ付、致滞坂貨幣司へ出勤可致事、

但国元用向ノ節ハ、御暇被下候事、

九月

行政官

官中  
伊地知貞馨履歴書

七三七〇  
十九日達書

伊地知壯之丞

今般貨幣司へ出勤被

仰付候ニ付テハ、会計ノ儀等存付ノ廉モ有之候ハ、

無忌諱申出候様

御沙汰候事、

九月

行政官

官中  
伊地知貞馨履歴書

七三八 議事体裁取調所ヲ東京ニ置キ総裁以下ヲ任ス

コノ日、議事体裁取調所ヲ東京ニ置キ、山内中納言ソノ総裁ヲ命セラレ、外国官権判事鮫島尚信誠・森有禮丞・福岡孝弟・大木喬任・神田孟恪孝、ソノ御用掛ヲ命セラ、ソノ令達左ノ如シ、  
七三八〇  
〔書信〕

山内中納言

当官ヲ以テ、議事体裁取調方総裁被

仰付候間、広ク万国之制度ヲモ相考、時理的当之議事

興立可致様、可相心得候事、

但秋月右京亮・福岡四位・大木民平・鮫島誠藏・森

金之丞・神田孝平へモ、右取調御用掛被

仰付候間、夫々管轄致シ、早々成功可致候事、

九月

行政官

官中  
山内豊信履歴書

七三八〇

秋月右京亮

議事体裁取調被

仰付候事、

但山内中納言へ右御用総裁被

仰付候間、其筋之儀ハ可申談事、

九月

行政官

官中日記  
秋月種樹履歷書

七三八ノ三

各通

福岡四位

大木民平

鮫島誠蔵

森金之丞

神田孝平

右議事体裁御取調御用被

仰付候事、

九月

行政官

職務進退録・福岡孝悌・  
大木喬任以下履歷書

七三九 會津進撃中ノ戦死者並ニ戦争概況報告

コノ日、會津在陣本営ヨリ、會津進撃中ノ戦死者ヲ、同  
今井一兵衛・梅北休兵衛ヨリハ、戦争ノ概況ヲ鹿兒島陸

軍所並ニ京都本營役所ニ報ス、其ノ文左ノ如シ、

当城戦争等之次第ハ、先月二十三日ヨリ白川口兵隊急  
速ニ打入、連日砲戦ニテ、一日モ無絶間昼夜烈敷、我  
々一列去ル十六日城下迄繰入、則ヨリ隊々持場へ番兵  
相勤、病人等之外ハ、一統折角相働事ニ候、且二十九  
日新潟へ着船ヨリ、保田ト申所迄繰出候処、新發田之  
様罷出、大総督宮へ御届候上、方向相定候様トノ事ニ  
テ又々引返、夫ヨリ米澤口ニ出張候様御達ニテ、第一  
先鋒薩州三小队、夫ヨリ勢州・土州・新發田・小倉、  
二陣・二陣・三陣・三陣ト藩々有之、終ニ米澤城下へ  
繰入、諸所難渋之場所勝ニテ、当分ハ本營方へ罷出事  
候得共、未東西モ不弁、昨十八日ニ当城下台場々々廻  
見イタシ候処、死骸粉々、其外武士小路並市中焼払、  
諸道具彼是散乱之体、目モ当テラレヌ次第二御座候、  
尤惣督御事初皆々大元氣御座候間、左様御心得可給、  
申上度儀海山御座候得共、筆略仕候、  
一戦死・手負等人数別紙御届相成候間、其段ハ何モ不申  
上候、此便有之段承存候間、荒々申進候、以上、

九月十九日認

會津城下在陣

今井一兵衛



梅北休兵衛

陸軍所掛

御役々衆

猶々米澤之儀ハ、謝罪歎願ニテ、世子屯人從士拾五人程付添、大総督宮仁和寺様方新發田陣宮へ先日被罷出候付、拙者共宿陣前歩行ニテ通行相成候、実ニ憐成体ニ御座候、旁御推察可被下候、

一積入相成候彈藥等モ、段々追々相屈事ニテ、何分遠路自由不相成候、併随分御立合モ有之向ニ御座候、致乗船候英船罷帰節一封差出置候間、相届候半存候、

會津落城後迄ノ死傷者人名

辰九月廿二日會津落城之飛脚、十月十一日四ツ過着イタシ、戦死・手負ノ人数左之通、

〔戦死力〕

伊佐敷市之進〔直正〕

田村小九郎〔長考〕

肱岡藤八〔長考〕

福留嘉左衛門〔釋世力〕

加藤郷兵衛〔利徳〕

加藤次右衛門〔政勇力〕

小原正八郎〔尚孝力〕

右同遊撃隊八月廿三日同断

二番隊同断

三番隊夫卒

川上喜八郎〔直行力〕

藤井才之助〔親和〕

園田勇吉〔実勇〕

中島岩次郎〔利玄〕

米良仲之丞〔前善〕

猪俣壮七郎〔利孝〕

川崎休左衛門〔長経力〕

萩原強之丞〔兼進〕

松崎壮八〔貞満〕

喜助

藤四郎

二木仲助〔山本寛武力〕

竹内正助〔実行〕

山口彦次〔中利〕

諏訪次郎左衛門〔兼善〕

八月廿六日同断

八月廿七日同断

八月廿八日

川上四郎次〔親麿〕

白砲隊八月廿三日五番隊

丸田喜左衛門〔正徳〕

山下助左衛門下人

榮吉

本營

木原藤一郎〔定政〕

奈良原彌六左衛門〔秘〕

加治木彌九郎

御兵具方夫卒岩右衛門

米良清之助〔清次郎秀綱力〕

締戦死三十人

五番隊八月廿二日二本松之内岩井

深手〔手負〕今井七之丞

深手川上喜次郎

深手西佐一郎

八月廿三日三番隊

松元彦七郎

深手佐々木清右衛門

深手種子島宗之丞

百幸衛下人仲助

堀八郎下人喜之助

八月廿二日

深手大脇源右衛門

益山次左衛門

清次郎

集成館入足

深手村山源左衛門

町夫之甚太

八月十四日

都之城 向井助次郎

八月廿六日

右同 郡山甚五左衛門

右同 山形龍次郎

深手〔右同〕肥田半次郎

深手〔右同〕豊丸與藤次

八月廿三日

二番隊武郷兵衛

右同 築瀬源次郎

明治元年(1868)

八月廿三日

右同	松岡源助
右同	毛利權之丞
右同	筒井清五郎
右同	左近允新六
右同	川崎仲之丞
右同	蒲生彦四郎
右同	市來宗次郎
右同	福島良助
右同	讚良糺五郎
右同	市來彦右衛門
右同	酒匂軍助 <small>下人</small> 秀助
右同	加治木彦九郎
右同	二階堂喜八郎
	松田健四郎
	竹内惣七
深手	大山彌助
	新納壯右衛門
	木藤善右衛門
	夫卒夫小次郎

八月廿三日

深手藤崎勇藏  
深手山田直四郎

八月廿六日

小出健助	若松喜助	田助之丞	奥定輔	松方喜藏	飯牟禮休右衛門	梅北八郎右衛門	淵邊喜次	竹山藤右衛門	藤崎清之丞	和田乘九郎	廻新次郎	汾陽直次郎	肥後平八	梅北伊八郎	谷村源七
------	------	------	-----	------	---------	---------	------	--------	-------	-------	------	-------	------	-------	------

縮手負七拾八人

大山十郎次

淺田政次郎

土師孫一

大山十郎太

川上源七郎

平田九十郎

有馬七左衛門

山口全左衛門

小荷駄方

古河源助

川南東右衛門

種子島宗右衛門

苗山源七

桐野藤六郎

柏原藤太郎

曾木彦二

夫卒

伊助

甚太郎

此兩人九月十一日

七四〇 車駕京師ヲ発シ東京ニ幸ス

二十日、車駕京師ヲ発シ、東京ニ幸ス、輔相岩倉具視・議定中山忠能・外国官知事伊達宗城・参与木戸孝允・大木喬任等従ヒ、長門・土佐・備前・大洲ノ兵前後ヲ護シ、公卿・諸侯皆騎ス、議定山内豊信・参与小松清廉先発タリ、沿道各所ニ於テ式内社ニ奉幣アリ、又養老旌賞賑恤ノ典ヲ举行セラル、ソノ概況左ノ如シ、

東巡日誌ニ云、明治紀元戊辰秋九月二十日辰之刻 御出輦、建禮門ヨリ御首途、後院御所南へ堺町三條東へ、夫ヨリ順路青蓮院宮ニテ御休、昼ノ御膳ヲ奉ル、山階陵天智ヲ御遙拝、拏茶屋及ヒ走井等御小憩、未ノ半刻大津駅へ着 御、

七四一 神奈川府ヲ県ト改メ寺島宗則ヲ同県知事

ニ命ス

廿一日、神奈川府ヲ改メテ県トナシ、同府判事寺島宗則藏

同県知事ヲ命セラル、ソノ辞令左ノ如シ、  
七四一ノ一 神奈川府

今般其府ヲ県ト被改候旨、被

仰出候事、

九月

行政官

官中日記  
太政官日記

七四一ノ二

寺島陶藏

是迄之職務被 免、神奈川県知事被

仰付候事、

九月

行政官

職務進退録  
寺島宗則履歴書

本条達書、進退録・履歴書並二十九日トス、然レト

モ府ヲ県ニ改ムルノ令本日ニ在リ、同日発セシコト

疑ヒナシ、二書恐クハ誤レリ、

七四二 松平容保父子軍門ニ降ル島津伊勢日記

廿二日、諸道ノ官軍若松城ヲ攻囲スルコト三旬、城中力

竭キ、廿日重臣手代木勝任眞若・秋月胤永勝次来リテ降ヲ  
乞ヒ、コノ日容保父子城ヲ致シテ、軍門ニ降ル、ソノ概  
況左ノ如シ、

島津伊勢日記

廿一日 朝霧深ク晴

一昨日城中ヨリ土州ノ方江、手代木直右衛門・秋月貞次郎  
兩人ヲ以テ、降伏謝罪歎願ノ趣有之、猶又今日ニ至リ、  
右ノ次第無相違方ニテ、明日瀧澤村ノ内妙國寺ト申寺  
江、肥後守父子主従五十人計出頭ノ筋ニテ、此方ヨリ  
小荷駄方谷村龍助ヲ遣、仮ノ関門番所等取仕立、明日  
十二字比ニ至リ、城中ヨリ降旗差出候ハ、大手口此  
方固メ場ヨリ、肥後守父子主従妙國寺様差通筈、尤妙  
國寺ノ方江ハ、土州ヨリモ谷村龍助同伴参候、降伏一  
条ニ付テハ、専土州・薩州引請ノ事ナリ、  
一右ニ付、各口持場江襲来ノ者ハ、別段其余探打等不致、  
大砲モ城内江砲発今日ヨリ不致候様、参謀ヨリ各藩江  
達相成候事、

廿二日 朝霧晴

一今日肥後守父子降伏ノ歎願無相違、十字比城下広場江  
幕張ニテ降旗相立候付、参謀ヨリ

朝廷ヨリノ御使番ヲ以テ、各口持場江砲發致間敷旨、表通達シ有之、

朝廷軍監中村半次郎藩、城下大手口幕張有之、仮ノ応接場江御使番同伴差越、尤諸藩ヨリモ一人ツ、附屬、

此方ヨリ淵邊直右衛門差出、右応接場江參掛候処、會津家老初四五人脱刀ニテ出迎、続テ肥後守父子上下脱刀ニテ、供廻十人計召列出會、

朝廷ヨリノ軍監中村半次郎御使番ニテ、毛氈ノ上ニ迎、肥後守父子初家老等ハ、席ヲ隔押卷ノ上ニ謝罪状持出、一通ノ演説、続テ臣下中ヨリノ謝罪状ハ、家老ヨリ差出、

今日十二字迄ニ開城、何モ無滞引渡筈候得共、武器取調方出来兼候付、七ツ時迄可待呉トノ事ニテ、其通聞

濟相成候事、

右謝罪状左ノ通、

一 臣容保乍恐謹テ奉言上候、拙臣儀 京都に在職中、蒙

朝廷莫大ノ 鴻恩ナカラ、万分ノ微衷モ不奉報、其内当正月中於伏見表暴動之一戰、旨意行違不憚近畿奉驚

天聰、深ク奉恐懼候、尔來引続今日迄遂ニ奉抗敵 王師、僻土頑陋ノ訛誤、今更何共可申上様無御座、実

ニ不容天地ノ大罪、措身ニ無所、人民塗炭ノ苦ヲ為受

候次第、全臣容保ノ所致ニ御座候得ハ、此上如何様ノ大刑被

仰付候トモ、聊御恨無御座候、臣父子并家來ノ死生偏ニ奉仰

天朝ノ聖断、但國民ト婦女子共ニ至候テハ、元來無知無罪ノ儀ニ御座候得ハ、一統ノ御赦免被

仰出候様、代テ奉歎訴候、依之從來ノ諸兵器悉皆奉差上、速ニ開城、

官軍御陣門江降伏奉謝罪候、此上万一モ王政御復古出格ノ御憐愍ヲ以テ、至仁ノ御寬典於被仰

付ハ、冥加ノ至難有奉存候、此段 大總督府御執事迄、冒万死奉歎願候、誠惶誠恐頓首再拜

慶應四年九月

源容保

謹上

一 亡國ノ陪臣長修等謹テ奉言上候、老寡君容保儀、久々

京師ニ於テ奉職罷在、寸功モナク蒙無量ノ 天眷、万分ノ一モ未奉報

隆恩、剩觸 天譴、遂ニ今日ノ事体ニ至リ、容保父子城地差上、降

伏奉謝罪候段、畢竟微臣等頑愚疎暴ニシテ、輔導ノ道

ヲ失ヒ候儀、今更哀訴仕候モ、却テ恐多次第二御座候  
得共、臣子ノ至情衷ニ難堪奉存候間、代テ臣等被刃敵  
刑被下置度奉伏冀候、何卒容保父子蒙

聖慈寛大ノ御沙汰候様、御執成被成下置度、不顧忌諱  
泣血奉祈願候、臣長修等誠恐誠惶頓首再拜、

松平若狭重役

慶應四年

九月

萱野權兵衛

長修花押

梶原平馬

景武同

内藤介右衛門

信節同

原田對馬

種龍同

山川大藏

重同

海老原郡治

季同

井深茂右衛門

重常同

田中源之丞(マ)

玄同

倉澤右兵衛

為同

外諸臣共一同

謹上

一、惣人員

百三十一人

但

治官

士中

軍事局共二

一、六十八人

役人

一、六百四十六人

兵卒ノ外下々迄

一、七百六十四人

士中兵隊

一、千六百九人

士中以下右同断

一、五百七十人

病者

一、四十二人

士中ノ從僕

一、二十人

鳶ノ者

一、四百六十二人

他領脱走ノ者

一、六十四人

奥女中

一、五百七十五人

婦女中

惣ノ五千二百三十五人

右ノ外城外出張ノ人員ハ、追テ取調差上可申候、以  
上、

九月

定

一、五十一挺

大砲

但彈葉附

一、二千八百四十五挺

小銃

一、十八箱

胴乱

一、二万二千発

小銃彈葉

一、千三百二十筋

鎗

一、八十一振

長刀

以上

九月

高津久左衛門

島津忠義家記外

七四三 車駕土山駅ニ至リ、供奉群臣等ニ天長節

醮宴ヲ賜ヒ、又祝砲ノ儀行ハル

コノ日、車駕土山駅ニ抵リ、供奉群臣ニ天長節醮宴ヲ賜

ヒ、百官並ヒニ各国領事ニモ、祝酒ヲ賜フ、又此ノ日祝  
砲ノ儀ヲ行ヒ、諸港碇泊ノ各国軍艦モ亦之ヲ行フ、ソノ

概況左ノ如シ、

東巡日誌ニ云、九月廿二日快晴、卯之半刻石部駅 御

發輦、手原村御小休、水口駅御昼、加藤能登守奉迎シ、

藤行李一ツヲ献ス、未之半刻土山駅へ 御着輦、此日

御誕辰ニ付、供奉一同へ醮宴ヲ賜リ、土山駅へ酒三斛

及鯛若干枚ヲ賜フ、

七四三ノ一

東征総督記ニ云、九月廿一日、今上帝明廿二日御誕辰

ニ付、当府在留之兵隊へ御祝酒被 下候御達、諸藩へ

回達致候事、

同二十二日御誕辰ニ付、役所向休息之事、

一諸藩人数書ヲ以、會計局へ被 下之御酒肴受取ニ罷

出ル、尤モ壱人ニ付御肴料金壹朱、御酒式合代リト

シテ錢貳百文宛、會計局ニテ取計候、下參謀衆・御

使番外四局迄ハ、現ニテ折詰御樽被 下候事、

七四三ノ三

今廿二日



御誕辰ニ付、為御祝儀金壹万五千疋、外国官一同へ賜之候間、夫々御頒配可有之候也、

九月廿二日

弁事

小松玄蕃殿

七四三ノ四  
以手紙致啓上候、然ハ来我二十二日、我

今帝陛下降誕日ニ付、於神奈川駅砲台第十二字祝砲二十一發施行イタシ候間、此段御承知之為メ可得御意、如此御座候、以上、

九月十四日

東久世中将

英・佛・米・伊・蘭・李

各国公使閣下

神奈川県史料

七四三ノ五  
英国公使復書

貴国本月十四日附之貴柬拜見致候、然ハ来廿二日貴国皇帝陛下誕生日ニ付、於神奈川砲台、祝砲廿一發可致施行積リ被申越、委細承知致候、右之儀貴国近海ニ有之候我英国軍艦ヲ総督スル官吏並当所英国陸軍頭取へ通達致候処、此佳辰ニ当リ、万国帝王ヲ祝スル通例之礼

義施行スヘキ旨申来候、依テ委細閣下ト共ニ相談スルヲ要ス、可成丈早々得御面接度存候、右御報旁如斯御座候、以上、

九月十六日

外国官准知事

英吉利国特派公使兼全權ミニストル

サア・ハルリー・エス・パークス

東久世中将閣下

神奈川県史料

面接之景況、諸書見ル所ナシ、因リテ之ヲ外務省ニ質セトモ亦詳ナラス、

七四三ノ六

以手紙致啓達候、然ハ来ル二十二日我

皇帝陛下降誕日ニ付、於裁判所聊祝宴ヲ催候間、第六字半ヨリ御来臨被下度、此段得御意候、以上、

九月十九日

井關齋右衛門

寺島陶藏

各国岡士貴下

神奈川県史料

七四三ノ七

崎陽雜報ニ云、九月廿二日 御宸誕ニ付、平明 御国

旗ヲ上ケ、御台場ニ於テ大砲廿一發御祝放有之、随テ碇泊之諸蕃イキリス・オロシヤ・アメリカ其外各々船ヲ粧ヒ、櫓頭高ク 御国章ヲ掲ケ、同数廿一發ツ、奉祝候事、

右二付、府公ヨリ各国コンシユル及ヒ御雇教師等ヲ福濟寺ニ御招キ、御祝酒下サレ歎宴夜半ニ及ヘリ、同日府下ノ数町ヨリ踊子ヲソロヘ、 皇太神宮ヲ始、氏神其外諸社並ヒニ 督府ヘ差出シ、市郷及ヒ近国之老幼男女街頭ニ群集シ、兒童東西ニ奔走シテ、權声鼓動実ニ耳目ヲ驚カセリ、

#### 七四四 中井弘藏・後藤元燁英國女王下賜ノ劍ヲ

英國公使ヨリ贈与セラル

コノ日、去ル二月三十日、英國公使參朝ノ途中ヲ襲撃セシ賊ヲ防ギタル中井弘藏並ニ後藤元燁ニ、英國女皇陛下御下賜ノ劍ヲ、英國公使パークスヨリ贈与セリ、ソノ中井弘藏ヘノ書翰左ノ如シ、

ハルリー・パークス中井弘藏ニ贈ル書

去ル第三月廿三日、僕

皇帝陛下ヘ拜謁ノタメニ參内イタシ候途中、僕等同勢ヘ狼藉者致襲撃候処、其節足下ノ勇猛絶倫之御働有之候段、女王陛下之政府ヘ相達シ、女王深く不堪感激候、依之足下拔群ナル挙動ヲ永ク記念ニ備ヘントテ、態々一劍ヲ製作シテ、コレヲ足下ニ贈リ度ヨシヲ申越候、我輩儀、右証拠品ヲ足下ヘ相渡候役目ヲ命セラレ候事、僕ノ面目何事カ不過之候、就テハ從來貴国ニ疆場之事有之候節ハ、足下カ貴国君民之タメニ忠勤ヲ尽シ、大功ヲ立ラレ候義ハ、明瞭ニ候得共、何卒其節右劍ヲ号令之タメニ御用ヒ相成度、コレ我輩鄙心窃カニ所冀ニ候、

辱知

ハルリー・パークス

中井弘藏様

#### 七四五 官軍庄内ニ入り酒井忠篤謹慎ス

二十三日、官軍庄内ニ進ミ、藩主酒井忠篤米澤藩兵ニ因リテ、寺院ニ謹慎ス、廿七日官軍城ニ入ル、其ノ概況左ノ如シ、

忠實家記抄

同九十八日、武藤半蔵・中世古才蔵・吉野遊平ヲシテ  
 謝罪ノ書ヲ齎シ、米澤ニ遣シ、其周旋ヲ依頼ス、此日  
 謝罪ノ三使船形ニ至ル、米藩神保乙平ノ来ルニ遇テ事  
 ヲ議シ、相共ニ名木澤ニ宿ス原註、是ハ米藩右ノ荘内ヨリ謝罪ノ使者ヲ遣スモ、官軍米沢ノ境ヲ越守スレハ、容易ニ入ルヲ不可得、直ニ米沢世子出兵、所ニ伴フヘキ密意ヲ得テ、港ニ船形迄来リシナリ、  
 同廿日、三使ハ米藩ニ伴ハレテ、米澤世子ノ陣セル長  
 谷堂ヨリ、一里余西ナル一村ニ原註、地宿シテ、周旋ノ事ヲ依頼ス、

同廿一日、米藩千坂太郎左衛門・大瀧新蔵・高鍋藩岩  
 村虎雄三使ノ旅宿ニ来リ、謝罪ノ事ヲ議ス、  
 同廿二日、三使新蔵・虎雄ニ從テ海汐（味）ニ至リ、大網口  
 ニ向ヒシ參謀ニ原註、彦根藩ナリシヤ、阿波藩、使者記隨セスト云フ、虎雄ニ依テ、  
 謝罪願書ノ副ヲ示ス、參謀曰、荘内關川口破レテ国已  
 ニ危急ニ迫ル、謝罪ハ遽ナルニ利アリ、願書ハ事長ヲ  
 要セス、尤同日ニ諸口ノ參謀ニ呈スヘシト、因テ中世  
 古才蔵・武藤半蔵ハ六十里越ヨリ荘内ニ帰ル、米藩神  
 保乙平同伴ス原註、官軍已ニ本道寺迄押詰、容易ニ帰リカタクニヘナリ、吉野遊平ハ新蔵・  
 虎雄ニ從テ、午時海汐ヲ発シ、夜半大石田ニ赴ク、新  
 蔵先ツ官軍ノ參謀黒田了介ニ荘内謝罪ノ使者アルノ趣

ヲ通シ、

同廿三日黎明、新蔵・虎雄謝罪ノ願書ヲ持シテ、參謀  
 ニ行テ歎訴ノ趣ヲ演説ス、參謀曰、使者ハ米澤ノ陣ニ  
 留置ヘシ、是ヨリ軍ヲ進ル所ナレハ、只今返答ニ及カ  
 タシトテ、直ニ舟ニ乗テ大石田ヲ発ス、因テ虎雄ハ米  
 澤ニ歸リ、遊平ハ新蔵ニ從テ清水駅ニ至ル、新蔵又謝  
 罪ノ事ヲ參謀ニ歎訴シ、周旋甚力ム、參謀曰ク、然ラ  
 ハ今夜使者ニ遇テ王師征伐ノ趣意ヲモ可語、是ヨリ左  
 右ヲ報ヘシト、暫シテ參謀只今荘内ノ使者ニ対面スベ  
 シトイフ、因テ新蔵ニ從テ參謀ノ旅宿ニ至リ名簿ヲ出  
 ス、參謀即遊平吾人ヲ一室ニ引ク、左右人ナク、言語  
 應對極テ恭謙、遊平曰、昨日米澤藩大瀧新蔵ヲ以テ歎  
 訴仕、荘内ノ謝罪降伏御許容ノ程、厚ク懇願仕処ナリ、  
 尤謝罪之願書ハ只今御落掌相成ルヘクヤ、參謀曰、昨  
 日新蔵ヲ以テ御歎訴ノ儀ハ略承レリ、御願書ノ副ヲモ  
 拝読シヌストイヘトモ、御願書ハ落掌イタシカタシ、其  
 故ハ先以テ御謝罪ノ儀ハ、御藩論一定シタル上ナルヤ、  
 藩論已ニ一定シテ歎訴仕ル処ナリト答フ、參謀重テ御  
 藩論一定シテ御謝罪ノ上ハ、即今何ヲ以テ清川口ニ守  
 兵ヲ増シタルヤ原註、是武藩隊廿日ニ帰國セルヲ、廿一日ニ清、川口ニ遣シ、各所ノ要ヲ守ラセシユヘナリ、其儀

ハ、謝罪御許容ノ有無難計、因テ聊カ国境ヲ警衛セシ  
処ナリ、且ツ僻遠固陋ノ弊藩、道路ノ浮説ニ疑惑シテ、  
却テ罪ヲ重ルモハカリ難キユヘニ候、只今ニモ謝罪ノ  
儀、御許容ト承ラハ、遽ニ守備ヲ解キ可申ト答、參謀  
又曰、凡王師ノ向フ所抗スル者アルハ、兵威ノ弱カイ  
タス所ナリ、了介大総督ノ命ヲ受テ不服ヲ征討スル上  
ハ、一日モ中途ニ滞留スヘカラス、貴藩ノ御謝罪等ニ  
関係スル事ニアラストイヘトモ、実効ヲ以テ御謝罪ト  
アラハ、其旨大総督ニ相達セン、当時実効トハ一藩ノ  
兵器ヲ出スト、開城スルトノ両条ナリ、弥両条ヲ以テ  
実効ヲ表セラレントナラハ、只今其期ヲ相約セン、御  
藩論御一定之上ハ、尤延日ニ及フヘカラスト、遊平兩  
条トモ謹テ承リヌ、是ヨリ船ニテ下ラハ、明日必鶴ケ  
岡ヘ至ヘシ、明日ヨリ二日ノ間ニ実効相立、国境ノ守  
備ヲ解キ、王師ヲ可奉迎シト答フ、參謀重テ明日ヨ  
リ両日ノ間ニテ、事必ト、ノハン、去ナカラ万一事ノ  
齟齬スアラハ、其詮ナシ、今一日期ヲ延ヘ三日ノ間  
ト相約セン、弥ソレニテ然ルヘクハ、其旨一紙ニ載ラ  
ルヘシトイフ、因テ

今度謝罪降伏仕候上ハ、明二十四日ヨリ三日ノ内、

兵器不残差出シ、開城可仕、諸口ノ人数引入、諸藩  
脱走ノ者ハ夫々一団ニイタシ、番人ヲ付置可申、

ト草按シ、是ヲ參謀ニ示ス、參謀見テ御草按ニテ宜シ、  
然ハ御願書ヲモ落掌セリ、速ニ大総督ニ上達スヘシ、  
御沙汰之次第ハ、ハカリカタシトイヘトモ、社稷血食  
ハ疑ヘカラス、今カク相約セシ上ハ、若其期ヲ違ラレ  
ンニハ、君ノ罪逃ル、所ナカラン、若三日ノ間ニ官軍  
ヨリ発砲等イタスニライテハ、了介其罪ヲ蒙ヘシ、尤  
某一人君ト同船シテ貴藩ニ赴カハ如何、遊平大ニ愕キ、  
謝罪ノ願書御落掌ノ事未タ達セス、國中疑懼ノ折リ、  
万一不慮ノ変ヲ醸サハ、独リ參謀云々ノミナラス、關  
藩罪ヲ増ノ深キニ至ラント、再三強テコレヲ止メ、直  
ニ舟ヲ雇テ莊内ニ帰ル、米藩大瀧新藏參謀ノ命ヲ受ケ  
テ同ク莊内ニ來ル、

同廿四日午時後、遊平鶴ケ岡ニ至リ、委曲問答ノ事ヲ  
演説ス、

同二十六日、忠篤城外ノ寺院ニ謹慎シ、脱藩ノ士ヲ村  
落ニ移シ、国境各所ニ人ヲ馳テ守備ヲ解カシメ、水野  
藤彌・山岸嘉右衛門原註、是ヨリ先嘉右衛門・白井吉郎及小橋小  
八等ノ三小隊ト、前後皆仙台ヨリ歸リシナリ  
シテ、清水ニ遣シテ 王師ヲ迎ヘシム原註、黒田了介巴三古  
口ニ在リ、藤弥等至ル

ニ及テ、単柯ニ乗シテ独リ在  
ニ入ル、嘉右衛門僅ニ隨ラ得

同廿七日、諸方ノ官軍莊内ニ入ル、

七四六 會津在陣薩藩本営ヨリ京都本営並ニ国元

陸軍所ニ會津落城ノ景況ヲ報ス

コノ日、會津在陣薩藩本営ヨリ京都本営並ニ国元陸軍所  
ニ、會津落城ノ景況ヲ報セリ、其ノ文左ノ如シ、

會津在陣本営ヨリ、京都本営役所及ビ御国元陸軍  
所へ報知書

一 八月廿日會津城攻撃トシテ、二本松城下宿陣ノ諸隊、  
当朝八字比出勢、各藩ニハ長州・土州・大村・大垣等  
ノ諸藩一同繰出、当日二本松ノ内玉ノ井着陣、然処旧  
幕並会兵等近郊山ノ村江屯集ノ由ニ付、九番隊・拾貳  
番隊・諸藩ヨリモ、一式小隊人数同所江差出追散、砲  
台乗取打取等モ有之、当日夕刻玉ノ井江人数引揚、翌  
廿一日同所出勢、二本松ノ内石延ト申所迄相進候処、  
同所ヨリ半里位有之會津ノ内ボナイ峠(母成)ト申所江、三四  
ヶ所大丈夫ノ台場構工砲戦イタシ候間、一番・二番・  
三番・四番・五番・六番此六小隊間道ヨリ賊ノ背後ニ

出、正面ヨリハ其外ノ諸隊大小砲ヲ以、手配イタシ攻  
撃イタシ候処、賊徒台場ヲ捨、散々ニ敗走イタシ候付、  
追討ニテボナイ関門迄進撃、其夜同所江野陣ヲ張、同  
廿二日朝六字ヨリ出立、猪苗代迄進撃イタシ候処、早  
クモ賊徒城ヲ自燒シ敗走イタシ候付、惣勢同所江一宿、  
然処戸ノ口十六橋ト申嶮地迄、此勢ニ乗シ取敷候方可  
然進、四番隊・十二番隊・一番隊・大砲隊・御兵具隊等  
相進候処、賊徒川向江待受、暫時致防戦候得共、無間  
モ打破候付、直ニ川向要地江野陣相構、扱猪苗代宿直  
ノ諸隊ニハ、廿三日朝四字ニ打立進撃イタシ、四番隊  
等一所ニ相成相進候処、於諸方ニ防戦ノ賊徒不殘打破  
リ、會津城下江打入、然処士小路町家共老入モ不殘逃  
去、城中ニハ賊徒尽死力防戦候処、城下不殘焼払、各  
藩ノ惣勢迎陣ヲ取テ、同廿四日遠卷イタシ、翌廿五日  
ヨリ天寧寺山ト申要地ヲ取敷、城内ヲ眼下ニ見下シ連  
日砲撃、扱又賊徒火薬庫天寧寺山下江都合五軒有之候  
付、大砲数發打掛候処、都テ焼払、右ハ相応ノ火薬有  
之候付、夥敷呼動イタシ愉快ノ事ニ候、何分平城トハ  
乍申、要害ノ城郭ニテ最安攻抜カタク、然ル折カラ当  
月十四日・十五日、此兩日未明ヨリ前文山ノ上ハ勿論、

其外ノ要地江搦又ハ四斤半砲居付、烈敷終日致砲發候処、城内大キニ動揺イタシ、次第ニ兵氣モ挫候形ニ相見得、城内夫卒等ノ者ハ、夜陰窃ニ拔出候ヲ、諸所堅メ口ニヲヒテ召捕候処、死傷モ不少、其上糧米・彈藥等モ乏敷、城中一同急迫ノ由、糺方ノ上申出候、然処米澤ノ儀ハ謝罪ノ道ヲ相立降伏イタシ、世子儀越後新發田御在陣兵部宮様御方江罷出候処、庄内征討ノ奉命一千人余ノ兵隊引卒、庄内表江出兵イタシ、勿論會城攻撃ニモ同様人数差向ケ、最早実効モ相立、然処当城ノ儀モ、追日切迫ノ勢ニ候半、秋月悌二郎・手代木直右衛門其外一兩人城内ヨリ窃ニ忍出、当地出兵ノ米藩江相付、謝罪降伏ノ歎願相立候付、其通リ御許容相成、一昨廿二日肥後父子致降伏、左候テ城中兵器ノ儀都テ取揃、城外江差出、前文父子ノ儀当日昼四字比出城、手廻ノ人数四拾人位召列、各脱刀ニテ供イタシ、勿論肥後父子ノ儀上下着用ニテ、当城ヨリ半道計有之候瀧澤村ノ内、妙國寺ト申寺院江被召置、中途警衛ニハ九番隊被仰付候、尤妙國寺ノ儀モ各藩ヨリ警衛相付候、其外旧幕脱走等ノ兵士モ數百人有之、右ハ猪苗代江此涯被召置、是以各藩ヨリ同断被相付候、且

又城中手負人ノ儀モ都合五百人余有之、是以城外進村江被召置候、大形右通ノ手順ニテ、城請取ノ儀ハ明廿四日被相定、依テ會津領ノ内諸所殘賊屯集モ有之候得共、左迄ノ事ニモ無之、右ハ夫々降伏ノ者ハ、一手ヲ以所置相付賦ニ候、右通ノ件々ニテ、會城ノ儀最早鎮定ニ励候半欤、且又仙臺ノ儀モ降伏ノ段相響、庄内ノ儀モ其通リノ勢是又相達候得共、未慥成確証等承得不申、

一 当月十一日、越後表ヨリ七番隊・十四番・四番・砲隊・外城武番・同四番、差引ニハ島津小平太・喜入多門・川南東右衛門・淵邊直右衛門、当城江着陣、同十六日島津隼人一列宮城六番々兵隊・諸郷遊擊隊・臼砲半座着陣、翌十七日外城一番着陣相成候、

一日光口ヨリ出兵ノ加治木隊当月五日着陣相成候、右通諸隊着陣相成候付、一同拳テ攻撃ノ手配十分ノ事ニテ、無此上仕合御同慶存候、前文通当城降伏最早属平均候付、一番隊・二番隊・三番隊・四番隊・五番隊・六番隊・一番遊擊隊・一番大砲隊・二番大砲隊・臼砲打手此諸隊、明廿四日当城出勢、御国元ノ様帰陣被仰付候、右之通會城攻撃等ノ次第、大頭及御問合候間、

被申上候儀共旁可然御取計可給候、尤別冊死傷ノ名前取シラヘ差遣候、此段早々申進越候、以上、

會津在陣

九月廿三日

本營

京都

本營役所

御国元

陸軍所

【参照】

伊地知正治ヨリ大久保一蔵ニ贈ル書

尚々乍末筆、先生ニも此中俄ニ御上京旁之由、御配

慮之筈奉存候、

其後日夜攻撃不熄候故、賊徒遂ニ窮迫ニ及ひ、去ル廿

二日松平肥後父子軍門ニ来て降伏、当地妙國と云梵宇

ニ蟄居謹慎、同日大小ノ砲器不残差出、

廿三日家来不残猪苗代ニ引退、大小相渡謹慎、今日城

受取之都合ニ相成申候、抑当城之儀方五六町位之平城

ニ候得共、石垣之曲折巧ニ妙を得、殊ニ必死之兵三千

を以て、大砲五十門・小銃式千八百挺、中々数月間ニ

可攻落ニ無之候得共、初メ打入之砌、殊之外急速ニて

粮米・火薬城中ニ不運入候内ニ攻寄、致放火候故、老若男女五千之者共食用ニ困ミ、数千挺之銃砲ハ弾薬ニ乏敷、攻囲三十日ニして落城ニ及候次第、畢竟諸将士之勉勵と

皇運之天幸ニ由る処と奉存候、今日須磨・平田両士出立候付、不取敢此段得貴意候、敬白、

辰九月廿四日

伊地知正治

大久保一蔵様

侍史中

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

七四七 車駕四日市駅ニ至ル又沿道府藩県ノ民営

業常ノ如クセシメラル

二十四日、車駕四日市駅ニ抵り、途次神宮ヲ遙拝シ給フ、

初メ車駕過グル所、民皆其業ヲ休ミテ奉迎セシカ、此日

沿道府藩県ニ令シテ、営業常ノ如クセシメラル、ソノ達

書左ノ如シ、

七四七ノ一 沿道府藩県へ達書

御道筋之宿駅農商共、

御通輦前方ヨリ職業相休居候様子ニ相聞へ候処、元來

為 御綏撫

御巡幸被為在候御儀ニ付、下民之情狀被為知食度、就テハ農商共孰レモ平常之通職業相勸候ヲ、其俛

御巡覽被為遊度 御主意ニ候条、此旨相心得、店向取片付、職業相休候儀無之様

御沙汰候事、

七四七ノ一

東巡日誌ニ云、九月廿四日卯之半刻、關駅御發輦、

伊勢兩宮 御遙拜、龜山駅・庄野駅御小憩、石藥師駅

御昼休原註、御講ヲ奉ル、例ノ如シ以下略之、日永村御小憩、申ノ刻四日市駅

御着輦、是日藤堂和泉守、及ヒ世子大學頭等、使者ヲ

以奉窺 天機、且御小脇差原註、包裏一腰・生魚一桶ヲ進獻

ス、増山對馬守亦使者ヲ以奉窺 天機、

七四八 南部利剛謝罪書ヲ奥羽鎮撫總督府ニ奉リ

降ヲ乞フ

コノ日、南部利剛陸中盛岡藩主其重臣三戸與忠部ヲ遣ハシ、謝罪

書ヲ奥羽鎮撫總督府ニ上リテ降ヲ乞フ、督府実効ヲ表ハ

スヘキヲ責メテ之ヲ卻ク、明日ソノ子利恭ヲシテ復軍門

ニ到ラシメ、首謀者榎山隆吉吉渡ヲ檻送セント請フ、督府

乃チ之ヲ収ム、ソノ關係文書ノ概要左ノ如シ、  
七四八ノ一

利剛謝罪書

臣利剛

恐惶頓首奉歎願候、当春會津容保

御征討之砌、奉應援之

命速ニ出兵仕候得共、同藩謝罪之儀、仙・米兩藩ニテ

周旋ニ付、同盟仕候、其後秋藩及反盟候故、同盟諸藩

進撃之上、弊藩ヘモ屢催促ニ付、遂ニ進撃候処、今般

重臣三戸式部於京師

御内命ヲ蒙リ、且久我殿ヨリモ御内諭有之帰国仕候ニ

付、至仁好生之

勅慮ヲモ相同奉感佩、

朝廷之御趣意柄ニ相戻り候儀ト、今更悔悟不堪恐懼之

至候、全ク東陲之國柄、当今之情態通徹不仕、一時誤

方向重々奉恐入候、然処今度

御内旨相蒙リ、困情モ一定仕候上ハ、奉仰

朝裁候外他事無之、深謹慎罷在候、臣雖不肖勤

王之素志ハ、当夏 九條殿弊藩御滯陣中奉建言候通、

誓天地二念無御座候間、前後御憐察被成下、蒼生安堵



ニ至候様偏ニ奉歎願候、誠恐誠惶謹言、

九月

沢為量征討記録  
南部利恭家記二百四日

七四八二

利恭家記ニ云、九月廿四日、秋藩野木馬之助・谷田部三吉鹿角松山へ参り、秋田十二所本陣へ出兵イタシ候家老三戸式部・用人中野舎人罷越、歎願書參謀前山清一郎へ致進達候、

右歎願書差出候処、於京師 御内命及ヒ 久我殿御内諭共戦争前之儀ニテ此節難取上、依テ別段実効相立、謝罪歎願ニ無之テハ、御取上難被成旨被申、歎願書被相返候ニ付、美濃守所勞中故、長男彦太郎 九條殿御本陣へ直參謝罪、且首謀之重臣樺山佐渡禁固差出可申、右兩条ヲ以謝罪之実効ニ被成下度段申上候処、御許容相成候ニ付、左之書面差出ス、

乍恐奉歎願候、先刻委曲申上候通、来月三日迄ニ降伏謝罪之証相立、猶又私儀爰許へ罷出候間、夫迄何分御進軍御扣被成下置度奉歎願候、以上、

九月廿五日

三戸式部與忠推判

官軍參謀

御中

右ハ前山清一郎へ式部差出之、

利恭家譜ニ云、九月二十四日三戸式部十二ヶ所ニ至リ、謝罪書ヲ參謀局ニ上ル、収メラレス、其命ニ曰ク、其効無キヲ以テ、罪ヲ謝スルヲ得スト、明ル二十五日復書ヲ上リ、利剛ノ長男彦太郎自ラ総督府軍門ニ到リ、罪ヲ謝シ、首トシテ事ヲ興ス者樺山佐渡ヲ禁錮シ、之ヲ献リ、以テ謝罪ノ効ニ供セント請フ、乃チ収メラル、

【參照】

大山綱良書翰略二通

乍恐奉啓上候、日々冷氣相加候処、先以御機嫌能被為遊御進軍、恐悅御儀奉拜賀候、陳ハ過日来北越之官軍モ同時ニ相合シ、既ニ賊地へ突入候場合ニ相至リ候処、去ル二十三日、莊内重臣於清水駅歎願書差出候、当日ヨリ二十六日限り開城降伏ニテ、諸口人数早々引揚謹慎申付候趣ニ付、二十七日前晚ヨリ清水港ヨリ相進候処、何レモ期限通奉恐縮候テ御受致シ、一昨日ヨリ一同鶴岡へ繰込、昨日器械不殘相納候ニ付、跡之儀越後參謀へ相譲リ置、尤山形・上ノ山・天童モ降伏開城器械引上、何レモ為先鋒莊内へ繰込、松山・新屋両口入

数不残、鶴ヶ岡へ繰込候様相違申候、然ル処松山・村上・龜田之儀モ情実巨細言上敷願申出候ニ付、都テ採用相成、是又越後口引請ニ相決シ申候、就テハ昨夜於清川〔形奥之巻〕、船越へモ出会、最早南部之処置至急ニ相弁シ候上、一先諸軍江戸迄引揚之儀ニ御座候間、左様思召被遊、何分ニモ速ニ御成功、実以恐悅無此上御安慮被遊下被候様乍恐奉願候、イツレ賊徒御処置方之儀ハ、両三日中当地事済之上、一往秋府へ罷帰、万事御親可仕、尤船越明日ヨリ南藩一件ニ付、秋府へ罷帰申候ニ付、其儀モ委細可奉言上候、且又四條殿仙臺へ御出張候哉ニ御座候処、彼ヨリモ今晚御使番当地へ着之趣申来候、此段不取敢形行奉言上候、乍恐

二十五日迄進軍見合セ呉候様ト之儀ニ付、上杉口之兵此手之兵ト相合シ、二十六日払曉ヨリ、荘内城下へ兵士繰込申候処、左衛門始家来末々迄モ謹慎恭順相尽シ居候ニ付、西郷吉之助・黒田了介・格之助共、城内点檢受取済、諸器械等受取、格之助儀昨夜新莊マテ罷帰リ申候、諸口之兵士モ一同鶴ヶ岡へ一応繰込ミ、諸軍会合之上ハ直ニ夫々引揚候積ニ御座候、

大山格之助

綱良



〔復古記にて補正〕

副御総督様

澤三位様

船越洋之助

大山格之助

九月廿九日

十月朔日

打続風雨烈敷、御道中嘸御困リ被為成候儀ト御察上候、然ハ荘内ノ儀ハ、上杉口之官軍へ謝罪降伏申出、去ル

七四九 藩庁急変ノ際各局諸員ノ勤務場所・人名等調査ヲ命ス

コノ日、藩庁ニテハ、大隊長ヨリ急変ノ際、各局諸員ノ勤務場所、其ノ人名等精微ニ調査スヘキヲ命セリ、ソノ達書左ノ如シ、

達書

急変ノ節ハ、毎局奉行頭人并筆者等何人・何某々ハ勲場詰、何人・何某々ハ外務へ被仰付候テモ差支無之段、御用見合相成候付、精微ニ取調、来ル廿八日限当局江可申出事、

但御三役ヲ除其外年輩ニ不拘、都テ取調被申出、以後入り代り等之節ハ、時々名前可被申出事、

辰九月廿四日

大隊長

但シ調査書ヲ逸ス、

七五〇 會津在陣軍監桐野利秋若松城開城始末

書ヲ總督府ニ差出ス

二十六日、會津在陣軍監桐野利秋中村半、若松城開城始末

届書ヲ總督府ニ差出セリ、其ノ届書左ノ如シ、

八月廿九日藤原口迄罷出候処、最早先鋒總督ヨリ諸道進軍之御沙汰御布告ニテ、藝・肥・宇都宮・大田原人

数モ進ミ、追テ去ル朔日大内村ニテ會議、同二日六字同所ヲ繰出シ、火玉峠ニテ相揃、八字ヨリ關山へ相掛リ戰爭相始、聊賊相防候得共、無間攻拔キ椽澤村へ相掛リ候処、烈敷防三方ヨリ賊砲發、味方苦戦ト相成、

余程指揮仕候得共、諸勢何レモ進兼、死傷等モ不少、不得止關山迄引揚ケ罷在候処、六字十分亦々賊襲来、シハシハ防戦候へトモ、地利不案内、殊ニ夜ニ入不得止火玉峠迄引揚、同三日藝・肥・大田原人数ハ不殘又々大内村迄引揚休兵、薩一小隊・黒羽三小队、宇都宮・館林・中津・人吉・今治都合五小队計六字ニ大内村ヲ繰出シ、火玉峠ニテ相揃ヒ、九字ヨリ關山へ押寄せ、聊賊防戦直ニ取返シ、続テ椽澤村迄進撃為致候処、前条同断賊烈シク防戦央ニ、刀鎗ニテ伏居、不意ニ薩人数之横ニ打出接戦等仕リ、味方甚苦戦ニ相見候へトモ、一步モ不為引、昼夜防戦仕、同四日引続キ猶軍配、薩半隊左之山上へ狙撃、同館林一小隊・宇都宮同断、右之山へ黒羽・中津・人吉・今治之人数ヲ狙撃ニ上ケ、山上・本道一同烈シク進撃為致候処、五字十分椽澤村攻拔キ、會城近在本鄉村迄宿陣罷在リ、同五日六字揃ニテ進軍、津川陟押掛候処、聊賊相防候得共、無間追払城下口河

原町ト申所迄打入候ニ付、同所へ相揃置、宇都宮一小隊・黒羽同断・薩同断柳原口ヲ打通リ、二本松ヨリ打入候、会議所迄引合ノタメ罷越候処、跡扣居候人数ノ処へ、賊城ヨリ追々繰出シ、四方ヨリ襲来苦戦之旨報知ニ付、早速立戻候ヘトモ、夜ニ入味方大ニ散乱、何レモ不分諸所へ引揚、同六日漸々人数相揃、十字ヨリ繰出シ、柳原・河原町・深川村・幕之内村諸所屯集之賊へ押寄始戦之処、聊賊防戦致シ候ヘトモ、四字ニ悉取戻シ、城ヨリ十七八町計近在飯寺ト申村へ、黒羽・宇都宮・中津・今治・館林・薩宿陣、深川村へ薩州・肥前、幕之内村へ大田原・人吉等ニテ相固メ申候、同八日朝、飯寺村宿陣へ長岡・會而藩之賊四百人余、六字比ニ不意ニ襲来、中津・今治ノ番兵ヲ打破リ、長岡賊宿陣へ打入、烈シク防戦仕候処、九字ニ到リ悉賊敗走、宇都宮手へ長岡賊打取生捕都合三十人余、右之内生捕十三人内一人重臣之由、山本帯刀右一人ハ越後口ヨリ打入候人数へ引渡シ、彼方ニ於テ斬首申付、其他モ同断、同十四日八字揃ニテ攻城、日光口人数ハ諏訪・山口・河原町口・南口ヨリ打入、引続キ城内四方取切押詰、昼夜番兵防戦罷在、然処同十六日夜、肥後父子

降伏之使者秋月悌次郎・手代木直右衛門・小森一貫齋軍門へ降伏歎願申出候ニ付、同二十日右之者共御返シ相成、同二十二日八字城追手先三ヶ所へ、白地ニ降参ト書候旗相建候ニ付、御使者唯九十九・山縣小太郎・軍監中村半次郎追手門迄罷越候処、城追手内口迄出迎トシテ安藤熊之助・鈴木為輔罷出、次ニ重臣梶原平馬・内藤助右衛門・軍務局秋月悌次郎・大目附清水作右衛門・目付野矢良介右各迎ヒ迎罷居申候、何レモ降伏、夫ヨリ主人父子降参之都合相伺候ニ付、城外へ被罷出候様相達候処、右重臣之者兩人一応城中へ立戻リ、即刻主人父子、右重臣共召連軍門へ降伏謝罪之歎願書持参ニ付、御使番ヨリ取次申候、続テ重臣共之歎願書差出候ニ付同断、夫ヨリ一応主人父子城中へ立戻リ三字ニ退城、妙國寺へ謹慎罷在申候、其外器械之儀モ不殘引渡、家臣兵隊之儀ハ、同廿三日十字ヨリ退城、猪苗代へ米澤藩護送ニテ謹慎罷在申候、猪苗代警衛彦根・大村藩ニテ仕候、其余病人之儀ハ青木村へ立返キ謹慎罷在申候、同廿四日四字ニ會城請取ニ付、御使番唯九十九外一人軍監拙者相揃罷越候処、追手中門口迄重役山川大藏・軍事奉行小森一貫齋・大目付竹村助兵衛・器械奉行相

馬繁作・作事奉行左竹四郎・大目付日向信左衛門、右  
出迎トシテ罷出、本丸ヨリ引渡、二之丸・三之丸同断

首尾七字相済引取申候、城護兵之儀ハ各藩ヨリ罷出申  
候、前条戰略手負・死傷委細之儀ハ、藩々ヨリ御届可  
申上候、肥後父子降參之始末、自ラ參謀衆ヨリ御届可  
相成筈ニハ候得共、不取敢此段早々御届申上候、以上、

會津在陣軍監

九月廿六日

中村半次郎

【参照】

北征日誌ニ云、九月廿二日申下刻、肥後父子並從臣二十  
人許皆脱刀、城外妙國寺へ立退ク、猶一通之願書如左、

一人足共相連候儀、此方ニテ町在へ申聞度事、

一病人婦女子二・三之丸ニ居所無之、付テハ立退場所

へ直ニ為立退度候間、

官軍御繰込御猶予奉願度事、

一諸雜物追々引取候様仕度奉候事、

一人數引取之道筋、三ノ丸北門ヨリ天寧寺町口へ立退

候様仕度事、

一足痛人ハ野外ヨリ馬ニ乗候様仕度奉願候事、

一不得止用向有之往来致シ候者ハ、御印鑑御渡シ被下

度奉願候事、

一 婦女子幼弱ハ、北方村々

官軍御屯集所之外ニ居住為致度奉願候事、

一 祖先之神器並相伝ノ宝器・粮具、引取度奉願候事、

翌廿三日巳時、兵士三千人追手北門ヨリ天寧寺へ引払、

城中死骸累々、臭氣擻鼻ト云、及申時婦女子一同城外

へ退出ス、

七五一 燈明台築造ノ為英國工技師ヲ薩藩以下六

藩ニ派遣スルニ付便宜ヲ与フヘキヲ達ス

二十七日、海岸ノ要所ニ燈明台ヲ築造センカ為ニ、英國

工技師ヲ、本藩・紀伊・土佐以下六藩ニ派遣シ、地所ヲ

選定セシムヘキニヨリ、便宜ヲ与フベキヲ令セラレ、ソ

ノ文左ノ如シ、

七五ノ一 達書

今度海岸要所へ、燈明台築造被

仰付候ニ付、地所為可相撰、英國器械匠一人、長谷川

三郎兵衛同伴火船ニテ、其地へ見分ニ被差立候ニ付、

着船之上ハ万端不都合無之様可取計事、

但不日横濱出帆ニテ、大坂着船之上直ニ発向ニ相成候事、

九月 二十七日

行政官

官中日記 二十七日

七五二ノ一  
有川伺書

今度海岸要所へ、燈明台御築造被

仰付候付、地所為御撰、英国器械匠一人長谷川三郎兵衛殿御同伴、火船ニテ国元へ御見分ニ御差立相成候付、着船之上ハ、万端不都合無之様可取計旨、御達之趣承知仕、直様国元へハ、早急申遣置候得共、遠国之儀ニ付、自然右火船早く着船イタシ候モ難計候付、右出帆之節ハ、御案内旁爰元詰等之者、人召乘差遣度御座候間、其筋ニ被仰付被下候様奉願候、左候テ右火船出帆之節ハ、前以御達被下候ハ、右御案内之者、直ニ大坂表へ差下候様可仕候、此段申上候、以上、

薩摩少将内

九月廿七日

有川十右衛門

弁事

御役所

七五二ノ三  
二十八日批紙

書面之趣ハ大坂府へ申達遣候間、乗船為致候者此封状持參、早々下坂仕居、大坂府並町田五位・長谷川三郎兵衛へモ承合、都合次第乗船可為致、急速之儀ニ付大坂ヨリ注進相待候儀ハ、難被及御沙汰候事、

弁事局叢書

七五二ノ四  
封状

薩州ヨリ別紙願書差出候間、附紙之通御差図相成候ニ付テハ、同藩人申合都合宜敷候へハ、同藩人、人召為乗組取計可有之事、

九月廿八日

弁事

大坂府御中

町田五位殿

長谷川三郎兵衛殿

弁事局叢書

七五二 藩ノ軍隊慰問使得能良介若松城下ニ到ル

島津伊勢日記

二十八日、藩ノ軍隊慰問使得能通生良介若松城下ニ到リ、忠義父子ノ慰問書ヲ示シ、酒肴料ヲ下賜ス、其ノ状況及ヒ慰問文左ノ如シ、

島津伊勢日記

廿七日 晴

一得能良助、御国元ヨリ

太守様

中将様御使者ニテ、当地迄差越、諸隊長々ノ軍務ヲ御慰勞被下、御沙汰等被成下、御酒頂戴被 仰付筈ニテ、

今晚則ヨリ諸所江、酒ノ用意小荷駄方江相達候事、

廿八日 雨

一昨日得能良助、

御両殿様ヨリ御使者ニテ、諸隊長々ノ軍務慰勞ニテ、御筆ノ仰出并御酒等諸隊江被下候、尤御酒代二百五十両、得能良助ヨリ本宮方へ相渡候付、五十両丈ハ相馬

口出軍ノ諸郷三小隊江被下筈ニテ、彼方差引堀直太郎

並隊長宛ニテ、明日足輕兩人才領ニテ、当地ヨリ差遣

筈候事、

一皇命ヲ蒙リ、逆賊征討ヲ奉シ候テ致尽力候儀、臣子ノ職分相当ノ儀トハ乍申、各順逆ノ名義ヲ致明弁、当春

ヨリ追々賊徒令敗潰、城ヲ拔キ砦ヲ碎キ、其際難戦苦闘モ有之候処、粉骨碎身死力ヲ尽シ、日ヲ積月ヲ重ネ愈精力堅固ニシテ、終ニ敗走ヲ不取、実ニ古戦ニモ無所愧十分ノ勵忠節之程令感賞候、其内戦死ニ至リ候モ不少、或ハ手疵療養不叶モ有之、無限痛心慟哭ノ至、手負モ又余多有之甚哀傷セシメ候、此上如何計力及大儀候モ不被量候得共、兎角平治ニ不至候テハ、御徳威モ難被為立、万民塗炭ノ苦ミモ、ノキ兼候次第ニ候間、猶又宜ク尽力有之候様頼存候事、

八月

久光

忠義

右ノ通被仰出候付、拙者旅宿於本宮隊面々召出、戦兵一統江モ拜見被仰付筈候得共、本宮手狭ノ事故、写取候テ戦兵一統江拜見為致候様相達候事、

七五三 大総督府奥羽諸藩主ノ東京護送等ヲ定メ

白河・平潟兩道ノ総督ニ令達ス

二十九日、大総督府奥羽諸藩主ノ東京護送、或ハ藩地謹慎等ノ処分方ヲ定メテ、白河・平潟兩道ノ総督ニ令達ス、

其ノ達書左ノ如シ、

白川・平瀉両道總督へ達書

松平肥後其外、桑名・備中松山・二本松・棚倉等之如キ、居城ヲ捨本國ヲ脱走スルノ大小名ハ、悉ク東京へ可被差送候、最家来小姓之者五人ニ限り候、尚家来共迄モ乘輿ニテ、兵隊ヲ以為警衛、一小隊ハ御附可被成候事、

一仙臺・米澤・天童・上山等之如キハ、於領地謹慎ノ様御所置可被 仰付候事、右之通夫々申入候也、

九月二十九日

大総督府參謀

#### 七五四 日付不明藩庁達書

本月中、日付不明ノ藩庁ニテノ達書左ノ如シ、

<sup>七五四ノ一</sup>一給地高出米総ノ儀、当年ヨリ定総被仰付、定総帳面取

仕立夫々申出相成候通、御高奉行ニ於テ取調治定相成候付、左之通被仰付候、

一御蔵々下代等江免帳渡方之儀、是迄御蔵入免帳同然之振合を以可相渡候間、高直又ハ水損等ニ付、出米上納相替候節ハ、高主ヨリ届可申出候付、定総帳面ハ勿論、

免帳仕付等御高奉行ヨリ何篇無手拔様可致取扱候、

但出米上納相替候節ハ、高主ヨリ届申出候様別段申渡候間、万一等閑ニ召置候者モ有之候ハ、取調可申出候、

一前条同断付発起候事候間、御蔵入并直取納取分混雜之儀無之様取計、尤水損等ニテ出米上納相替候節ハ、申渡置候通、証文渡方等ノ儀、郡奉行ヨリ無遲滞可致取扱候、

右之通被仰付候条、郡奉行并御高奉行江申渡、可承向へモ可申渡候、

九月

右衛門

<sup>七五四ノ一</sup>一給地高出米総之儀、当年ヨリ定総被仰付候、付テハ発

起之事ニテ、取調方付百姓トモ混雜之儀有之候テハ、可致迷惑事候間、高主ヨリ御高奉行所ニ申出置候通、尚亦何方御蔵江上納米何程、又ハ直取納等之員數并持高門名等迄モ相記、村々庄屋江申越候様被仰付候、左候テ以米水損等ニテ、出米上納相替候節ハ、是迄之通、郡奉行ヨリ証文相渡候間、御高奉行江早々形行可申出候、万一等閑之儀有之候テハ、屹ト可及沙汰候条、此



旨向々江不洩様早々致通達、諸郷江モ可被申渡旨、地頭江可申渡候、

但高直等ニ付テハ同様申付候、

九月

右衛門

龍衛

七五四ノ三  
一海軍所調役

一六人賄料

一御役順陸軍所調役頭

右之通、御役被召建候、左候テ海軍所定式方并會計出納方之儀共、何篇是迄御船奉行取扱之通被仰付候条、此旨旨申渡、向々江モ可致通達候、

九月

右衛門

# 鹿児島県史料編さん関係者

## 顧問

聖心大学 講師 大久保利謙  
女子大学 教授 竹内理三

早稲田大学 教授 兒玉幸多  
学習院大学 学長 沼田次郎

東洋大学 教授 山口啓二  
前東京大学 教授 小西四郎

東京大学 教授 山口啓二  
東京大学 教授 山口啓二

鹿児島女子大学 教授 北川鐵三  
短期大学 教授 北川鐵三

全 教授 村野守次  
鹿児島大学 教授 桃園惠真

## 委員

全 教授 原口虎雄  
鹿児島大学 教授 原口虎雄

全 教授 四本健光  
全 教授 四本健光

全 教授 五味克夫  
全 教授 五味克夫

全 教授 桑波田興  
全 教授 桑波田興

鹿児島県立短期大学 教授 芳即正  
鹿児島県立短期大学 教授 芳即正

前宮之城町教育長 山下千本  
前宮之城町教育長 山下千本

前鹿児島県維新史料編さん所編集課長 田島秀隆  
前鹿児島県維新史料編さん所編集課長 田島秀隆

田島秀隆

## 所長 総務課

本田省吾  
国分友清  
安田繁  
野添峻郎  
西迫清成  
本田親宣  
山口範雄  
萩原佳代子  
田實勇  
下堂園純治  
宮下満郎  
古賀秋好  
堂満幸子  
久留涼子  
坂口香代子  
伊東浩子  
川崎和子

## 編集課

本田省吾  
国分友清  
安田繁  
野添峻郎  
西迫清成  
本田親宣  
山口範雄  
萩原佳代子  
田實勇  
下堂園純治  
宮下満郎  
古賀秋好  
堂満幸子  
久留涼子  
坂口香代子  
伊東浩子  
川崎和子

# 鹿児島県史料

忠義公史料 第五卷

昭和五十二年十一月十日印刷  
昭和五十三年一月十日発行

編集 鹿児島県維新史料編さん所

発行 鹿児島県

印刷 凸版印刷株式会社